

---

# ミニマムピターハート

みみっくす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マムビターハート

### 【著者名】

ミミツク

### 【あらすじ】

優等生の弟、数真。  
もちろん腹の立つ美形。

私は、平凡地味な自称癒し系の姉ですがね。  
仲良し姉弟なんですよ私たち。

## プロローグ

私の弟は数真といつ。

1つ違いのこの弟はなんでもそつなくこなす優等生だ。

テスト前でも勉強しないで毎日たーっぷり寝ているくせに、進学校のウチの高校でいつも成績は上の下ぐらいにつけているし、部活では昔から剣道を続けていてそこそこには強いらしい。いつも何かの大会では団体戦メンバーに選ばれていた。

それよりもなによりも、数真は爽やかな笑顔をいつも周囲へ垂れ流している。

面倒見がよくて頼まれれば体育祭の実行委員になったりめんべくさうな役回りをほいほい引き受けている。

ヤツのバカなところだ。

しかし『倉橋姉弟』とウチの高校で言えばピンと来ない一年生はないど…これは友達のミヤが教えてくれたしょもない話だ。

なんのことか?

よくある話だ。

出来のいい社交的な優等生の目立つ容姿の弟に、真面目な割に成績もぱつとせず平凡なアタマと容姿の大人しい地味な姉がいる。

ミヤの社会人の姉はウチの数学教師と付き合っているんだとかで他学年事情にも変に詳しく述べめんどくさい。まあ余談だけど。

ミヤはたった一人の親友というか幼なじみだ。

数真と私が小さな頃からの付き合いで昔はよく三人で遊んだ。

数真は小さな頃から優秀でそれに比べていたつて昔からやはりフツーの私。

それは能力や性格だけには限らなかつた…

例えば、たまに親の知り合いとか親戚の、見知らぬ大人から可愛いとか綺麗とお世辞を言われる機会があつてもね…

彼らは必ず私の側にいる畠田秀麗な数真に目を奪われるのだ。『将來楽しみな息子さんね!』

そして慌てて付け加える。

『…お嬢さんも、可愛らしいしね』

ありがとうございます。

……でもねー…

数真を見つめたままでほめられてもうれしくもなんども。

しかしここでお礼を言わないと私が失礼なヤツになつてしまつから、いつも私は彼らにきちんと笑顔を向けていた。

どっちが失礼なんだよ！？  
と内心フツフツと怒りながら。

今なら呆れて済ませられるが、当時はまだ幼稚園児だったので本氣で傷ついていた。

親戚も親も数真にばかり目がいく日常。

月日がたち中学生になると、今度は数真狙いの女に『将を得んとす

れば『とばかりに近付かれた。

ミヤは唯一の例外で数真に興味を示さなかつたからこんなに長い付き合いになつたのかもしれない。幼稚園の時からだからね。

とまあ、私にとって倉橋数真はアイデンティティを齎かす存在であり天敵でお邪魔ムシな目の上のタンコブ的存在なのである。

## 1 大好きなのは炭酸水

学校から真っ直ぐ帰ると自室へ直行して勉強…

それは理想なのだけどね。

進学校の濃い授業をびっちり受け、私はエネルギーを使い果たしてしまったのだ。だから、部屋に入ると絶対寝てしまうのでとりあえずリビングで休憩することにしていた。

冷蔵庫から炭酸水を出してぐいっとある。

これよ。生き返るわー。

制服のまま寝転んでソファーでぼんやりしていたら数真が帰ってきた。

両親は一人とも旅行関連の雑誌の仕事をしていて撮影や取材やらで出張が多い。会社を変わったここ数年は一年で数えるほどしか家にいない。

もう親がないのが淋しい歳ではないからあまり気にならないけど、大変な仕事だと思う。

仕事つて大変だ。実は高二のくせに私はまだ進路をきっちり決めていない。

なんとなく親みたいに旅行関係の仕事もいいなと思うけど、大変そうだし私に出来るかどうかわからない。

とりあえずお金のかからない公立の大学に行ってから進路はそれから考えよう…それ自体が先伸ばしに過ぎないのはわかるけど。

正直、いまは受験勉強についていくのが精一杯で何がしたいのかなんてことまで考える余裕がなかつた。

私の日常は、勉強してるか、こうやってじるじるして… 気力体力回復を図つているか、毎日そんなのばっかりだ。

ちつとも青春しないとミヤの姉に言われるがほつといて欲しい。

「和音ちゃん？」  
かずね

肩を叩かれ、それが軽い感触だったのにもかかわらず私はひやつ！？と悲鳴をあげて炭酸水をこぼしそうになつた。

忘れてたすっかり。

そうだ、帰つてたんだよ。

「お帰り、数真」

にっこり笑うと数真も輝くような爽やかな微笑で答えてくる。

「ただいま、姉さん」

少し長めの前髪からのぞく端正な顔立ちが溢れるばかりの爽やかさを主張している。

ホントに無駄な美貌だよ。

目と鼻から生まれたみたいにきちつと整つた表情の読めない… どんなときも変わらない、寝起きですかのうかじりのない顔。

別に外人みたいではない、すんなりとした肉づきの薄い小さな顔。数真のモデルなみの背の高さ、肩幅の広さ、脚の長さというパーツ

にはむしろ色気がへんにあるくせに、淡泊な爽やかな容貌が年相応でアンバランスな感じがする。

ミヤは数真の人気の秘密はそこだといつが。

「じいよ。どのへん?」

爽やかお天氣お兄さんにしか私には見えない。つまり。

にこやかにお天氣情報を喋つてるのをただ見ているぶんにはいい。でもだからといってそれだけだ。チャンネルを変えなくとも天氣予報はすぐに終わる。

こんな誰にでも優しいヤツは実がない気がするのだ。ホントうさんくさい。夢中になる連中の気がしれない。

「和音ちゃん? どうしたのぼーっとして」

和真は私を不思議そうに見下ろしたまま澄んだ瞳で瞬きした。手には学校指定のカバンを持っている。

部活は今日は休みなのか。

「すいぶん早い…まだ夕御飯作つてないぞ当然…

まあ一人分だから時間そんなにかかるないけどな。それとも今日は数真が作る日だっけ?ならいいが。

「ちょっと休んでいただけだよ。数真くんが帰ってきたの気がつか

なかつた。『ごめんね』

考えを一滴も「じぼさずほんわか微笑を繰り返す私。

タヌキだよ…もうね。

なんせ10年モノですからね、板についてるつてもんです。  
優秀な弟の姉は…平凡人畜無害な癒し系。数真を狙うファンに許され親や周囲も納得するのは、そんな私だからだ。数真はもちろんこちらの思惑など気づくはずもなくうれしそうにコンビニの袋を掲げて見せてきた。

「いいよ。俺こそ驚かして『ごめんね』それよりさ、新製品のプリンが出てたんだ」

プリン！？

私はソファーから素早く身体を起こし弟に向き直った。  
プリンときいてはいつまでもダラけても仕方ない。大好物のプリンに私は弱いのだ。

「えー嬉しい！ありがとー数真！」

確かに見たことないパッケージ。美味しそうだ。

とりあえずプリンを受け取りひとさじ掬い上げ口に落とす。

「おいしいっ…」

甘く広がる至福のひと時。  
はあつと溜息をつくと、ふと数真と目があつた。  
正しくは、こちらを凝視している弟に気付いた。なぜか切なげに、

顔を美麗にしかめている。

見ているのだ、数真は。  
でも何を？

「数真…？」

私は気付いてしまった。

「姉さん…」

掠れた数真の低い声。

数真の気持ちがわかつた。欲しいのだ、彼は私が…

私の持っているこのプリンが。

そうか。たぶん、プリンを数真は一つしか買って来なかつた。だからさつきから私に何か言いたげなんだろ？。

ひとつくわよこせ、ヒ。

人が食べてるの見ると欲しくなるというもののだし…確かに。

「わかったよ、数真」

数真に優しく言った。本意じゃないが仕方ない。

「ね…半分こしよつ

「は？」

間抜けな声を数真があげる。

「そんな物欲しげにみなくともあげるかい」

「え…えっと？」

半分では不満か？

数真は「ひりに」伸びしかけていた綺麗な手をぴたりと制止させた。

…ちっ、やつぱり不満なのか。

たぶん食パンと牛乳も買ったからお金足りなかつたんだな。朝、買  
い物頼んだ時忘れてて数真にお金渡さなかつたし。半分わざとだけ  
ど。

つらつらと尋ねてみると数真は固まつた微笑をぎくしゃく繰り返し  
てきた。

「あーフロンのことか

「やつだね…ひしたの」

まさかこまから牛乳と食パン代払えとかはなしね。

だつて、おひして来ないとお金こまない。300円しかない。あの数真が「ソンビ二行つたなら、キャッシュカード一ノーナーでいくらかお金おろすの頼めばよかつたか？

「いや…あの和音ちゃん」

プリンを断つた数真を尻目にぱくぱく食べる私を見下ろす秀麗な顔は、困惑と焦燥が混ざった複雑な表情を浮かべていた。

普段穏やかな微笑ばかりなくせに、ここまではさりげなく感情を躊躇なくみせるとほ。何かあったのだろうか？

プリンをしつかり最後まで食べ終わってから私は数真に声をかけた。

「どうしたの？」

まあパソコン」とわでぐちやぐちやこうヤシではないだらう。

仮にそうでももつ遅いから。私の胃袋に聞くがいい。  
数真はまたまたじいつと私を凝視してきた。

なにか？

静かにただクエスチョンマークで答えると、なんだか暗い顔をされてしまった。  
なんなのだ？ホント？」

「あのわ…くだらない話なんだけど」

「うん」

数真はどうにか疲れたようになり田を伏せて言つてゐた。

「姉さん…」「ブイとかつて言われたことある？」

「は？」

今度は私が間抜けな声をあげる番だった。

「姉さん…いや和音」

私が握つていた空になつたプリンのカップをそつと取り上げ、いつの間にか隣に数真が座つていた。

確か力バンや『ハンドル』の袋やら持つていたはずなのに数真是身体ひとつで私に擦り寄るよひにもたれ掛かつてくる。

「ちよつと…地味に重いよ、数真くん？」

「姉さんさあ、これでもなんとも感じない？」

「重いわよ」

「だからもうじやなくて…」

怖い顔して睨む必要はないでしょうが。

それにせつときさりげなく名前で呼びやがったー?弟のクセに生意氣な…

私はまたイラッとしてきた。

まあ顔にはだしませんがね。

「やつぱり激一ブだよ、姉さんは」

突然、隣の数真の身体がふわりと広かつたような気がした。

「ちよつ、苦しいよ、数真」

「抱きしめてるからね、姉さんを」

「いい歳してまだプロレスラーじゃねーやねなセコヨ…」「違うー！」

「違わないでしょーあんたせこつもプロレス！」ってきただじやないの私に…特に中学の頃は毎日毎日…」

痛いし苦しい…がきつちり言つてやつた。昔の繰り言なら無尽蔵に沸いて来るぞ。プロレスなんて今の中学生は見ないのだろ？がウチの父が昔大ファンで家には録画が二つあったのだ。

それにしても顔を数真の胸辺りに押し付けられているので、息がしにくい。

「話をそらすな！」

「だからなんなのってさつきから…ひ、ひ、言つてゐるじゃないの」

なんの技か知らないがこれはけつこう効果がある。  
息が十分に出来ないせいではーつとしてきた。

「……あの頃はわからなかつたんだ。女なら誰でもいいと思つていたのかどうかも、自分でも自信なかつたんだ」

ぼんやりと聞こえてくる。

力を緩めずに訳のわからない喋りを始めた弟の声。

数真の胸は固くて温かくていい匂いがする。数真のくせにメロンか何か…スイカみたいな夏のフルーツが入つたマリン系の香水か何かをつけている。

悔しいが私の好きな香りだ。

「でもね、やつぱり俺はあるの頃から姉さんに触れたかつたんだ…いつも理由をつけてね。だからこの間はあんなことしてしまつて…ごめん」

「数真」

数真の腕の力が緩んだ隙に私は彼の頭を撫でてやつた。

「姉さん…」

情けないほど瞳を潤ませてこる、数真。

「…可愛いとこもあるのだ。

所詮、17の少年か。

こないだのことは…ちょっとだけビックリはしたがアレで数真が私にさりに頭が上がらなくなるのならなんてことはない。

うん…なんてことない。

むしろチャンスと言えなくもない。

数真の、年相応の衝動を、彼の恥ずかしい過去として押さえとくのも悪くないだろ？。今のところ数真は私の言つことによく聞くしお互い仲良し姉弟な訳だけど……

後々なにかに使えるかもしれん。

「…はひとつ、なんだかおかしな空みを生じた」の空氣をこの姉が制圧せねば。

「反省してからもういいよ」

「和音…」

「よしよし。許したげる」

もとより怒つてないし。

「でも。和音、じゃなくて。姉さん、でしょ」

「うん…ねえ和音ちゃん」

わかったのかわからないのか弟はきゅっと今度は優しく抱擁してきました。

なに？」と聞き返そうと口を開いたら。

数真の端正な顔がなぜか近づいてきていた。

…？

戸惑う間もなく、頭を撫でていた右手を掴まれて身体」これらに引き寄せられている。

「…え？」

「許してくれてありがとう」

耳元で呟かれた。

くすぐったい甘い囁きが忍び込んで…背中の奥がぞくつと震えた。

と思つた。

すぐに、生暖かい唇の感触に私は閉じ込められていた

…これはアレ？

……キスかよ！？

「ん…む、んつ…？」

ちょっとせつとき反省してるとか言こませんでしたあなた！？

しかも舌まで… ほの動めいでいるナマコみたいな熱いのは舌だよね！？

くぅ… 息が出来ない。

数真に抱きしめられ、キスされてる…？

混乱した感情。心臓がなぜ逆回転しているのか？

…私は頭の稼動をキリキリとあげた。

呑まれちゃダメだ！

そう。

数真の魂胆を考えろ！

コイツは… 私を自分に陥落させるつもりなんだ。

こないだの件では飽きたらず… そういうことか。

姉が自分にめろめろにならないから自尊心が傷ついてるとか何とかそういうわけかね。

負けるもんか。ちょっとばかし顔とかスタイルとか頭とか…くそなにもかもいいからって…

女がみんなあんたに惚れるなんて考えるのは大間違いだからね！

だいたい、血の繋がった姉弟に恋愛感情が挟まる余地はいちニクロンもないだろうが。

なのに私にこだわる数真はホントおかしい。ナルシストにも限度がある。

ますます激しさを増す数真のキスを受けながら私は必死に頭を巡らす。

今両親が帰ってきたらマズイだろう。

誤解される！絶対私が悪者になるに決まってる！

そう。

数真はただただ自分激ラブなナルヤローだけで私を屈服させたいだけ。

私は姉として数真に対する優位性を守りたいだけ。

だから、はつきり嫌だと拒絶できない。周囲から一目置かれる数真を手なずけて従わせて言いなりにさせて、昔、私を見ようとしたなかつた連中を見返してやりたい。

あくまで私の心理的に…の話だけね。バカらしいこだわり、現実的でない、ねじまがつた形を変えたある意味ブラコンなのがかもしれない。

ミヤはいつも私達を『システムプログラモン姉弟』とからかう。

わかってる、わかってるのに。

数真はいけ好かないが可愛い弟ではあるし嫌いではないし嫌われてはダメなのだ、絶対。

頭をぐるぐると思惑が巡る… 巡り過ぎて訳わからなくなってきたよ。

ぐつたりした私をどういったのか数真は… さらに大胆な行動に出た。

つまり。あらうひと元…

数真の手が私の制服のブラウスの中に滑り込み、胸のその…  
先っぽを怪しそ手つきで撫でてくるのだ！

「和音ちゃん… 気持ちいい？」

私の顔を覗いてくる数真に見られないように顔を背ける。

な、なんてことすんだよ…?

さらに怪しげに手つきは下へも伸びてきた。またまた数真に濃厚なキスをされながら胸や… もう片手はお腹から下へ下へと漫蝕してくる。

指の動きにぼうっとしてしまったのはいかんともしがたい… でもでも言ひ訳をさせて欲しい。

『LJの間』のことだ。

数真はこの間、私が寝ている部屋に入ってきて似たようなことをし

てきた。

最初は他愛ない学校の話だったのがいつしか恋バナになり、姉さんはどのくらい経験があるのかとなぜか数真に真剣に詰め寄られていたのだ。

真面目に聞かれては正直には言えない。恋愛の話題なんて数真にしては珍しいことだつたし。

まさかキスもまだなんて…言えなかつた。

勉強でも見た目でも弟と比べて惨敗な姉として…せめて人生経験ぐらいは上を行つていると思われなくては、立場ないじやない。姉として。

だから嘘をついたのだ。キスも初体験もとっくに済ませているのだと。

そしたら数真は豹変した。

いきなりベッドに押し倒し濃厚なキスをかまし、体をまさぐつてしまがつた。まあその時はたまたま両親が家にいた日だつたからそれだけで終わつたけど。

いや、ファーストキス奪われていろんなトコ触られてそれだけもないんだけど。

とにかくあれはかなりビックリした。数真が数真でないみたいだつた。

本気でヤラれるかと…びびつた。

あれからけつこう時間がたつた。

明くる日から一切その話題が数真から出ないので、私もすっかり記憶から消して、無かつたことにして安心していたのだ。

毎日同じ家に暮らす弟が今まで通りの『弟』じゃなくなるなんて。それは絶対有り得ないから。

両親はアフリカかどうかに行つていて、こんな真面目に急に帰つてくることはないだろうことは私にも想像がついた。

小賢しい数真のことだ。

どうせ親にはメールで所在確認くらいやつているに違いない。

て…つまり。

この家には姉を襲つ気マンマンな弟とふたりつきつー? いやもう襲われてるし。

なんてこいつた…

まさかまさか優等生の数真が再びこんな暴挙にでるとは! そんなに姉に初体験先を越されたことに腹がたつたのか?

…しかしながら今日なのか。

その疑問にはナイスタイミングで数真が質問で解決してくれた。

「和音ちゃん… 今日は安全日だよね?」

狙いすましたように言つてくる数真。

そういうこと!?

なんで人の…を把握してるの…?

リビングの壁面に置かれた鏡に私と数真が映っている。なんていう  
かなんてこうかもつ…むちやくぢややらしい。下手に数真が夏服を  
きつちり着ているぶん、ほとんどいろいろなト「が隠しきれてない格  
好の私は、どこの女子高生モノかといつほど、エロい。エロすぎる。

おまけ[ア]。

せつきから執拗に数真に胸と股間をやらしく刺激されてへんな気分  
になつてきてしまつた。

「姉さんの、グショグショだ。ぴちゃぴちゃ音たてるね」

恥ずかしいこと言つくなー！

「それに、すつ」と締め付けてくる

…「う。

「勝手に腰が動いてるし…まだ動かすなよ

あーもう言わないでよー

泣き声マジで…

「やうやうか

ちゅつとちゅつと…?

何が『そろそろ』なの…?

いいかげん冗談じゃなくヤバイと抵抗しようとも、私の口から出る  
のは訳のわからない声だけ…

『お姉さんってヤツ…』

ああもう白状するけど。

この時私は何も考えられなくなつてました！  
ええ。たぶんもう数真のヤツに言われば『お願い』でもなんでも  
してねだつたに違ひないです！

数真はクスッと笑うとそつといえば姉さん、と話しかけてきた。

「姉さんち、プリンも好きだけどアイスも好きだよね？」

もちろん、唸つていた私に返事は期待していない。

「イチゴアイスバー」

クスクスっと楽しげに囁く数真。

「意味わかるかな：今からあげるからゆつくり味わつてよ。仕上げ  
は練乳がけ…姉さんと俺のでね」

数真のクセに数真のクセに…！

オヤジくさい台詞に怒りを震わせながら、私はどうどう数真によつ  
てムリヤリ『オトナ』にならざれてしまつたのでした…

## 2 開いすんで

終わった。

マジでもひ…いろんな意味で終わった。

ベッドから身体を起こすとそこにはもう数真はいなくて代わりにメールが着てた。剣道の稽古日? ああ学校の部活じゃなく道場のほうねふーん。

9時には帰るつてなにそれいちいち教えなくていいし。いつもこんなにメールしてきたつけ、あいつ。

なんかダルい。

そのせいかやさぐれた感じでしか頭も心も回らない。

フツー、弟に無理矢理ヤラれたら、もつとテンション高くコメントしなきゃダメですかね。

本当にダルい。

そりゃそうか。

リビングで三回続けざま、お風呂場で身体を洗われてたときにまた一回、で、また身体洗つて今度は2階につれてかれて、私の部屋で二回、ベッドが汚れたのとベッドが狭いといつ理由で、数真の部屋で三回。

何処の種馬なんだあいつは。しかも全部中だ…いや、避妊はしてるといってたけどアレを装着してはいなかつたような。どうこうことなんだか。もう考えたくない…

腰がどーんと痛いです。

そして股の違和感が凄い。『ひちは痛い』といつよりも『スースーします。』じんじん痺れたようなダルさがいつもと違つ異常な感覚。

数真なら開通したからだよとか言いつた。

くそう…

最初からむりやへりや腰振つてばんばんねじ込みやがつて！

痛いって言つてるのに、ヤツは笑つて『和音ちゃん可愛い』と手…いや腰をゆるめなかつた。

一回田まではただ痛いのと異物感と激しそに訳がわからなかつた私。

それ以降は…

アレですかね？弟に調教されちゃうみたいな展開。

バカか私…。

実の弟にヤラれてアンアンよがつて…確かに後半からは気持ち良くなつて恥ずかしいことも言つちゃつたしいろいろ受け入れちゃつてた氣がするが思い返したくないよ。

ふと、メロンとスイカの香りがした。

数真の香りか。男っぽい匂いに香水が合わせて…

私はぎゅっと皿をつぶつた。

数真の部屋で数真の匂いに包まれながら考えても上手くまとまらないのに。

これがどうなるんだろう。

……え？

ドキン、と心臓が跳ね上がる。

これからって……？

年頃の弟の暴走に巻き込まれただけなんだから、私と数真の関係が変わるものはない。何も変わるものがない。

うん、なに血迷ってるのか。

はあ……気が重いし疲れた。

もう……なかつたことに出来ないかなあ……

『和音』

脳裏に響く、掠れて甘い数真の囁き。

『ずっと好きだった。他のヤローになんて絶対ヤラせない。この身体も心も全部俺のものだからな』

数真の凄みのある強烈な微笑。

『和音ちゃん。俺から逃げられるなんて考えるなよ。

…毎日エッチしてたら俺たち、離れられなくなるだろ?』

覚悟してなよ』

無かつたこと、なんて…

たぶん無理、だよね…。

…はははー…

…あ。

### 3休戦にはならないかな?

数真はぴつたり9時に帰ってきたらしい。

なぜ、らしい、なんかというと2階の白室に籠っていた私はヤツと顔を合わせていない…数真の部屋のドアが閉まる微かな音をその頃聞いただけだからだ。

あれだけヤツとて剣道しに道場行くってどんなだけ体力余ってるんだ。

こつちは全身ダルくて仕方ないつていうのに、ヘンタイめ…いや、エロガキめ…

「和音ちゃん?」

シャワーを済ませた数真が部屋をノックしてきた。

「寝てる?入るよ

丸まつて布団に潜っている私の側へ、数真は座った。ギシリ、とベッドが軋む。私は、思わずビクリと身体を震わせてしまった。

それをどうしたのか、数真の声は少し…微かに悲しそうに聞こえてきた。

「ゴメン」

数真も疲れてはいるのだろうか。顔が見えないからわからない…今

は見たくないから別にいいけど。

黙つてじっとしていると。

「まさか初めてとは思わなかつたから…『ゴメン

数真はほつほつと話しかけてくる。

「俺、ずっと和音ちゃんが好きだ。

決めてたんだ。

和音ちゃんは姉だけど、俺はそんなの構わない。

和音は俺のモノだから

私はブルブル震えてきた。

「和音ちゃん」

「アンタにとつてはただのエッチなんだうけどー私はアンタのモノじゃないからー」

とつとう我慢しきれず私は布団を跳ね上げ数真に向き合つた。

「怒つてるの？」

「当たり前でしょー？」

何処に弟にヤラれて喜ぶ姉がいるか。少なくとも私は違う。

私は、数真に屈しない。

「俺のこと…嫌い？」

「そんな切なそうなフリしても無駄。アンタの本性は知ってるんだから」

「へえ…面白いね」

数真はサッと表情を変えてきた。

今までの優等生ヅラは消え代わりに底の知れない妖しい微笑を浮かべている。

「俺の何を知ってるって？」

楽しげに言つてくる。

私は、思わず着ていたパジャマの胸元を握りしめた。  
『ぐくり、と唾を呑む。

まさかこんなタイミングで全面対決するとはおもわなかつたけど仕方ない。

「聞くよ。言ひなよ」

「あ…アンタは」

私は思いつくままにあげつらつた。

「真面目なフリしていい人ぶつてるけど、本当は他人なんかどうでもよくて、めんどくさいと思つてる。」

でも人からの評判の良い自分が好きだから、仕方なく周りに親切にしている。

勉強も、真面目にやればトップを取れるくせに他人に嫉まれたくないからそこそこでセーブ。

大好きなのは自分だけ。

他人なんてどうでもいい。

私のことも姉なのにアンタは馬鹿にしてるんだ

なんかむちやくちや。

コドモっぽい…

後半なぜか上手く声がでなかつたし。

数真は呆れた表情で私のアタマにポン、と触ってきた。

「よく知ってるじやん。さすが姉

「そ…その姉にあんなやらしいことしてアンタはつ…

「だから泣きながらそんなコト言つなよ

「え…」

フワリと抱きしめられる、数真に。羽のようにな。

また何かが、跳ねた。

心臓の音？

いや…気のせいだ。

ドキドキする場面じゃない。対決してる、んだから。  
数真は甘く優しい表情で私を捉えてくる。

わかってる。これはヤツの試み。

私を懐柔し手なずけようとする作戦…なんだ。

私は泣いてなんかいない。これは、興奮状態でつい出来ちゃった汁だから別に意味のある涙じゃない。

私は冷静だ。

おかしいのは数真だ。

弟のクセに私を優しく抱きしめてビーッなるんだ。

ただやりたかったからと転えぱーー。ちょうど側に転がっていたからヤッただけだ、と。

そうしたら私は…

「アンタなんか…」

キライ。

やつ quemえればいいのに。

でも。

私は数真を見上げた。

まるで愛しい者を見つめるかのような眼差しどぶつかる。

なんで？

私は心を背けた。

眼差しに縫い取められた私の瞳は数真から外せない。  
見つめあう。

私の胸の奥に、熱いものが満たされてゆく。

これは何？

数真の想い？

私のじやない。

私は、

私は。

…… 私、は？

「和音」

甘く囁くな、数真。

「だいすきだ」

優しく触れるな。弟のクセに。そんな目で見るな。

重なり合ひ、唇と唇。

息遣いが、遠い。

何も考えられない。

ここは何処でもない世界だ。

キスしているのは知らない男。会ったこともない男だ。

気持ちいい。

ただただ気持ちいい。

深い眠りにつく前に訪れるまどろみ。

淡い感触に温もりが全身に纏いつく。

突き放せないのは数真の匂いに酔つて いるから？ 数真の熱が心地よいから？ 求められて嬉しかつたから？

違う。

私はそつと目を背けた。

何かが、暗闇のなかをはらはらと落ちてゆく…

墮ちてゆく。

綺麗な白い輝きを私はぼんやりと眺めていただけだった。

止めはしなかつたんだから共犯、なんだろうか？

いや。

今だけの現象なんだ。  
すぐ終わる。  
すぐ田が醒める。

数真は弟。

大事な、憎らしきけど愛しい弟だ。

休戦も停戦も出来ない。結局。どこかで自分の溜息が聞こえた  
けどもう後の祭り。

この日また…今度は自然に私と数真は身体の関係を持ったのだった。

明日からいつたいどうなるんだろう？

考えたくない…。

## 4 電車にて

翌日。

私は痛む身体を引きずるようにして学校に向かった。

先に行つたかと思ったが、駅の改札口で私を見つけると微笑を浮かべて近付いてきたソレは遠田にも際立つ容姿だった。

色素薄めのサラサラとした髪、田を逸らしたくなるほど整い過ぎた顔、バランスの良すぎる体格。

やつぱりいたか…。

数真。

「出たな…」

思わず呟く。

改札を通り、背後に気配を感じながらいつものようにホームへ向かう私。

学校まで乗り換えて40分。

はー…。

昨日のコトを考えると赤面してしまう…いや、うん、毅然としなくては。

しかし一緒に学校に行くのか…。いつもそうしてきただんだからまあ  
今日別々なのもかえつておかしいだろうけど。  
なぜかわからないがヘンな胸騒ぎがする。

これって羞恥心なんだろうか？それとも条件反射的な反応なのか？

まあ……だいじょうぶ。

うん。何処から見たってわからない。今朝も鏡で何度も確認してきたし。見た目に、私にはなんの変化も無かつた。なんか拍子ぬけするぐらいちつとも変わらない。いやみかけ変わつても困るんだだけじ。

た  
だ  
：

「和音」

「… ハヤシ、なんとかならないの…。」

「すいぶん疲れてる」

誰のせいだ誰の！

慣れ慣れしく、  
数真は私の肩に手を置いてきた。

それはいつも、姉を気遣う優等生の仕種に変わりはない。

だけど。

「数真くん、喋りがへんだ」

数真の手を肩からべりつと剥がして私はにこりと爽やかに笑つてみせた。

ホームは混み合つてゐる。入つてくる電車に乗つて仕舞えば満員だからもう余計な話をする余裕もなくなるだらう。

「あのね、あなたはもうちよつと賢いのかと思つてたけど？」

「へえ……」

数真の瞳が興味深げに輝く。

「つまり？」

「言葉に氣をつけたね」と。いくら姉弟でもケジメは大切だよ

にこり押しすように告げる。

言外に伝わったと思う。

「昨日の件は無かったことにしましちつね？私たちは姉弟、いいわね？」

…同意以外は否認とす。賢い数真は理解したはずだ。

「…ふうん…まあ…面白いね」

鮮やかに流し田をくくれると数真は車両からホームに溢れた人波をやり過ごすと、電車に乗り込んだ。

「和音ちゃん」

数真に腕を掴まれて、つるつる詰めの車両に乗る。

：私、バカ？

なんで女性専用に乗らなかつたんだ：

…………。

隣の人に潰されそうになりそうでならない…

なんとも微妙な隙間がかろうじて残されている満員の車内。

揺れに合わせて踏ん張るのだけど嫌でも身体が時々触れてしまつ…。

もう… いつそもっと身動きとれなくぐらり混んでたら、こんなヒヤヒヤしながらすむのに。

いや、それはそれでマズイか。

このポジショニングは心臓に非常にようしくないから！ 呼吸障害とか絶対起こすから！

…………。

まるで酸欠の水槽中の金魚みたいに頭上をちらりと見上げる私。

数真は大きな瞳で私を見下ろした。

くう…………！

今、ニヤッて嘲つたよー。表情、変わらなかつたけど微かに唇が動いたから…

ヤツは…絶対楽しんでる。

くわう…。

今私の情況を簡潔に説明すると。

私の左手は数真の右の腰辺り。

ドア附近に向かい合つたカタチで立つてゐるんだけど。  
あの超絶美形の愚弟と。

この左手で突つ張つてゐるだけで、ほほ…

密着状態である。

なんなの…もお…やめてどんな恥ずかしい罰ゲームなんだよ…

ところ私の心象風景を察して頂きたい。

昨日、弟とさんざんシておいて密着ぐらい、と思われるかもしけないが、昨日のアレは事故みたいなものだから。

弟はまだ人生経験も少ないし、性欲と愛情をカン違いしているだけだ。

私はたまたまその衝動に巻き込まれただけ…うん。

お互い、日常に戻れば大丈夫。

数真は弟、私は姉。

おそらく真っ赤になつて いる私を数真は勘違ひしてゐる。  
カラダがこんなにくつついたら意識しちやうのは…別に弟でも他人  
でもね。生理現象なんだから、深い意味はないのだ。

！？

電車がカーブに差し掛かり大きく揺れた。

前から伸びてきた数真の腕が私を乗客から庇つよひに、私の身体を  
ドアに押し付ける。

ぎゃあ…！

睨みつける。

が、ヤツは全く意に介さず甘やかに蕩けるよひな笑みを浮かべてき  
やがつた。固まる姉、に数真はさらに身体を押し付けてくる。

「…や…」

電車の揺れに合わせて絡め取られるよひに抱きしめられてゆくのだ。

「、公衆の面前で…

しかも手が、背中とかお尻の上を…微妙にエロい動きで撫でながら  
抱きしめてくるじ。

…なによつやけに距離の密着感圧迫感。

嫌でも昨日の…むぎゅむぎゅ…を連想せぬ…。

数真の身体つて、硬い…私こんなに、まじめにしてた?わしきからお腹に当たつてのは何かなんてストップ…!…考えるな私…

も、無理。

動搖するなつていつも…私の頬に数真が近づぎるんだから…息遣いが生々しいんだよ!

「ダラシナイ顔すんな」

チユツ。

「…ひやつ…あ…」

「いい加減」

しれつと数真は恥きやがつた。

今の端が既じやありませんからねー?.

ビックリしただけだから!

…私の属性はいつからシンデレラになつたのかいや違つ。それよつちよつと待て…チユツて、首にこま…したよねー?.

周りは気付いてないのか、それともかなり不本意ながらただのバカツプルとか思われているのか…くつ。なにこの公開羞恥プレイ…

みなさん違うんです、これはH口に弟にムリヤリされてるだけです  
つて余計に恥ずかしいわ！

なんでこんなにドキドキするのか自分でも納得がいかない…。

数真の呼吸が、体温が、首筋に寄せられる息、近すぎる数真の鼓動。

ドキドキ、する　　！？

いやいやいや。待って、弟、ですから。

弟相手にドキドキなんておかしいからね。

トキメキとビックリは別物よ。

私はビックリしてるだけ。

そこは間違わないようにしないと。うん。

…「…数真め。

私のチキンハートを持って遊びやがって。

覚えてる…

「あ」

でもなんといつか首筋にまだ当たつてゐる… 腰？

時々、歯がせりげなくたてられる度に、

びくと！？

腰にぐるぐる… ぐる…

オマエは吸血鬼かとツツ ノミ入れる力もなくなるね。

と、吸血鬼… 数真の囁きが髪の間から吹いてきた。

「 もうとキス、 しようか… ？」

はむつ。

は…？耳を噛んでるし…？

青くなる。キスってキス… く、 腹にですか！？

「 や…」

「「「メン独り皿」

「 ひ…」

遊ばれてるよ…

電車の中つてこんなに心臓に悪かつたなんてね。

数真にハグされかつ時々首筋をはむはむされたながらの40分（乗り換えあり）はまさに理性と本能のせめぎ合い。人畜無害平凡温厚な私には分不相応な体験ですね。

も…数真の発情期つていつ終わるんだろうか…？

## 6学校にて

やつと、学校に、着いた。

自分の教室の、自分の机がこれほど變しいと思つたことがかつてあつただろうか

学校なんて授業なんてプレッシャー以外の何物でもないはずが、心底ホツとする。

数真にカバンを持たれて、憔悴しきつて登校した今日のこの屈辱を私は忘れない

登校中、電車の中以外では不埒な行為はなかつた…手も繫がれなかつた会話も自然だつた何もおかしくはなかつた。

ミヤにも玄関で会つたけど、私を見てとくに意味深な反応も見受けられなかつた。

よかつた…

まあミヤにバレてなければほかはだいじょうぶ。  
ミヤは鋭いし幼なじみだから一番の難関なのだ。

午前中の授業はたつた今、あと一つで終わらになつたところだ。

「…はあ」

ぱたつと机に突つ伏す。

こそっと鏡でチェック…

うん、疲れた顔もそれほどわからない。朝よりクマも目立たないし。

ふう…。

窓からはもわっとした夏の大気が眺める。

青い空、白い入道雲。

私の目に映る梅雨明けのきつぱりと晴れた空。  
乾いたグラウンドはここからだと砂漠みたいにみえなくもない。

これから夏だ、つて感じの天気だけど…

期末が終わったら夏休み、か…

夏休みってさ、毎年、塾の講習とかで忙しいから…楽しみみてテレビの再放送くらいだつたし、とくに今年は受験生だから憂鬱だよ。  
うー…こないだの模試結果、たぶん悪いだろつし。  
ユウウツだ…。

数真は…

今頃涼しい力オして教室にいるんだろうか？

何もなかつた力オをして？

む、ムカつく…

エロいくせに衝動のみのガキのクセに…！

「倉橋さん？」

内心で身もだえまくつている私の目の前に、同じクラスの佐々木くんがプリント片手に立っていた。

きょとん、と人懐こそうな柴犬みたいな瞳をぱちぱちさせている。

「教室移動つてタルいよね…

だいじょぶ？なんか体調よくないみたいだけど」

「へつ…あ、あ、次…つて…生物だけ？」

授業ではスライドとプリントしか使わないのに、わざわざ生物教室でやる必要性がよくわからない。だから移動をすぐに忘れるんだよ。

「うん」

佐々木くんは、やんわりと笑った。

私と同じでそれほど目立つタイプではないけど、優しい雰囲気のホンモノの癒し系で、彼のさりげない気遣いに思わず突っ伏していた身体がぴんと伸びた。

「行こうか、倉橋さん」

「うん」

癒されるな……」の笑顔。

そういうえば教室には人もまばらで、残っているみんなも教室を出て行っている。

「わざわざ声かけてくれたんだ。ありがと」

「余計なお世話かなとも思ったよ。倉橋さんてさ、しつかりしてるとんだけなんかこう、時々ほやーっとしてるよね」

悪気ない笑顔で佐々木くんは呟くと、ハッとしたよつこ慌てて言つてきた。

「ゴメン、別にけなしてる訳じゃないからーやの……」

私はクスッと息を漏らした。

「いいよ、弟に比べたらボケボケだからねー」

佐々木くんはすまなむけつに額の先を軽く擦つてゐる。

「うへん……そつまつもつはないんだけど……」

もじょもじょといいよどむ佐々木くんに明るく笑いかけて私は立ち上がつた。

「とにかく、こいつか？」

「や…そうだね」

これ以上話すとぼうが出そうだ。

佐々木くんみたいに優しい人にへんな当てこすりなんかして、今日は本当に体調が悪いのかもしれない。いつもなら、数真のことなんて自分から話さないし周りだって別段なにもいやしない。たまに、一部の浮かれた一年女子に声かけられるけどそれも不快なほどしつじいわけでもない。

一応、昔の名門校：今は私立に押されてそれなりの中の上のギリギリ進学校だから。なんだかんだと数真についてうるさいのは、まだ受験まで少し時間がある一年生の一部女子くらいで、しかも面と向かつて私に何か言われることはない。

うー…佐々木くんに悪かったな…

イジケてハツ当たりしそうになつてゴメンね、って言えたらな…

佐々木くんはさつきのやつ取りを気にした感じもなく、廊下を一緒に歩きながら生物教師の出したプリント課題について二口二口喋つている。

いい人だな…

相槌をうちながらほんわかした気持ちになる。

彼氏いない歴イコール年齢の私にも、彼氏は無理めでも優しい男友達がいるのだ。

佐々木くんか…

中学まで部活に入れ込んでたせいか、意外に肩とかもがっちりしてるよね。程よい筋肉…ソフトマッチョまではいかないけど、背も普通に私より高いし、顔も綺麗だし、絶対大学行つたらモテるだろうなあ…

なにより優しいしね。

彼なら、どんなふうにカノジョが出来たら…抱くん…

!?

「倉橋さん？」

わわ !?

「立ち止まってないで、タナカは出席とるから早くいかないと?」

う…ハレンチ以外の言葉を思い付かないが一瞬佐々木くんにものすごい失礼な想像をしてしまったよ…

「早く早く」

腕、引っ張らないで下さい……佐々木さんよ……歩けます歩いてますから……恥ずかしいですってば……

なんか申し訳ない。ドキドキしてん……。

友達なのに……分不相應なのに、ヤラシイ上に図々しい女になつてるとか、私。

わざと落ち込むわ……。

佐々木くんの相変わらずの親切がこんなにいたたまれないとほ。

生物の授業はとりあえず根性でこなした。

人間、気力で乗り切ることも大事。人は恋愛とか性欲ばかりアタマいっぱいお腹いっぱい生きていけるほど、ヌルくいられない存在だ。そんな自分は、想像できない。

もづきょつとアタマも顔もよかつたら多少ユルくても許されるのだろう。むしろそれが魅力になるかもしれない。

でも。

私みたいなスペックでは、真面目とか温厚とかだけが他者評価に値する代名詞なんだよ。

親だって周りだって、マジメだなって呆れながらもそれが私だと受

け入れてくれている。

数真。

すべての元凶、血迷いエロ愚弟。

…絶対無理なんだから。

カラダで教える?

カラダから好きにならせる?

ないない、ないから。私は理性を重んじる人間として認めないから。

弟を…

異性として、好きになるなんて、ない。

絶対に。

## 7 学校にて～昼食タイム

生物が終わって昼休み。

まだ昼か…。

もう夕方くらいになつてもいいんじゃないの？

じきに夏だし、サマータイムが導入されても反対はしない。むしろ推奨したいとくに今日は。

ああ帰りたい…

あ、あの家はダメだな。

姉に欲情するヘンタイのいる魔窟だ。

出来たら帰らないでおきたい…

どこか遠くに帰りたい…

異世界トリップとか、ないだろ？

今なら躊躇なく馴染む自信があるんだけど。

朝から興奮しつぱなしでいい加減アタマの放出ホルモンが枯れてしまふ勢いである。

お腹が不思議と空かないのはそのせいか。

膝の上の、サンディッシュを見る。「ンヒーのよべあるハムチー…ハムチーズだ。

割と好きな具だといえる。

そしてゆうべくと。隣の愚弟を、これを渡してきた当人を、見る。

「これは？」

なんですか？

「蜃メシ」

見ればわかるそれは。

「…聞きたいのはなんであんたが三年の教室に来て……佐々木くんや深沢さんと乐しく」飯を食べようとしていた私を…拉致ったかといつ点だけだ」

連れて来られたのは裏庭の一角。

ちょうど校舎からは視覚になり、近くの武道場の出入口からは茂みの裏になり、こんなところにいたら怪しい」とこの上ない。

ああーと田を軽く見開くと困ったよひにテレ微笑を滲ませる弟。

… わざとひじゅうせん。

数真は私の頸にそつと触れた。

「俺がどんだけ姉さんに会いたかったかわかる?」

いやわからんし興味もないから。

「数真。余計な『タクはいいから用件は?』

私はすすりと軽く距離をとる。

近付いたら負けだよつてことくらい私も学習済みだ。  
ホントはひつしてふたりきりなのも危険行為だ。

つべづべのショーショーションに陥つたことに脅威を感じる。

数真の戦略…なんて姑息な…狡猾な…

それは、昼休みが始まると同時だつた。

数真がきた。

佐々木くんと深沢さんとなんとなく席をくつづけて「飯を食べよう

と、買ひ置きしてあつたパンをカバンから出した時だつた。

『ああ、いたいた姉さん、一緒に昼メシ買つたから、食べよ』

いきなり現れ勝手な発言 当然断りつゝすると  
ヤツは思い付いたように付け加えた。

『やういえば、昨日すいぶん体調悪かつたみたいだけど、病院行つ  
たの結局?』

…

麗しい微笑には、過剰なフェロモンたっぷり添えで。

深沢さんはもちろん、間近で数真の笑顔に当たられてしまつた佐々  
木くんまでもが、ぽーっと頬を赤らめていた。

なんて老練、老猾な…

数真の言葉だけ聞いたら、優しく優等生の吐くセリフだ。

しかしフェロモン笑みによつて淫靡な場面を匂わせる 私にだけ  
わかるやり方で。

そこがこの弟の卑劣かつ狡猾なところだ。今日ぐらこそつとしこう  
うという思いやりはないのかこの上口懲弟には…  
いやそんな期待するほうがへンか。

「素直じゃないな、姉さん」

「あんたみたいに本能だけで生きてないから」

静かに告げるが数真は涼しげににっこり笑った。

「俺は欲しいモノだけあれば満足なんだ。ある意味謙虚に出来る。和音もそう思うだろ?」

…自分に自信がある人間特有の威圧的オーラ。

この弟は容赦がない。自分のしたいことやりたいことは必ず実行する。

だからイキナリ昨日姉を襲いやがったんだし。

第一対決、だな。

私は芝生の上で膝を抱えて数真からパンツがみえないように気をつけながら睨みつけた。もともととぼけた顔つきも少しはキリッと見えたら成功だけど。

数真是目を細めて微笑を浮かべているが、これは例の 皮肉な表情、なのだろう。

なんとも甘く、淫猥な視線に思わずまた腰の奥が勝手にモゾつくるのが悔しい。

だいじょうぶだらうか。

いやそんな弱氣でどうする。

人はケダモノじゃないんだ数真を除いて。コイツのフロロモンに当  
てられない唯一の存在。

それが姉だ。私だ。

……。

長い沈黙も時間にすれば一、二分に過ぎない。

「数真。なんで昨日、あんなコト、したの」

「あんなコトって?」

ちつ、わかつてて言つてるな。

私の羞恥心を煽るつとして、か。

「あなたは…」

私は思わず周りを見た。

学校で喋るような問題じゃ　ない。

でもまた今日も夜は数真とふたりでの家にいなければならぬの  
だ。

冷静に話せる中立の場は学校しかない だろ？。

数真はフェロモン濃度を下げずに見つめ続けてくる。

ああ、うう…

「昨日アンタがふざけてやつた口ト、こつこつ謝つて欲しいの」

あえてボカシた表現で話を進めようと唇を舐めた。  
緊張ですいぶん乾燥してる。

「ふざけて？…あー」

数真の…囁きが聞こえてきた。

「こわなつお尻も…は、やっぱ引いた？」

！…？

「なつ…？」

なに、ななな何言い出すんだ……！」

「昨日はノーマルだけだったから回数でこなした感が、物足りない？ んー…ケ 攻めも途中だつたし、俺の リ責めで和音ちゃんだけ勝手に何回もイッちゃうし。

やつぱ同時にイクつてのは現実無理かな…」

あつあつあつあつあつ…

「『ゴメン、で…すつ』顔真っ赤だけど大丈夫？」

も、もおいい……やめてとめて。

「う…う…う…う…ヘンタイ…」

せいじつぱこの罵りに、なぜか朗らかにことしげにワインクが飛んでくる。

「なに言つてんの一男はみんなヘンタイだろ？」

「あなたは男じゃなく弟…違つかひつ…」

「へえ…じゃ、その弟に跨がつてよがつてたのは誰だつけ。確か何

回か自分だけイッちゃつてたよなー?」

馬のりだつたよ?

…つて、そんな指摘はつ…

「あ、あんた、ホント最低…!」

「んー最高の誉め言葉だね」

くすくすくす。

鮮やかに艶やかに、数真が笑う。

長い指に、つい、と私の顎がまた持ち上げられた。

瞳を、心を見透かすように覗き込まれる

「こつもマジメな姉さんの恥ずかしい姿も恥ずかしがる力オモビ  
ちもいいね。

…今日も夜は長くなりそう、だ…」

「つー…」

魔性の瞳だ。

ヤバイ、この男、ヤバイよ…!

数真からじりじりと撤退しながらなんとか立ち上がり膝から落ちた

サンドイッチを拾つと一皿散に逃げ出した。

「俺はオマエが好きすぎるんだよな。姉でもなんでも別に構わないよ。他の女はいらぬ」

て、撤収…。これは戦略的撤退だ…！

立て直し…立て直さないといつ。

数真め 鬼畜めつ…

確かに弟に…ファーストキスもバージンもイッちゃう感覚も全部ぜんぶぜんぶ奪われ教えられましたとも…！

昨日はなんとかおしどとお口の血操は守つたけど…

ああー何言つてんの私。

お天道様に顔向けできないこんな話題。

「…和音ちゃん」

私は聞こえていなかった。

「甘いねー。俺が遊びにしろ本気にしろ欲しいモノにはこだわるつて知ってるだろ?」

立ち上がり逃げ出す私に浴びせられる嘲笑。

「本気か気の迷いか」

私の背中に投げ付けられる言葉の刃。

「それは判断してもらつかな… オマエに」

## 8逃走そして放課後～1

数真から逃げながら

走っても走っても。

振り払つても振り払つてもこみあがつてくる。

なにがつて、もうなにがなんだかわからなによ。

自分のこの、『いやいや』の感情は気に入らない。

恥ずかしいやら腹がたつやら情けないやら、もう、わけがわからな  
い！

数真の好戦的な鮮烈な表情。

…私のカラダを這つ視線 壮絶な色氣を含んだ声色。

私を圧倒する劣情。

…かなわなかつた。

まるで蛇に睨まれたカエルってヤツ?

悔しい。手玉に取られてあしらわれて。

ああ、でも。

焦る気持ちの反面、どうか冷静に自分を見つめる田も感じていたんだよね。

そこはホラ、いつも数真の陰でひつそり存在感のない姉ですから。  
なんていうか、いつも数真と比べられてきましたから。判断されて  
きましたから。

なんだかんだといいながらもびくびくしてゐるんだよね。

批判や嘲りになら乾いた田線で流せるけど、そういう感情にはつ  
らたえてしまつ。

うん、卑屈だよ。

数真に周りに、批判的なクセに冷ややかなクセ。

昔からじじつて時にいまひとつ集中出来ないんだよね。

ドキドキはらはらしながらも、『私いまドキドキじゃん絶対バカみ

たい…はは』なんて他人事みたいに考えてしまうのだ。

だからいまも、『数真のバカ！ドキドキ（はあと）』って思う自分と、それにのめり込めず『勘違いすんじゃねえよおまえさんよ』と冷たい目線で私を見る自分を感じるのだ。

「はあ、はあ……」

校舎に入り、私は自分が数真にもらつたサンドイツチをグーで握りしめてることに気づいた。

もつたいない…もう食べられないかな…？

何回か深呼吸して、もうひとりの、冷静な自分に意識を集中する。

勘違いしちゃいけない。

これは、アイツにひとつ遊びなんだ。

アイツは私を求めてなんかいない。

私が動搖してるのを楽しんでるんだ。

…あの美貌に色気が加われば天下無双だからな。

私、いわゆるモブだもん。

…あ、ちょっと落ち着いてきたかも。

見事だよ…数真。

反撃の機会も潰されちゃったし。数真の勢いに押されっぱなしで昨日からずっと流されてるし。

…つさ。

情けないな。いくら美形で強引な男でもたかが弟、しょせんサカリのついたガキだ。

姉として、きつぱりと禁断の関係を拒絶し本来の関係へ導かねばならないのに。

現実は。

数真は…エッチなことを言えば私がつらたえるって、しつかり押さえてる。  
さすが狡猾老獴優等生。もう、いや…さすがだよ。

なんなの言葉責めまでホントヘンタイだ。

そして。

午後の授業が終わり、人もまばらになつた教室。私はぼつんと窓際の机にいた。

「倉橋さん、帰らないの？」

「う…ん、ちょっと…あ、午後の英語がわからなくて…復習してから帰るうかなーなんてね」

まさか弟に押し倒されるから家に帰りたくない…  
なんて佐々木くんには絶対言えないので、私は「」まかした。

午後の授業がみに入らなかつたのは… 事実だけビサ。

「佐々木くんは？」

いつもすぐに教室からいなくなる彼にしては珍しく、手にカバンを  
もつていない。

「うん、俺も勉強してこつかなと」

「ふうん？」

佐々木くんの笑顔につられてなんとなく頬が綻ぶ。

佐々木くん。

癒しだよ君は。

あの色情劣情魔とは正反対の安らぎ効果。  
心が洗われるよ…。

かたん、と前の席に座る佐々木くんを見ながらそんなコトをしみじ  
み噛み締めていると

ガタン。

「ん？」

振り返る。誰もいない。

「どうしたの？倉橋さん」

「ううん…なんか音がしたから」

「やうへあ、俺この文わかんなくてさ」

教室には氣づいたら誰もになくなっていた。  
佐々木くんとふたりだけだ。

ふたりきつ…

うーん心臓に悪い言葉。

でも佐々木くんは友達だし数真と違つてなんていうかホンモノの紳士？だし。

勝手に警戒するのはまたに由意識過剰すぎつてもんだ。

真剣に電子辞書を引く佐々木くんは昔読んだ少女マンガのヒロインの相手役みたいに、カツコよくつて爽やかだ。じうこう時間つていなあ…青春つて感じじへ〃ヤの姉がみたらしうつうつだらうつな。

数真とのじれつこめぐるめく時間が続いた後だから、癒される。

「倉橋さん？」

ああ「めん。

「ひみつをやつ漫ひてしましました。」

「……」

勉強始めて、まだ10分もたっていないのにすみません。

あれ？

えーと。佐々木くんよ、急に黙りこむんなよ？

なんか、見つめ合ひじとに自然なつてますか？

あ、そうだ。わざわざ呼び掛けられたの私だから返事待ってるんですけどね？

「佐々木くん？」

「……」

なにも返事がない。

「のまま待てばいいのか？」

無表情な佐々木くんと見つめ合ひ……。

見つめ合ひ……まだ。

見つめ合ひ… やがて。

見つめ合ひ… 少々口づくな。

佐々木くんはどひつ口を開いてくれた。

なぜか微妙に強張った真剣な眼差しだ。

「倉橋さん… 今、好きなヤツとかいる？」

?

急にそんなりサーチなぜ？

「いないよ？」

隠しても意味ないからどひさんに正直に言ひ、「佐々木くんは怖い顔つきになつた。

私をじつと見詰める… いやむしろガンつけてる。

「じゅあれ」

私はじくりと息をつめた。

気のせいか子犬のような瞳が熱っぽい瞳に見える。

佐々木くん、いかがへ手を伸ばしてきたような…

あれ？

手、握られてる。

「俺も、倉橋さんが好き」

…？

「…」

意味がはかりかねる。

私も好きだけど、それは嫌いじゃなくむしろ好き、ラブじゃなくラ  
イク的な…

しかしそんな発言はむしろ話がややこしくなりそうな、キケンな予  
感。

沈黙は金、だな。

黙つていると佐々木くんの手がぎゅっと強くなつた。

頬がうつすら紅い佐々木くん。

せつなげな瞳の佐々木くん。

好きだと言つた佐々木くん。

： これは、アレですか。

「えーと。念のため聞くけど…告白、なの？」

「うん、今克つてゐる、倉橋さん！」

佐々木くんはようやく一ノ口二ノ口といつもの感じに戻ってくれた。

## 9 逃走そして放課後～2

…」いつの時ひどいからいいんだろ？

経験値ゼロの者としては、恥ずかしがるのも驚くのもなんていうか違うような…佐々木くんに失礼なような…

なんか言わなきゃいけないんだろうけど。

佐々木くんは私を見てホッとしたようにため息をついた。

「倉橋さんが俺のこと好きになってくれたらうれしいけど、自然でいいから。

ただ、そういう気持ちが俺にもあるって知つて欲しかつただけだから。

さすがに明日から避けられたらショックだけど？」

「う…ん、それはないよ。うれしかったし」

慌てて言つと佐々木くんはホントにうれしそうに笑つた。

「そつか

「…うん」

う…なにこの青春…つてカンジのやつとつは…

赤面してしまつ。

甘酸っぱいんだよ！

モブには分不相応なんだよ！

こうこうのはもつといつ…直情型シンデレヒロインか、天然型お人よしヒロインか、あとはもう思に付かないけどそんな腹黒いタイプにお任せしたい！

私みたいな卑屈型腹黒氣取りヘタレ根性ナシ…  
いいとこ、せいぜいヒロインの友人その3みたいなタイプにはね、  
荷が重いんだよ…

佐々木くんは、『やつと口クれたー』とか呑氣なことをつぶやいて  
くれているが。

こんな出来過ぎなショチエーション、口ワイよ。

佐々木くんは私の手を離すと、

「じゃ、一緒に帰ろつか？」

促され　「ぐぐぐと頷く私の手を再び掴むと、教室を出ていく。

意外と強引な一面をみたが、なんとなく赤面していた彼をみると穏やかな気分になつたのだった。

昨日から今日と…まあ、いろいろあつたな。

いきなりなことが続いた。

禍福はあざなえる縄の如し…人生万事塞翁が馬。

佐々木くんとくつこちやえれば結果オーライ、ハッピーエンドになるんだろうか？

ドロドロの禁断のバツエンドから抜け出せる？

そんな安易に…上手くいくか？

あの数真に知られたら？

佐々木くんと付き合うとかは置いといて、告白されたなんて、ヤツが、知つたら…

ヤツに知られたら。

⋮

どうじょわ。

## 10 やつと帰還しましたが

ほふん！

ベッドへ勢いよくダイブして私は天井を仰いだ。

自分の部屋だ。

女の子の部屋にしては殺風景…ここより言ふばシンプルともいえ  
る。

ファブリックもベージュが基調で、カーテン、ベッドカバー、フローリングマットも全て無地か淡い模様入りのベージュだ。

深いブルーずくめの数真の部屋とはまるで趣きが違う地味な雰囲気だ。

疲れてるけど、数真が帰つてくる前にシャワーを浴びて髪も洗つて、明日の「ハリ出しの用意をする

いつもこまめにやつてるから、そんなに大変じゃないけど慌ただしい。

掃除はリビングのフローリングをわざと拭いて終わり。

一応、今月はリビングの掃除当番だからね、毎日簡単にやつてしま  
るんだよ。

夕飯はどちらか早く帰れるほうがつくれる」と言つてこる。

朝ご飯の時にビーフが作るのか話しあつのだ。

今日は…どうするのか話せなかつたから。別に私がしなくてはいけないわけじゃなかつた。

気づいたら、ふたり分作つてたのだ。

習慣つて、こわい。

数真は今日も部活で遅くなるんだと思つたらいつの間にかレンジで冷凍コロッケを解凍し始めてるんだからね

私はじろん、とベッドの上で転がつた。

私の髪は短い。

肩先ギリギリのストレート。

手鏡で顔を見る。

…つまんない普通の顔だ。それなりに整つているとハヤハヤは言つてくれるが、特徴のない、地味な顔立ちだ。  
なんていうか、若さ?がない気がする…

鏡の中には 他人を伺うような取り繕つた微笑ばかりが上手い私が、心許ない表情で揺れている。

今日だつて。

佐々木くんに告白されてうれしいはずがため息ばかりついてくる。

私って、卑屈だなあ…

好きだつて言われて、気が重いなんて、ぜいたく、なんだろうか？

そりや、嬉しかつたよ？

だつて、告白されたのなんて初めてだし、誰かに好意を持たれて歎なわけなんかない。

それも、『地味ながらけつこうカツコイイよね性格もいいし』と評判の佐々木くんだよ？

だから…わからないんだよ。なんで、私なんかが好きなんだろ？？

まだ深沢さんとかミヤならわかる。

可愛くてほわほわした深沢さんや、ハッキリした性格で美人のアネゴ肌のミヤなら、男の子ならたいして話したことなくてもすぐに好意ぐらい持つだろう。

彼女たちには魅力があるから。

見た目ばかりじゃない。

私みたいに人の顔色ばかり伺つづまらない女とは違う、本当に情の深い優しい人たちなのだから。

わかる人にはわかるんだろう。

彼女たちの持つ優しさが本物で、私は……一セモノの優しさだ。

あの告白の後、駅で別れた佐々木くんはいつも通りで、いやむしろいつもより少しテンション高めだったみたいだ。

私が戸惑っているようだった。

わからないよ。

数真はともかく、佐々木くん　君がわからない。

なんで、私が好きなの？

誠実そうな君に、私のどこが好ましく思えたのかな？

…聞けないな　。

しかし聞いてみたいよ…。

…うーん…なんか悩みがさらに増えたよな…

俺様数真の歪んだナルシシズムによる、愛といつも偏執。

本当にいい人な、佐々木くんの理由不明な…ほんわかした好意。

これは、単純に佐々木くんとくついたら万事オッケーみたいな話  
じゃないぞ。

もつと性格のかわいい女なら悩みはあっさり解決したかもだけどそれ言つてもしかたないだろ？

そんなことを考へていらつちに…

私は眠つて、そして時間は流れていったのだった。

## 1-1 やつと帰還しましたが～ 2

ぱちっ。

そんな擬音が聞こえそつな勢いで、唐突に目が覚めた。

辺りは薄暗い。

私は目を開けてはいるものの、一瞬にして何処だかわからなかつた。

へんな時間に毎晩をすむといふな感じによくなる。

いつたい今が何時なのか、早朝なのか夕方なのかわからなくなるのだ。

クーラーをかけていたのに背中がつづらと湿っぽい。身体が、やつぱり疲れてこのかまだどこか重たい気がする。

ぼんやりしている…頭。

ひつきまでもしかしたら夢をみていたのかもしれない。思い出せないけど。

中学の頃の夏休み。

あの時も暑い日だった。

朝から夕方まで毎日続いた夏期講習。家に帰つてリビングでまざらんでいたあの感覚がなぜかいま・胸の奥でたなびいている。

ホツとするような何か物足りないようなだけだるい疲労感。

充実していたとはいがたい夏休みも、でもどこかで安心感があつたのかもしれない。

安心感、か‥。

小学生の頃は。

夏休みは家族でご飯食べに行つたり、ミヤと数真と三人で近くの市民プールに行つたり、たまに図書館で夏休みの自由研究の調べ物をしたり、お祭りに行つたり。

健全なゾダモの夏休みはこうだよ、っていう定番の過ごし方だったな。

友達や家族と過ごす夏休みはこんな感じだろつ。

中学になると夏休みは塾通いに明け暮れて‥それでもひと夏に一回くらには家族や友達とプールやお祭りには行つてた気がする。

高校生になつてからは遊びに行くこと自体がめんどくさくて。  
夏期講習がない日は家で数真とゲームしたり借りてきたDVDみたり‥夏休みだからって普段と別に変わりなかつた。

‥去年までは、何もかわらなかつた。

佐々木くんと、そして数真。

私の穏やかな夏に入り込み不協和音を奏でる…異分子たち。

ああ。

なんだろう。

なんで急にいろいろ起ころうかなー？

このままいつまでも眠つていい…

クーラーを効かせて布団に潜り込む私を現実へ引き戻す、暗闇から  
響く足音。

数真が帰ってきた。

## 1-2 やつと帰還しましたが～ 3

一階へ降りてみると数真はすでにリビングで窓いでいた  
「どうやら夕飯もシャワーも済ませたらしい。

相変わらずテキパキとしてるよ、あんたは。

時計を確認すると、数真が帰宅してから40分…過ぎているだけ。  
こんな少しの時間で要領がいいことだ。

「ただいま」

ソファーから立ち上がり数真がにこっと微笑してくれる。

「…おかえり」

思わず返してしまった。

何か違うだろ！

あたふたしてると数真は、温度を感じさせない微笑を浮かべたまま  
近付いてきた。

逃げなきや。

「待つてたよ。なかなか降りてこなかつたね」

「…別に2階で寝てただけだし…なんか用だつた?」

「会つたかった、和音」

しまつた 遅かつた。

気付いた時にはすでに…

自然に穏やかに…右腕で引き寄せられてしまつていた。  
お風呂あがりの香りと数真の匂いが混じつて、脳髄にぞわりと刺激  
していく。

や、やばいよ…

美形にピッタリな退廃的な微笑が目の前。

しかも。

ゆるいシャツの上からでもよくわかる。  
細身ながらも筋肉のついた、しなやかな身体。男性的なキレイなう  
なじ。スポーツで鍛えたしつかりした肩と意外にたくましい感触の  
腕。

これが実の弟でなかつたら思わず道を自分から踏み外してしまった  
うな…

確かに、男の佐々木くんでもえも赤面してしまつほど濃厚だ。  
数真フロモ…恐るべし。

そんな私におかまいなく、数真是微笑をむけに深めた。

「和音、じゅねいとせめ」

「え…」

「夕飯。美味かつたよ」

「あ…ああうん」

「なんで私、照れてるんだよ！  
『飯のことだから！』

何と勘違いした今！？

…まあこんな至近距離ですし、なにされるのかわからないし、緊張  
するにはしかたない…

「や、そんなに近づかないでよ」

「やだね」

「もう、いいから離してよ、腕…」

「…そんな口こつまできこてられるかな

ぞわり。

無理矢理抱き寄せられ、背中に何かが、入ってくる。

これは…指か？

「数真つ…やめなさい…」

「そんな力オして…説得力ないな」

「ひやつ…？」

どんな力オしてるんだよ私…って、ボヤボヤしてる間に数真とまた密着状態で、背中に指が…

指が。

「ひ…あつ…」

「ホント、いい声で鳴く…そそらせんなど

背骨を押すような撫でるような、緩く微かな指先の動き。

それが時たま、弾くように撫で上げてくると、妙な刺激がぞわりと広がる。

水溜まりに一滴で広がる波紋みたいに。

乾いた数真の声に比べて、その指の動きはじつとじつと速度があり妙になまめかしい。

「和音けやさ、何か俺に言ひことはない?」

と

それまでどちらかとこりと淡々としていた数真の気配が…急に消えた。

「え…?」

なんだこりの…じんわりとした…空氣せ。

まるで梅雨に咲いた濃紅の大輪の薔薇みたいな。

むせ返るほど香りのキツイ薔薇のよつに艶やかな。

くつわいとした、絵に描いたような…笑顔の表情なのこ。

「あ…」

自分の喉がじくじくと鳴る音を聞いた。

「俺、言つたよね?」

数真の低い声色には、子供に言つて聞かせるのと同じ穏やかな調べが

ある。

それなのに数真は…  
ぜんぜん笑っていないのだ。

怒つてもいい。

数真是。

ただ私をじっと観察している。

色素の薄い茶色の瞳は私をじっと見つめている。

「和音ちゃんはさ　自分が誰のモノか自覚ないよね」

なにいつてるんだ。

私はモノじゃない　なんて反駁も白々しい。

私の背中をなぞる数真の指。

「もつ　立つているのもツライみたいだね」

## 1-3 やつと帰還しましたが～4

『かーずね

一ちゃん

人は。

幼児の頃において誰しも自分は特別であるという思いを抱いて生きている、といつ。

いわゆる、万能感、といつヤツだ。

たいして可愛くもないのに本氣でアイドルになれるなりたいと思うたり。

将来はドラマでみたカッコイイ医者や刑事になりたいと言つてみたり。

それは自分の潜在能力やなるために必要な努力、なれなかつた時のフォローなんておかまいなしに見事なくらいの…

血口肯定感。

足りないものは、誰かがなんとかしてくれる。

幼児ならば生活は親に庇護されるのは当然。  
その延長線上に、輝かしい未来がある。

だから未来が輝いてみえている。

でも、大人になつてゆくとわかつてしまふんだ。

自分でなんとかしなくてはいけない。

なりたいものがあれば。

そうなれるように、努力しなくてはいけない。

魔法なんてないから。

ビックリする頭のよさもそれだけで世間に認められるほどの運動能力も、地道な努力があつてこそ。

なにもしなければなにもなれない。

なんの能力もないのなら人よりさらに努力しなくてはならない。

いつからそんなことを考えるよつになつたんだろう。

幼稚園のころ。

少なくともアイドルになりたいと七夕の短冊には書かなかつたが。

…ケーキやせん？

将来の夢といつより食い氣だな。子供のころから私は何を考えていたんだろう。

自由になりたい。

もう比べられたくない。

つまらない存在でいることを許して欲しい。

期待しないで。

多分裏切るから。

いいひとなんかじゃない。

怒らないのは優しいのは。臆病なだけだから。

数真がうらやましい。

二重人格のくせに、みんなわかつてないよね。

あんな腹黒なのに。

なんでわからないの。

臆病な私を嘲笑う数真。

劣った姉を見下す周りのみんなと数真との違いはどこにあるかという  
んだろう。

私は数真が怖い。

自分が絶対であるといまも信じているかのよつた、自信に溢れた数  
真。稀にみる優れた非の打ち所のない容姿と能力、如才のなさ。人

望の厚さ。

少年向けスポーツマンガに出てきそうな、熱血とは程遠い器用なタイプだ。

主人公の親友その1タイプか？それにしては出来過ぎか。

数真は夏の強すぎる陽射しがみたいだ。

私はヒマワリじゃない。

ましてや薔薇でもカスミソウでもない。

いま、私の上で自分の欲望を私に打ち付けるのに夢中なこの美しい男は、いったいなんなのだろうか。

触れられるたびに、淫らな嬌声を漏らすこの女は、私だなんて。

いやだな。

何度もなんども交わって。

別に誰ともやれるんじゃないこのふたり。

なんで実の姉弟でそんなコトしてるんだ？

妊娠、したらどうするつもりなんだ。ここは古代エジプトでもなければ飛鳥時代でもないんだぞ。ああでも日本では両親とも同じだとやっぱタブーだったかな。

『かずねちゃん』

「かずねちやんとこっしょがいー。」

『かずねちやんとこっしょがいー』

「あひあひこっしょ。」

「あひあひこっしょ。」

『かずめとせこっしょにかないから』

『なんでへばくはこやだよかずねちやんとじがいー』

『かずまなんてわいー』

みんながかずまをとるなつてこつんだから。  
わたしほそんなつもりなこい。』

『あひあひこっしょ』

かずねちやんとかずまくんでめこれい、しふる、つじ。

『かずねちやん…』

ないたりてしらなー。』

『わたしはひといがいいの』

みんながみてる。

かずまくんかわいそうつていいながらみんなうれしそうだ。

…よかつた。

これでまたあそんでもらえるよね?  
かずまはみんなにあげるから。

またはなしかけてもうさじはねくさじしてくれるよね……

…?

『 もう 立つてこのもジライみたいだね』

やうこえぱや。

佐々木サンとすいぶん仲いいんだね、 和音ちゃん

背中から入り込んだ指こ、乱されて、そして。

床の固い感触。

また、強引に服を剥ぎ取られたんだった。

裸の私を見る数真は、大切なモノを愛でるかのように穏やかに微笑している。

『でもさ……実の弟の前でこんな足を広げてるなんて知つたら、佐々木サンどうだろ？な。恋も醒めるか』

『……そんなん、じゃ……』

『ないつて……？』

ふつと瞳を細め、数真は愛しげに唇を這わせる。

まるで年下の恋人にでもするかのような纖細な優しい感触。妖しい手つきで、見られたくないところをまさぐられ、吸い取られる。

『…………』

嬌声が、溢れる。

カラダが勝手に走り出して止まってくれない。

数真は……とても満足げだ。私のカラダはヤツの愛撫に従順すぎる。

『和音ちゃん、は誰のモノか教え込まないとダメだな。もつともつと、カラダで……ね』

『かずねちゃん』

なんども髪を指先で撫でられる。

降つてくるのは甘いキス。触れるような優しい、でも…自分自身の味がする淫らなキス。

『愛してる。和音』

数真は。

『かずねちゃん、だいすきだよ』

まるで本当に私が好きみたいな優しい力才をしている。  
小さな子供だったころみたいに。

…重い。マブタが。

起きなきや。

いまいつたい何時なんだ？

「ん…」

見覚えのある天井。

クローゼット。

勉強机。

…また自分の部屋だよ。

なんかすんじい口の夢をみていた…と思いたいけど残念ながら。  
自分を欺くにはすこい身体の疲労感だ。

これはー、アレだね。

またやつちやつたとこますかヤラれてしまったといつか…

なんて展開だよ…

弟や同級生に「田代へ、わざわざ結婚毎田ヤツでばつかだし。

こいつの間にかパジャマがわりにしているTシャツを着せられたるし…

ここの運んだのは数真か。時間を確認するとどうやら朝の4時みた  
いだ。まだ外はうつすらとほのかに暗さがある。

もう朝なんだ。

つまり。昨日もひくに勉強できなかつた…んだ。  
期末、もう始まるのに…  
どうせ推薦は無理だから別にいいんだけどね。  
赤点だけは避けたいけど…

「ん?」

と、私はふと「み箱に田代がいつた。

心持ち増えたティッシュの量、そのひとつにひよりんと置かれた  
ピンク色の…

うつ、と声をあげた。

だつてそれは…

「ばかっ…！」

埋める…

ティッシュの中…。

「はー…」

なに考へてるんだ…数真。

そう、たつた今、視界から消した半透明のピンク色の…お祭りで持ち帰った水風船が6日たつたらこんなですみたいな…中味が入った…

…アレですか。

数真。

あんたは…私に避妊してくれてありがとうともいえといつのか?

一瞬でも。

ヤツの中に私に対するアツい何か…をみたのはやつぱりまじだつたのか?

それとも。願望があると人は見たいように見ててしまう…

つまり自分に都合のよいように相手を解釈しがちなんだけど。  
その典型的パターンなのだろうか?

優しくされたい。

誰かの特別でいたい。

信じられないと、私を信じさせてくれないと、相手を責めているんだろうか。

私は。

数真や佐々木くんに求めてるんだろうか。

オマエには価値がある。  
オマエが欲しい。

そう認められ求められたがつていいんだろうか？

キミはしてくれるだけでいいよ。

そう望んでいるんだろうか。

甘い自分を差し置いて。

相手に本気を期待して。

絶対的否定の繭に包まれたがつてている

んだろうか。

肯定される…絶対的に。

それは蕩けるような甘美な響き。

あんたは。

和音：あんたはいつたいどうしたいの？

このまま流されるのも何もないのも、それは非主体的ながらも選択をしたことになるんだよ？

数真とエツチザンまいしての場合じゃない。

今年は受験だつてあるんだ。勉強もやらないと。

そう、佐々木くんは？  
告白されたんだよね？

佐々木くん：何を考えているのかわからない、けど優しい人。暖かな春の空気みたいな人。

だからもひとつ本当の佐々木くんを知りたい興味はあるけれど…

数真は許さないだろう。

私は肺の奥底から息を吐く。  
なぜか切ない。

息苦しい。

弟に弄ばれて嫌悪感どころか、数真を受け入れてしまった私のカラダ。

まだ私の心はアイツを弟以上に認めていないから大丈夫。

数真。

その名前はもはや呪縛みたいな響きを持つ。

優れた私の弟、私のすべてを奪つた恐ろしい…でも憎めない、その腕に捕らえられると私はなにも考えられなくなる。

からっぽになつてしまつ。愛とも恐怖とも憎しみとも違う。

それは…

一言でいえば。

呪い、だ。

数真は私を捉えて離さない。

数真に抱かれると私は私でいられなくなつてしまつ。

おとついよりも昨日。

実際に快樂を得る時間は確實に伸びている。

まるで、赤い靴の童話みたいだ。

いちじ履いたら死ぬまで踊り続けさせられる、赤い靴。靴を履いた  
女の子はどうなつたつけ？

ああ。

私の理性よ。

もつと根性みせなればあんたのヨリシロは呪いに焼き尽くされて  
しまうよ？

もつとしつかりしなくては。  
でもどうしつかりしたらいいんだね？

あ。

ふと、弾かれた私の意識が何かをひろいあげた。

何処かの家の庭で、蝉が鳴いている。

カナカナ…カナカナカナ…

朝っぱらから哀しげな響きだ。

私の焦躁にピッタリの音色で迎えてくれるひぐりじの鳴く音。

それは私に思へ出させてくれるのだった。

慰めでも宣告でもない単なる事実を。

焦りも苛立ちも恐れも。  
期待も熱情も安らぎも。

まだ始まつたばかり。

夏は。

まだ。

## 15 夏休みになりました

そう。

夏休み、始まってしまったのだ。

終業式の帰り道、『明日から学校ないんだあ』って思った瞬間に、毎年、いよいよのない開放感が広がるんだけど

今年は受験生なので。

地味に沈みます、気分。

夏休み中にレベルアップしないと、公立の4年制は難しいってことないだ進路指導といつも引導を渡されたばかりなので。

別に短大でもいいかな。公立の短大…は地方にたくさんある。就職に困りそだだから、それなら何か資格を取れるところがいいかなあ…

栄養士…

結構就職が厳しいみたいだし朝から晩までずっと大量の調理を毎日するつてちょっと体力的に無理…だ。

保育士…

公立の保育園ならともかく、私立はお給料安くて自立するのは大変そう…

それに、ちいさな子供って親戚とかで身近にいなかつたからあんまりピンとこない…

と、具体的に考えてみても難しい。

短大や専門学校つて、かなり目的がクリアでないと決められないな。私みたいなへタレには無理だよ。看護師とかね。

学校厳しくて辞める人も多いみたいだし。夜勤大変みたいだし。

そつぼやく私の相談っをミヤは『呆れたわー』と一笑した。

「あんたね、そんなマイナス情報ばっか集めて、いったい何がしたいの? どうせネットで拾つてきた話でしょー」

「そうだけど……」

「ネットに自分の気持ちを詳しくカキコヽする大人はね、現状に不満があるか暇があるか…どちらにしろ中庸な精神状態じゃないから。みてるだけならいいけどね、自分を当てはめ過ぎないようにしないと。結局、他人の意見なんだからそれが全てじゃないよ」

と、購買で買った紙パックのジュースをじゅっと勢いよく飲む。

廊下で飲むと生活指導に見つかると怒られるのだが、今日は会議で先生の姿はない。

わたしはミヤと並んでいる。

頭一つ背が高いミヤは脚が長くて細くて、流れる長い髪も艶やかな美人だ。すれ違う一年女子が、『だれ?』つて小さく振り返つている。

「なんかね…進路悩んじゃって」

「夏休み、もう決めた道を突き進む時期だよ…弱気になつたひやるの氣もなくなるよ」

「うん…ホントにやる」

「下げるのはこいつでも出来るんだから、今はとにかく上げて…」

「弱気になつてるよね。」

もともと田標が曖昧な上に、最近ほどんど勉強に身が入らないから、考えがマイナス思考になつていて。

黙り込む私の肩を軽く叩くと「やは励ますよ！」声を大きくした。

「今日は、家に泊まりなよ」

「ハヤシタケ？」

「うん。予備校の講習も、学校の補習もまだ始まらないでしょ。ついで一緒に課題やつよ。久しぶりじゃない？和音が家にくるの」「え…いいの？」

「いいい。お泊りおつかけだよ、ね、そうしなよ」

「ぱんぱん肩を叩かれてちょっとぶりつ…相変わらず怪力なんだよねー細いのに。」

「うん…じゃあやしそうかな…」

「やつたあ、お泊りね？」

「う…うん」

いいのかなあ…

私はちりりと数真を思い浮かべてしまつた。

数真に、お伺いを立てる必要はない。

だけどや…最初の一一日間は、毎日数真とあんなコトしてて、でもそれから今日の終業式までは期末やら何やらでそういうことと無縁だったのだ。

相変わらず家の中で軽くキスされたり抱きしめられたりはしたけど、挨拶がわり、つて感じのライトなもの。

べつに…

物足りないわけじゃないよ。でもなんか…急に優しくなったような気がする。

強引じゃないからそう感じるだけかもしけないけど、『後の進捗について』あなたに任せます』

つて雰囲気がするのは…

気のせい…じゃない気がする。

それにひ、佐々木くんのこと…数真がもしかしたら感じてるかもつて瞬間もあつたし…

そんな微妙な時期？にお泊りですか…うーん…。

黙り込む私をびりりつたか？やは満面の笑顔だ。

「わあわあ、もー決まつたんだからね。はやこことあなたが行つて、用意しようか」

「あ

「またな

佐々木くんがミヤと歩いてる私にニコニコと笑つて手を挙げてくれた。なんだかやり残した感が強いけどとりあえず、無事に夏休みに突入しました。

そしてそのままズルズルと連れて行かれました。ミヤさんち。

駅からほど近い閑静な住宅街。

ミヤの家は庭付きのかなり大きな家だ。本人から聞いた訳ではないけど、戦前…はこのへん一帯がミヤんちの敷地だったとか。今も少し離れたところで「夫婦でクリーツクをやつてる両親がいる。

「ただいまー」

「愛さん、お帰りなさい」

廊下の向こうから、すぐに声が返ってくる。40歳くらいの、長い髪を一つに纏めた笑顔が優しい雰囲気のお手伝いさん…弥生さんが顔を出す。

エプロン姿が、昭和の上品な婦人という感じ。

声も顔も優しい、この人も大人なんだけど癒し系なんだよね。

「もー、愛さんはやめて

「どうして？かわいいお名前ですよ？」

ミヤは膨れつ面だ。

あ、ミヤの本名は富岸愛。自分の名前が好きじゃないみたいで、昔から『ミヤ』って周りに呼ばせてるんだけど、弥生さんと「両親だけは例外みたいなんだよね。

「それより、和音が今日泊まるから夕飯よろしくね、弥生さん」

「あら、玄関先で申し訳ありません、さ、じいっそ」

スリッパを勧められ、

「ありがとうございます。お世話になります」

私はペロシとお辞儀をして、弥生をと仲良く話すミヤに促され、部屋に上がせもらつた。

ミヤの部屋に入るとすぐに男の人が麦茶を持って来てくれた。

「いらっしゃい、和音ちゃん。久しぶりだね」

背が高い…

キラツキラツした笑顔が眩しい。

数真とは違う…大人って感じの人だ。顔立ちも俳優みたいに綺麗すぎるし、雰囲気というかオーラがただ者じゃない。

私は記憶の中から、一つの人物像を思い出した。

「え…雅也さん？」

「当たり。…てさ、それ以外に何があるのかな。」

不思議そうに私を覗き込む雅也さんの前髪が、さらりと揺れた。

「だつてあの、お」「へ

「ん?」

首を傾げてニコラと微笑。普通なら似合わない仕種が板に着きやす  
だ。

雅也さんってこんな人だつたつけ?

しばらく会つてなかつたので印象がしつくつしない。

「…な、なんでもありますん」

「アニキ、カオ近付けすぎ」

「あつ」「メン。和音ちゃんが相変わらず可愛いくらい、ね

促されやつと少しだけ離れた雅也さんをじろりと睨むと、ニヤは私の肩を掴んで抱き寄せた。

「もー、オッサンみたい。可愛いからつて馴れ馴れしいんだから」

「おい、まだ20代だからオッサンは勘弁しろよな」

「ふん。四捨五入したら30でしょうがー」

きやいきやこ騒べ//ヤとそれに応じる雅也さん。

私はふたりのやつとつをほやつと眺めていた。

雅也さんの変化には驚いたけど。

兄妹ってこんな感じだよね、いいなあ。

久しぶりにふたりがいるところをみたせいか、新鮮な感じがする。

いつ見てると、美男美女の兄妹だな。

「和音ちゃんどうかした？」

「い、いえ。雅也さん…あいついえばいつも帰ってきたんですか？」

「シカゴから…おとついかなあ…知らなかつたの？」  
「はい…」

「アニキ。わたしら期末でそれどころじゃなかつたの。だから今日は連れてきただでしょ？」

ミヤはなぜかニヤリと雅也さんをみた。

「…和音って結構モテるんだよ、アニキ」

「な…ミヤー？」

「照れない照れない。あたし、知ってるんだからー  
あんたこないだキスマーチ首に付けてたでしょ！？」

「

え？

いきなりまた『ヤモ』で何言こ出すんだ…

雅也さんの表情がすっと消えた。

「聞こうか？」

「え」

「キスマーク、誰につけられたのかな？まさかかず…」

「ち違いますよっー！数真は弟ですよ有り得ません何言つてるんですか、ま、雅也さんてばやめてくださいよっー？」

「この激しい舌走っぷりが逆に深刻な感じよね？アーチ」

「…やうなの？」

って、雅也さんになぜか詰問される私。

なんなの！

まさか…キスマークがついててしかもチェックされてたなんて…不覚だ。  
恥ずかしそぎる。

しかもふたりとも相手を見抜いてるし。

「あの…ええとですね『ヤモ』…そう、私こないだ男子に告白されまして

して」

「えつー、誰よ」

苗条な女性の腰元が、机に向かって座っていた。

「回じクラスの…」

「佐々木ね。うーん、あいつ、あなたにベッタリだつたしね」

「ひゅ、せやつ…むづ納得してゐじ。」

そんなベッタリって…ちょっと親切だなあって程度なのこ。

「ま、まあそんな訳です」

わざわざ話を終わらせるつとした私はやまた、一いやつと笑つて  
きた。

「ミヤの」の力音はやばい。数真とここ//ヤとここ、なんで私の恋愛  
話に絡みたがるんだ。

「昨日は佐々木がした。けど、キスマードは彼じゃないでしょ？あの男にいきなりそんなことやる度胸はないし、あなたたちまだそんな雰囲気じゃないもん」

「そんな…雰囲気？」

「やつよ。ヒツチまでこつた男女特有の、みんなの前ではあえてな

んでもないって感じの… 実はラブリーブなの一見妙に落ち着いた雰囲気。

佐々木はまだ浮かれた感じだから、あんたたちはキスもまだだよね？  
佐々木が告白しただけでまだ付き合つかもわからないんじゃないの？  
今日は終業式だからカレカノなら約束ぐらにしてるじゃ、ふつつ

鋭い。

鋭すぎる。

「で、どうなの？あのシステムせとつとう一線を越えてきた訳？姉さんは俺の女だとか言われけやつた？押し倒された？」

「…あ、あのね//ヤ」

誰かに肩をまたやんわりと掴まれ振り返る。ひ。

「…//ヤ。マンガの読みすぎだ」

雅也さんは、興奮状態の//ヤから私を引き離してくれた。

それから一小一時間、//ヤになんだかんだと言われたけれど私は決して数真のことは口を割らなかつた。

偉いよ、私。

あれだけしつこかつたらポロッと//ヤ//ヤになつたの。

ミヤの場合、数真のシスコンぶりを面白がってるんだろうけどなにも雅也さんの前で言わなくていいのに。気まずいじゃないか。

弥生さんに呼ばれて夕飯の支度にいった、主のいないミヤの部屋で。私は、雅也さんに英語と数学をみてもらっていた。

雅也さんはお医者さんだから頭がいい。

シカゴには救急医療を勉強に行き、今度は市内の病院に勤めるんだつて。凄い人気だろうね…

患者さんやナースにモテモテだろう。

でも雅也さんは次男だからやつぱりまたいづれはアメリカに行くんだとか。

そういえば…。

私は勉強に区切りがついたところで雅也さんに聞いてみた。

ずいぶん豪勢な夕飯なのかミヤたちまだまだ呼びにこない。

「貴也さんはお元気ですか？」

「…貴也ね」

雅也さんは氣だるげに顔をしかめ、眼鏡のフレームを外した。

「勉強はまたあとにしようか。眼が疲れた」

「すみません…帰国そうとうしてしまって」

「いや、実は昨日は久しぶりに友達に会って寝てないんだ。これく

「うーで疲れはしないけど、ハタチ迺わねとホールはくるね……うーん伸びをする雅也さん。

「このくんは前とおんなじだ。雅也さんはキラキラした王子様のイメージよりもダルそうな風情がよく似合つよ。

「どうしたの?」

「雅也さんが昔と変わらなくて安心しました」

「変わらない、ね……。そんなことないよ」

「すい、と雅也さんがテーブル越しに私に顔を寄せてきた。

「……？」

床に直に座り込んでくる。

だからか、あまり近付きすぎると……圧迫感がある。

「えっと……なんか私、マズイことこましだ?」

「和音ちゃんの天然で無防備なところはめぐくらでみていいのだけでもマズイ」

「は?」

「雅也さん?」

私はじりつと下がった。

いい加減、この展開はマズイことぐらいわかる。わかるよ！」なつたといづべきか。

雅也さんは私を見つめてくる。

マズイよね…

「あの」

「和音ちゃんは、自分の好きな人の幸せを素直に喜べるへ…」

思わぬ台詞に私はきょとんとした。

台詞以上に…驚いたのは、雅也さんがなんだか疲れているみたいにみえたのだ。

…徹夜明けだから？

何故なのかわからないけど。違つ気がする。

「雅也さん？」

「『メン。へんな』と言つたね…もつて降りようか？そろそろ呼びにきそつだし」

雅也さんはどこか寂しいような哀しいような表情を一瞬滲ませた。

なぜそんな力オをするのか…理由はわからないけど。

私は雅也さんの言葉とその表情が夕食の間中、心に引っ掛かっていた。

## 17 夏休みになりました～ 3

ミヤには10歳離れたお兄さんがいる。  
雅也さんはその一人だ。

で、貴也さんは雅也さんの双子の弟。  
確か東京の病院でお医者さんをしてるらしい。

「タカ兄は、ずっと東京で二ヶ月には帰つてこないみたい。  
夏休みも仕事なのがもね…」

「忙しいんだね」

ミヤは、じうだかねー?と首を竦めている。

「和音には言つたが、タカ兄、今度結婚するんだよ」

ええー?

「えーあつやうなのー?あ…おめどといつ」

改めて聞くと驚く。

貴也さんはあまり話したことではない。  
小学生の頃。ミヤと遊んでいたら高校から帰つてきた貴也さんと挨拶したくらいだ。

黒髪で、背中が真っ直ぐで瘦せて脚が長いのが子供心に印象的だつた。

余計なものが一切ない、端正な無表情。笑つたところを見た記憶は、

ない。

貴也さんって厳しくてなんだか怖いイメージだつたから…女嫌いだつてミヤは言ってたし。結婚つてしなさそうだつたけど。

むしろ雅也さんのほうがなんで結婚しないのか不思議なくらいだけど。

「多分、式はしないで、そのかわり新婚旅行に行くからその休み貰うために今は仕事一色なんだよねー。

ま。ふたりもアニキが来たら暑苦しいから別にいいけど。マサ兄はほ」の夏は仕事ないみたいだしね」

食後のお茶を飲みながら、またミヤの部屋で勉強している。今度はミヤとふたりだ。

「…和音？」

私は慌ててケータイをカバンに入れた。

「気になるの？」

「…」

「連絡したんでしょ？」

数真にはメールを入れた。電話する勇気はなく、ただミヤさんちに泊まりますとだけのメッセージだ。

まだ部活なのか返事は来ない。

いつもならすぐに返信があるのに……夕食前にメールをしたのに連絡がない。

「そんな力オしちゃって

「え？」

「今、和音すごい切なそうな力オだった。まるで恋する乙女、だよ

「……ヤ。からかわないでよ」

「妬けるね。みんなラブラブでけっこつことだよ。……なかよきいとはうつくしきことかな、だよね」

何か一人で納得して勉強に戻るつとする//ヤ。

「ちょっとー私は数真なんて好きとかそりこりのじゃないからね

「ふふつ。じやどういつのかつて聞いていい?」

…

「姉弟愛って限りなくヤバイ香りだからね?」

言わなくてよかつた…。

「く、腐れ縁?」

「それ兄弟姉妹間には使わない」

… そつなの？ 一番ピッタリくるんだが… んー。

「あたしが、あなたと佐々木がふたりで喋つてるとこを見たことがあるんだ」

ミヤは私を真っ直ぐに見た。

「あんたたち、仲いい感じで話してたよ。」

ミヤは数真をみたのだと言つた。私と佐々木くんがいるところを見ていた数真。

「すごい目付きだった。オスの目っていうの？ 僕のオンナに近付くんじやねえ、って感じ。眼で人を殺すってあんなのかな？」 どんな目付きなんだか…

「優等生のシスコン君のあんなカオ、久しぶりだつたからなんか萌えたわ」

「え… 久しぶりって？」

「知らなかつたのやつぱり  
何が？」

ミヤは形のいい眉をぴくりと反らせて、ため息を大袈裟についた。

「うーん… 和音のそういう二ブイとは天然だからある意味残酷だよね… シスコン君に同情しちゃうかも。逆にシスコン君がああなつたのは和音の天然さのせいかもね。粘着対天然の相乗効果？ はー… 萌え萌えするね…」

「『ビハ』の意味よ」

大人っぽい微笑で、ミヤは『さあな』と今度はあつさりとノートに向かってしまった。

なんなの。

人を天然とか『ブイ』とか…

私は思い出した。

『二『ブイ』』

… じのフレーズは。

最近聞かされた気がする。『ビ』じでだ？

思い出せない。

… ああもう。

数真から離れてホツとしてるはずなのに、なにやつてんだろ、私。

さつきまで雅也さんの態度が気になつてた、のに。

ちょっと数真から連絡がないからつて…

雅也さんは大人だから。

私にわからないいろんな事情があるんだよ。

数真はまだ子供だから。だからこんなに落ち着かないんだ。

その夜。

何回ケータイをみても数真からの返信は無かった。

よく朝。

世間的には楽しく自由なはずの夏休み第1日目を私は迎えた。

昨日までの開放感は消え、変わりにまたプレッシャーが気分を重くさせる。

とうとう夏休みかあ…

今年は頑張らないと。

ふかふかのベッドにいつもと違つ肌触りのシーツから起き上がり、夏休みの予定を思い浮かべる。

学校の補習授業、予備校の夏期講座。模試。

相変わらず代わり映えしないラインナップだな。

しかし先生に言われるまでもなく夏に伸びないと本気でマズイんだよね…

昨日は久しぶりにかなり勉強した。これくらいのペースでいければ下がることはないだろう。出来たら飛躍的上昇を図りたいけど、みんなも頑張ってるから相対的には上がるのではないかかもしれない… 偏差値とか判定とかね。

とりあえず成績は置いておくとして、それ以前にまず問題は、勉強に集中することなんだよね…

真面目だけが取り柄なのに、カラダは口々口と裏腹で数真に翻弄されっぱなし。

そうして。

カラダに引きずられるように私は確かにヘンだつた。

ついこの間まで、数真に強気だった自分が嘘みたいだ。

数真のことが気になつてしまふがないのだから。

これは恋愛感情じゃあない……なんでメールに返事がないのか気になつて仕方ない……それだけだ。

情けないな、私。

…といあえず着替えを済ます」とこひょひ。

うまく働かない頭を動かしてゆく。

…そりいえば昨日は、ミヤヒロの客室に泊めてもらつたんだっけ…

そうだった。

昨日は家に帰らなかつたんだ。

ヒ。

数真の顔がふいに浮かんだ…それを頭の隅へ押し込む。

それでも。

客室が一つもあるんだよ…ミヤヒロ。

我が家もそんなに狭苦しさはないけど、家が広いんじゃなくてただ人口密度が低いだけだし。

いつもふたりだけだから。

……。

だめだ。

数真の顔がぐるぐる浮かんでくる。

胸の底がなんだか落ち着かない。

そわそわと。むずむずするような。

息をするたび何かを忘れているような気がする。

なんなの、これは。

とにかく今日は早めに家に帰る。

自分の気持ちに名前をつけたくないで、私は着替えを済ませベッドを整えるとキッチンへ降りていった。

「おはよう和音」

「おはよう//サ……『めん手伝えなくて』

「弥生さんがあなた全部してくれて、あたしは並べただけ。アーキはまだ寝てるし……もつ食べちゃおうよ？」

すでにキッチンからダイニングテーブルへと朝食は並べられて、美

味しそうな湯気がたちのぼっている。

スクランブルエッグにサラダ、ヨーグルト。フルーツもある。

プレートにキレイに盛られた料理を見て、私は感嘆をもらした。

「す、…朝から豪勢ですね」

「そんな…豪勢だなんて。お口に合えばと今日は洋食にしたんです。  
確か卵はスクランブルが和音さんのお好みでしたよね。

飲み物は何にしますか？

コーヒー、紅茶？牛乳にオレンジジュースも用意できますよ

弥生さんは私の為にトーストを焼く準備をしながら聞いてくれた。

なんか凄い…

久しぶりに高岸家にお泊まりしたけど客室といい食事といいホテル  
みたい…

「じゃあ、オレンジジュースで」

「はい。今すぐお注ぎしますからテーブルへどうぞ」

「すみません… いただきます」

すでに身支度を完璧に整えたミヤはテーブルに座り、紅茶を飲み始めている。

「和音、お先に」

「ううん…あ」

「どうしたのよ？」

一足先に焼けたトーストをオレンジジュースと一緒に受け取り、私はバターを選んで塗る。

マーガリンよりも固く白いカタマリが、キツネ色のサクサクした表面にゆっくりと溶けてゆく。

「なんか…うん」

「何？」

ミヤも弥生さんからトーストを受け取り、ブルーベリージャムを選んで手早く塗っている。

髪は艶やかな茶髪のストレートロング。

モデルみたいに細くて背が高い。大きくて華やかな目元、纖細な唇とほつそりと通った鼻筋。

今日は淡いピンクのふんわりしたミニワンピを着て、流行りらしい変わったベストを重ねている。見た目がモデル出身の女優みたいだからか、こうして見ると、まさに『お嬢様』だなあ。

眼の保養だ。白薔薇の妖精みたいだ、なんて子供みたいに思つてしまふ。

じつへつと眺めていた。「ヤは怪訝かつて聞こえた。

「なによ? ビリしたのやつから和音…ああ」のカツコが仮になる

?

「うん。 どうか行くの?」

「まあね」

綺麗に化粧した顔を私に向けて「ヤは顔をしかめた。

「実は今朝、システム君から頼まれたの。 テートしてくれつてさ」

え?

「でね? 良かつたら和音も一緒にって言つたんだけどそれじゃ「テー  
トにならないつて。だからまあ、ダブルデートならいつかなどその  
条件でオッケーしたの」

ええ? ビリ? ビリ?

「システム君にはブリーフ姉がつまものでしょ? だから

…は?

私は口の中のーストをどうにか飲み込んだ。

ダブルデート？

いやいや、あの…その前に。

数真がミヤヒデート？

そんな」と今まであつたつけ？

また動悸がしてきた。

なんだらか、もう。数真がらみで最近「いつなる」とが多こよ。

ミヤヒ数真。

考えてもいなかつた。

深紅の薔薇と白薔薇の組み合わせ。

動搖する私をよそに、ミヤは氣だるわうに続けてきた。

「男子、今から調達するから誰か好みあつたら言って? 佐々木でもいいけど初デートがダブルデートではアレかなと思つし」

「…」

またいきなりな展開!。

私ひとりがついていけないのでつた。

ミヤと数真の待ち合わせは10時だとかで、時間はあつたはずだった。

な・の・に。

服を貸したげる、と半ば強引にミヤと弥生さんにああでもないこうでもないと着せ替えられ、ようやく決まった頃には予定时刻ギリギリになっていた。今すぐ家を出ないと待ち合わせに完璧に遅れる。そんな時間だ。

私はまだ一人がなぜデートするようなことになつたのか知らない。

別に関係ないし。

そりやあ驚きはしたけど、数真の考へてることなんて昔からよくわからぬ…わかってなかつたんだから。

いきなり私を好きだと言い出した…それが突然始まつたように突然気が変わることもあるのかも知れない。

そう私は考えていた。

冷たい考えなのだろうか？

もっと数真を信じていたら裏切られたと嘆いているのだろうか？それともショックを受けている？

でも正直戸惑いはするけど、数真のことを残念に思つたり悲しんだりする気持ちはなかつた。

あの重苦しい…私の背中を、軀を這う指先。肌の毛穴から入り込む何ともいえない感触。執拗な愛撫。

数真がいくら愛を囁いても甘くキスをしてきても、そこには愛情とは違う感情しかなかつた。ように思つ。

そう、上手く言えないけど…支配欲、征服欲。

妖しい暗い笑みに閉じ込められた感触に今でも逃げ出したいくなる。まるで乳白色のどろどろの沼に絡めとられまいともがいている。甘い匂いに誘われた蟻の末路みたいに。

甘く囁いて欲しいせに、その代償は払いたくない。だからこんなにホツとしている、私は。

ここは、ミヤの家だからこんなに淡々としていられるのだ。それはわかっている。

そして、数真是そんな簡単に、私を自由にはしないだろう。例え数真の気が変わって、彼が私をそれほど好きではなくなつたとしても…だ。

私はまた時計を見た。

…いいんだろうか、時間。

ミヤは数真と『テート、なんだよね？

待たせるのか？あの数真を…腹黒俺様王子を待たせた日には何かとんでもないことが起こる気がするのは私だけなんだろうか？

私の視線に全く気付かないミヤ。

「お姉ちゃんがくれた服なんだけど、私よか似合つてるよ。清楚な女子ってかんじだね」

女子っぽい？

そうかな…？

いつまでも小中学生みたいでガキくさい、の間違いじゃないか…？

女らしいミヤに言われてもあんまり説得力ないけど、淡いダンガリーネのシャツワンピに、ざっくりした白のレース編みニット、サンダル。

あの…ミヤなんだけど？

しかもノースリーブだし。

ニット着ても腕とか肩とか肌がかなり透けてる…

これでもワードローブの中で一番地味そうなところで勘弁してもらつたんだけど…、うむ。

脚が、出てる。

ミニコンピなんて着たことないから…スカートつて制服以外ではしないんだよ。

しかも生足だし。

落ち着かないな…

借り物のコーディネートを着た私の周りをぐるっと回って、雅也はにつこりと満足感を浮かべた。

「おお、可愛い」

「何騒いでるんだ…って、おおー？」

雅也さんがフツフツと表れ私に驚いている。

思わず真っ赤になってしまふ自分を感じた。  
頬がカツとなる。

ああやつぱり、似合わないんだよね…脚が綺麗でも細い訳でもない  
し、生足はアウトでしたか。

しかし意外にも雅也さんは機嫌よく言つてきた。

「…若いなあ。うん、すぐ似合ひてるよ和音ちりちゃん

へ？

にこにこ笑つてる雅也さんこそ、普段着のポロシャツにチノパン姿で大人の男性の余裕たっぷりに見えます。ルーズな格好が似合うなんてどんだけ男前なんだ。  
ミヤは女っぽさ全開だし、余計に私だけガキくさくていたたまれません。

私は本心をこぼした。

「そ、ですかね？」

むしろ自分の色気のなさにがっかりなんですけど」

「いやいや。無造作に露出した肌が初々しい色氣でまたいいねえ。男はこう爽やかな色氣に運命を感じるもんだよ。一人で出掛けるのかい？」

…運命？

ちょっと大げさな…でも誉めてくれてるんだよね？

「出掛けはしますけど…」

ミヤも怪訝な顔で雅也さんを見上げてボソッと呟く。  
「…また始まつたオヤジ発言。やらしに田で見ないでよ」

「ミヤ、お前なあ…可愛くないぞ。そんなに自分の兄を早くオヤジにしたいのか」

「やらしごとで和音の脚みてるからよ…ってそりだー。」

と、ミヤの大きな瞳がキラリと光つた、ような気がした。

実際はミヤは実に華やかな笑顔を雅也さんと私に向けてきたのだが。

だが。

気のせいか一瞬…その笑顔に数真的な何かを感じたのはなぜだろ？

「アーニキ今日も暇だよね？なら決定。よかつたいといひアーニキ  
が出てきて」

「は？」

「え？」

にんまり、細めた唇がきょとんとする雅也さんと私に告げてくれる。  
雅也さんも僅かに眉を潜めてミヤの様子を伺っている。

この流れは雅也さんには氣の毒だけど……うん、たぶん……。

ミヤは意氣揚々と言つてきた。

「決定。本日のダブルデート、アーキは和音どーーートだよ。あたし  
は数真どーーートすんだからアーキしつかりナイト役しなさいよ？」

## 20タブルーテートって初めてですが

そんな訳で。

とは言え、どんな訳でこうなったのかよくわからない…です。

わからたくないというのが正直なところだがしかし、待ち合わせの駅前に到着した時、とっくに時計は10時を過ぎていた。それはさすがにマズイだろう。

私は数真を探そうとした。

「きやつ」

「危ない和音ちゃん」

「あ、雅也さんすみません」

ふらふらと人混みへ歩み出した私を雅也さんが引き寄せてくれた。待ち合わせの時計台のモニュメントから離れるとそこは行き交う人々で溢れている。

歩き慣れないサンダルでは上手く人波に乗れないみたいで転ぶところだった。

「ソレにいたら来るでしょう」

「やつでしょ「ナビ」…」

「なんだかさつきから落ち着かないみたいだね。どうかしたの?」

気遣つてくれる雅也さんはといつと、ブランドっぽい黒のシャツに細身のカジュアルな麻のズボン…スラックス？とにかく大人の男性の色気がハンパない。

長めの前髪は相変わらずサラサラで、一般人の域を越えている。これでもいつもの出勤スタイルらしい。

はは…オシャレしているハズの私だけども、完璧に雅也さんの被保護者にしか見えない。これでダブルデートとか、我ながら笑えるな。

…まあそれはべつに、ね。

私は雅也さんに曖昧に笑つてみせた。

「昨日勉強し過ぎたのかも」

「それだけならいいけど…体調悪いならいいなさい?ちょっと顔色が良くないよ」

「はい」

ミヤはわざわざから携帯で何か話している。

また視線を余所へ向けた雅也さんに気付かれないように、私はこつそり溜め息をついた。

私…そんなにヘンかな。

どうかした…してはいない。いやむしろ気持ちはいたつてクリアだ。

ミヤからトートの話を聞いた時。

今までの数真のとつた不可解な行動を、危うく私への愛か何かかも  
しれない勘違いをしかけていたのかも、しれない。

そんな自分に気がついた。

数真の支配欲、征服欲。

それを錯覚しそうになっていたんだ。

本当に愛されてるかもしね……なんて。

触れられれば嫌でも快楽へ引きずり込まれ、愛を囁かれれば恐れお  
ののく。

快楽と背徳は…紙一重。

戻れない恐怖。

戻れなくともいいとのまれてゆく恐怖。

怖いんだ、私は。

数真が怖い。

それ以上に、自分自身が。

…私。いつたいどうしたんだ。

落ち着かない。気持ちは冴えているし、静かだ。悲しんだり落ち込  
んだりもしていない。

だけど、なんでこんなに…

唇をいつの間にか強く噛んでいた。

血の味がする。

自分の…

考えるな、もう。

私は絶対に数真を好きにならない…異性として。ヤツの遊びに本気になんてなつていねい。

でも。

この胸を占める空虚な感情は。

いつたいなんだろう?

ああもう考えるな!

私がぼんやりしている間に数真は現れ、集まった三人が私を呼んでいる。

## 2-1ダブルデートって初めてですか～2

大事な」とは、勘違いしちゃいけないってことだ。

数真の『好き』『愛してる』は支配欲と征服欲から来ている。

それは間違いない。

快樂に飲み込まれそうな私は、それを勘違いしそうになっていた。  
勘違いしてもかまわないと心のどこかで…見てみぬふりをしていた  
んだ、たぶん。

絡めとられてゆく、快樂。

そつ、きっとそんな自分が怖くて、墮ちてゆく自分が恐ろしくて、  
だからきっと。

だから「んなに…落ち着かない。 そうだ。

そうだ。だからもう自己分析はやめないと。

頭は冷えているのに、足元がふわふわして。  
どこの歩いてるんだろう？

「和音ちゃん？」

雅也さんの顔。

その向こうには駅前のモール一階にあるお洒落なカフェテリアって感じのオシャレな喫茶店。

「今からだと映画は少し早いからちょっと休んで行こうか」

「和音、気分悪いの？」

心配そうに私を見てくる兄妹。

そして。

淡いグレーのシャツにサンドカーキの涼しげなパンツをさらりと着こなした弟が立っていた。

数真。

私を眺めている。

そう、見ている、ではなく見つめているのでもなく、眺めている。

まるで景色か何かを眺めているよう。

その口元には、微笑。

… でも。

「姉さんは、別に無理しないでもいいのに？」

あの瞳、だ。

茶色の瞳ははうつすらとグレーがかかっている。

たまに見るその色は、怒りや興奮の時に現れる。

数真…？

優しい笑みを漂わせている。あくまでも優しい、見る者をとろけさせるような…懐かしいいつも優等生の表情なのに、柔らかいその言葉の中に刀の抜き身のような冷たさを感じて、私は口ごもる。

数真は。もしかして。

私が来て迷惑…だった？

いやそんなこと口にしたらひどいおじけ倍増だ。

それに、一人はともかく、雅也さんは巻き込まれただけなんだから、せっかくのお休みを楽しんでもらわないダメだ。

「迷惑はかけないよ。私も雅也さんと一緒にいられるなんて、嬉しいし」

「嬉しいね。僕も和音ちゃんとデート出来て役得だな。数真、お姉ちゃんのことは心配いらない…僕がしつかりみてますからね。君はミヤヒロしみばいい。さて、わざと中に入りましょうかね？」

私に調子を合わせて叫びつと、私の肩を抱いて雅也さんが歩き出した。

「…」

何か言いたげに田を細めた数真をミヤが促してこるりじー、呟るこ  
声。

「そんな怖い顔しなくてもアーキはドクターだから、ね？入る入る  
！」

数真がそれに応えて返していく。

そのやつとはひどく遠い。

私…やっぱり来るべきじゃなかつたのかかもしれない。

数真の反応に自分でも思つた以上にショックを受けているらしい。

…穂やかなBGMがおずおずと耳に入り始める。

田の前にはレモンソーダが置かれている。

ぽんやりしていたみたいだ。

そのレモンイエローといつてはせやや薄い色の中に炭酸が踊つてこる。

弾ける泡の粒を見詰めるところも思つ。

海みたいだ。

青い炭酸水は南の海の中こいるみたいだけど、淡いイエローのソーダはそれはそれでファンタジー。

夏の暑い日に飲む炭酸水は夢の中にいるみたいに私を心地よくしてくれる。

いつも。

炭酸を飲んでいると数真が側にいて。  
私はどうでもいい話を数真にして。  
数真はにこにこしていて。

レモンソーダから視線を外す。

今、目の前には雅也さんがいる。

隣のテーブルでは楽しそうに笑いながら会話する数真とミヤ。

雅也さんはゆつたり寬いだ様子でアイスコーヒーを飲んでいる。

よくみたら、確かに昨日まであつたはずの無精髭がキレイになくなつていて。

確かにかなりゆつすらとだつたけど、今はぜんぜん…全くない。

じつと見ていたら、雅也さんは『ああ』、と 呟いて微苦笑した。

「さすがにナイトが口髭ボーボーではまずいでしょ」

「ワイルドで似合つてましたよ?」

「へえ、和音ちゃん口髭の魅力わかるんだね。これは嬉しいなあ

…」…いつきラースマイル…うん、いつもの私ならドキドキしてマトモに会話も出来ないだろう雅也さんの微笑だ。

でも今はなんだか…」「…

変に見えないよつに『気持ちを張つてるせいが、かえつて落ち着いて受け答え出来ている。

「可愛いお姫様に釣り合つみつけられでも磨いてきたつもりなんだけど……そつか、お姫様は無精髭が好みなんだ？」

「ふつ」

「あ、笑わなくていいことだから、うるさい！」

「すみませんでも……なんかおかしくて」

「今日は僕らはオマケなんだから……そんなにしゃちほこばりなくても、楽しめばいいんだからね？」

「しゃちほ？」

「あ～、わかんないか。ジョネレーションギャップだな

「ジョネレーション……」

「知らない？」

「『』めんなさい……」

雅也さんが難しい言葉を連発する。

私も時代劇とか好きだし小説をよく読むから、よく何ソレって言われるんだけど。言葉は難しい。

「まあとにかく、今日は音楽だ、ね？」

「はー」

雅也さんでよかつた。

もし佐々木くんだつたらこんなにリラックスして話せてたかな。

## 22ダブルティーって初めてですか～3

雅也さんは大人だ。

いろいろ社交辞令で持ち上げてはくれるけど、佐々木くんとは違つて私にそういう好意を持つていなから、だから、安心。

きつとがっかりされたりしないから。

この笑顔がうわべだけで、中身は数真へのコンプレックスにじみだるの嫌なヤツの私を見ても、驚いたりはしないだろう。

だつて昔の私を知ってるし。

ここにこじれる空っぽの私へ…どうしてだか好きだと囁いてくれた佐々木くんとは違つ。

女の子みんなに無視されて泣いてた子供の頃の私を知っているんだから。

ああ…なんか。

フラフラするな。頭に血が行つてない感じ。

レモンソーダを眺めたり雅也さんと楽しげに話したり。私は忙しい。

数真たちの会話なんか耳に入らない。

知りたくない。

数真の顔。

今は笑つてゐるにこをつけは私を見て怒つてた。

あれは何。

邪魔なモノを見る目。

そうなのかな…私、邪魔なのか?

だめだ。

震える。

胸が上手く呼吸できない。

雅也さんが私をじっと見つめて黙り込んでしまった。

変に思われたのかな。

何を話せばいい?

雅也さんが喜びそうな話題。

話せ。

話せなあや。

⋮

その時、優しい手が伸びてきて、私は情けないこと…悔しことにそれを嬉しいと思つてしまつた。

「和音けやん」

数真。

「ちよつと御手洗いに行つておいで」

「…はい…」

雅也さんは私の頭から手をそっと下ろすと、また笑って促した。

しうがないな、つて感じの苦笑。

「ちょっと行つてきますね。映画、時間は…」

「大丈夫。数真たちは先に行かせとくから。ゆっくりしておいで」

「…すみません」

頭を下げる私。

「はいはい、待つのは好きだからね。ぼーっと待ってるからそのうち帰つといで？」

雅也さんの気遣いに甘えさせてもらひおつ。

生ぬるい水で満たされたみたいなほんやりした頭を抱えて私はトイレに向かつた。

雅也さんの氣だるげな風情に救われる。  
こういう時に騒がず知らん顔しながら、そつと気遣いしてくれる、大人の態度。

…あれ。

なんで。

目が…

胸が痛かつたはずなのに、目が熱い。

あ…

なんで泣いてるなんで泣く？

ばかみたい。

洗面所の鏡に映る。

目を大きく見開いて。

涙だらけの私。

わけわからない。

## 23ダブルテーブル初めてですが4

涙つていうのは。

悲しくなくても出る。

体験からそういう学習したのはいくつの時だつたか。

悔しい時、苦しい時、それと…たまらなく空っぽの自分を感じる時。

ああ、こないだ泣いたのはいつだつたつけ？

確か、あれも数真がらみ。

なんで泣いてるのかわからない類いの涙。

意味がない。

こんな時に泣くなんて迷惑。

自分に酔つてるみたいで余計に自己嫌悪…1人の時に泣けつて自分でも思うよ。

でも感情を押さえ込むほどに、出口を求めてなのか私の目から涙が溢れてきた。

そんな自分を叱つてなだめて、ようやく落ち着いた頃、テーブルに戻る。雅也さんは氣楽に『お帰り』と手を振ってくれた。

「ミヤたちば？」

「先に行つたよ」

「うひ、『めんなさい…

映画は指定席だから、ギリギリでも間に合えば座れるだらう…けど。いつの間にか曲調は変わっていて、ゆるいボサノバのBGMが流れていた。

私は雅也さんに頭を下げた。

「雅也さん、『めんなさい…映画、観られなくなってしまった』

「ん？別に…それほど観たい訳でもなし、いつしかやつくりのんびりしてゐるほうがいいよ。

可愛い女の子と一緒にならぬねえ、ね

「本当に？」めんなさい」

「いひつていひつて」

茶田の氣たつぱりに片方の手をばしばしむせる。

「…どうしたんですか？」

「ウイーンク。難しいよね～昔からなかなか上手くできないんだよ。田舎者すとも口を開けちゃう派だしね」

他人事みたいにつぶやいていたイマドキの「大人の男」というのはなんか近所のお兄さんみたい…まあ実際そうなんだけど。

雅也さんでカツ「口いいのに、やつぱり飴々としてる。

昔とおんなじ。

「ふふっ」

「あ、笑ったね？笑つた飴として何か食べる？」

「もう、ワケわかりません…何ですかソレ」

たまらずクスクス笑つてしまつ。

昔みたいにどこか人を喰つた態度なのに、とほけていて憎めない。

ホッとする。

雅也さんは変わつていない。凄くカツ「口いいオーラ」を出しまくつて  
いるけど、変わつていない。雅也さんはニヤリとイタズラっぽく私  
を見てきた。

「和音ちゃん」

「へ？」

「やつぱり笑顔がいいね」

：

「何があつたか聞かないけどさ、迷つた時にどっちにしようかなつて時。和音ちゃんは難しく考えてやたらしんどい方へ行つちゃうタ

「イフかな？」

「流し田を送つてくの雅せさんちの吐いた言葉に、背筋が一瞬でビックリと凍りついた。

…

「今更ながら、ちょっと僕のことここと愚つたでしょ」

「…」

「でも和音ちゃんは自分の気持ちを伝えてくれないよね。それって男からしたら、脈がないって判断しちゃうかもよ。せっかくアピールしても無反応なら脈ナシって思つだろ？ な」

雅也さんは口調も相変わらずのんびりしてゐる。

数真といい美形は表情が読みづらー。

何が言いたいのだろう。

私の戸惑いに気づかないフリで雅也さんは喋り続けてくる。

「つまり。俺は和音ちゃんをいになつて思つてゐるよ。とにかく」と

「は？」

「付き合つてみない？」

「うう。」

…そんな顎を手に乗せて、甘く微笑まないでください…たぶん素敵すぎています、よ。

「え…あの？」

「俺はさ、アツい情熱つて、恋愛には鬼門だと思つてるから…いつ冷めるかわからない…そんな恋愛では幸せにはなれないと思つんだよね。情熱つて、執着と同意義語だと解釈してるから」

まだ三分の1残っているすっかり氷がとけて薄くなつたアイスコーヒー。雅也さんは直接飲むと、あぜんとしたままの私をじつと見つめて、優しく笑つた。

「誠実なのは保証するよ、あつそれとも危険な男がいいのかな？」

…数真みみたいに

雅也さんは優しく優しく、笑つた…。

## 24ダブルテートって初めてですが～5

気にならなかつたといえは私は大嘘つきだ。

「…関係ないですよ…数真は…」

のどから声を絞り出す。

名前を口にするだけで胸がドキドキと苦しくなる。

「あいつはかなりヤバい。和音ちゃんもわかってるよね?うん、わかつてゐるはずだよ。だから」「ひじて僕といふんだから…」

雅也さんの瞳が見られない。柔らかな田線の奥から突き刺さる視線が…

全てを知つてゐるようで。

「ここから先はあくまで仮定の話ね」

ボサノバはまだ流れている。雅也さんの落ち着いた声はゆるやかなギターに乗つて紛れることなく響いてくる。

「数真は君にとつていわば捕食者なのかな」

「…捕食者?」

「やつ。君は数真の行動に翻弄されてる。それつて仮に恋愛だったとしてもどうなのかな。楽しい?」

相手に支配されて心のどこかで安心感を感じるとしたら、それは恋愛とは違つんじゃないかな。

たとえそうだとしても、相手への愛情なんかは沸いてこないんじゃない？

相手の幸せを考えられるのが幸せな恋愛だとしたら。少なくとも健全じゃがない。支配被支配の共依存関係になりかけているのかもしないね」

恋愛…か。

人を好きになること。

改めて言われると何もわかつていかない自分に気がつく茫然とする。

でも相手の幸せを考えるって… 実際出来るの？

雅也さんの話だと私と数真はお互いに依存しあってこな…ってこと？

お互いにお互いの幸せを考えられない関係？

なんかたまらない気分がしてきた…

「…じゃあ雅也さん？」

「うん」

「心変わった相手の幸せを祈るよ！」って出来るんですか？

その人が他の「」と一戻かけてたり本命が出来たとかつてサヨナラを  
それでも、変わらずに優しく出来るんですか？」

私には無理だ。

たぶん佐々木くんはすぐに私から離れていく気がする。だから昨日  
されても気分が高揚しなかつたのかもしない。

「難しいね……まあ男と女は違うし、惚れた弱みといつても程度はあ  
るしね」

「なら……」

数真ならどうなんだろ？

私を支配しようとすると数真。その代償として、絶対に裏切らない心  
変わりしない存在として側にいてくれるのだろうか？

じゃあなんでミヤヒテーーーしてんだろ？…

「じゃあそろそろ出ますか？」

にっこり苦笑した雅也さんと田が合つた。それから雅也さんと本屋  
さんに行つたり、ステーショナリーミたり。

街をぶらぶら久しぶりに歩いている間中、私は何も考えられなかっ  
た。

雅也さんはじこまで氣づいているんだろう、とか。

あの一人は今頃どうしてるんだろう…まあまだ映画なんだろ？ナビ。  
とかそんなことばかりがぼんやりとした頭の中を、ぐるぐると巡  
っていた。

「『』の服、和音ちゃんに似合ひませんじゃない？」

「え…って、こんな『』のジャンスカいつ着るんですか！？」

サテンのてりんとしたかなりな『』のジャンスカはボーダーカットソーと合わせて、『秋マリン』となる、らしい。そう雑誌の切り抜きが可愛く服の側で張り付けて『コレート』してある。

「『』んな足丸出しの格好で電車に乗れませんー！」

「だから、俺とデートの時に、ね？ならいいでしょ

何が、『ね？』なの… でしょ？、か…？

ああなんでこんな大人のカツコいい男性とデートしてるんだ？…  
周りから口づきにチラチラ見られる視線が痛い痛い…

すみませんね…こんながきんちょが側にいて。大学生みたいなお姉さんにやたらじろじろ見られてるよ。

「はあ…もう雅也さんが着たらいいじゃないですか。私よりきっと似合いますよ？」

「ダメダメ。和音ちゃんが恥じらいながら着てるのがいいんじゃないか。だから、さつ試着試着…」

「まつたくスルーですね…」

しぶしぶ着てみる。

結構、強引だな雅也さん。たぶん元気づけようとしてくれてるんだ  
ううけど、考へることが掴みにくい。

「おお」

「あんまり見ないでくださいよ…って、雅也さん!？」

「あ、すみませんこれ着ていきます」

側で営業スマイルの店員さんに話しかけている。

ではお召し物をお包みいたしますね。」

一  
ありがとう

あの…雅也さん？」

振り返るその笑顔はにじやがた

ん？そのままでいいよ帰りにグリーンで送ってくからね

あいかどハナレガキテ、てなんてそんな悪いですか？」

足をもじもじさせながら手をブンブン振る。

「やめて下れ…本当にお気遣いなくつ」

恥ずかしそうな…

「僕からのプレゼントだよ喜んでほしいなあ……お礼なりあつがどうのキスがいいんだけど、ね？」

お会計を済ませた雅也さんに、店員さんが私の着ていた服の入った包みを渡している。

後はもう、なし崩し的に…店から連れ出された。

「プレゼントなんてそんな誕生日でもないのに貰えないですよ」

「好きな方にプレゼントするの元理由なんかないよ？」

「う…」

最後の抵抗も、キラめく笑顔に撃沈。  
なんてせりとキザなセリフを…

雅也さんあなたホストさんですか…？

「俺、君に付き合つてつて申し込んだよね。まさか忘れちゃった？」

そ、そうでした…

忘れてたわけじゃないんです、でも…

「和音ちゃんと一緒に僕は嬉しいけど肝心の本人はなぜか上の空だよね？」

「そ…うですか？」

服屋さんの後はまた数真たちと合流だ。ご飯を食べにイタリア料理

のカジュアルレストランへ行く予定。

「数真のことが気になる?」

「…あ」

またそこへ戻りますか…

数真のこと好きかなんてわからない。  
依存してるのはそつかもしれない。

私の頭と身体を支配しつつあるのかもしねり。

外国童話の、赤い靴のお話。

赤い靴を履いて…踊り続けた女の子。

やめたくともとまらない。呪われた赤い靴。

踊り続けた女の子は偶然出会った木こりに、自分の足を斬つてくれ  
と頼んだのだ。

そうして、命だけは助かつた

。

：

誰かに必要とされたい欲ばかり。私は勝手な人間だ。

でも誰でもいいんなら。

じゃあもちろん数真じゃなく佐々木くんでもなく、もし雅也さんと

なら?

穏やかな『恋愛』が出来るのかな。

誰かを大切にその幸せを願えるような、そんな『恋愛』が

出来るのかな

## 25ダブルデートが終わりましたが

映画はかなり面白かつたらしい。

昔の映画のリバイバルで、映画館もアートな感じのミニシアター。ミヤが映画の話をして、数真が相づちをうつり、雅也さんがまた話を振るという絶妙なコンビネーションでよつやくダブルデートっぽさが出てきた。

家庭的なイタリアンを出す、知る人ぞ知る隠れ家的レストランでの美味なる昼食会。おだやかにおだやかに時は流れる。

にこやかにひたすら頷いていたのは私。

ジャンスカにボーダー＝トをむんざかミヤに冷やかされた時は恥ずかし過ぎたが。まあ…まあそれ以外は…ん、無難に会話出来た。

ようやくラストの「ザーターになつ、そつぱつとした感じよこの辺のジーラードを食べていた。

「今日は楽しかったね」

しみじみと言い、雅也さんは私を見てきた。

「楽しめたかな? 和音ちゃんは

「そうですね…楽しかつたです。なんか色々とありがたいがひとつこれもした」

本当に雅也さんに迷惑かけてしまつた。

こんなコードモに付き合わされてつざざつしてないだろつか?

そう心配になるが、そんなことあまりにもつざつとうで言えない。

それに…こんなこと思つてはいけないんだらつけど、雅也さん…こ。  
観察されていいるみたいなその視線にどいか落ち着かない。

「なるほどね」

雅也さんがクスクス笑つている。

見ると、テーブルに肘をついて組んだ手に顎を乗せて…なんだか楽しそうだ。

一部始終観察し終わつたとばかりに言つてきた。

「いいのかな?予定しなくて」

その田線は数真に向けられている。

「なんのことですか?」

「へえ。もしかして予定調和の余裕かな?」

私は思わず数真を見た。

二人は何を言つてゐるんだ?

数真は雅也さんに薄く笑いかけ首をすくめている。  
くだらない、と言葉に出すまでもないのだろうか。

「人聞きが悪いですね…なんのことですか?」

かわす数真に絡む雅也さん。珍しい。雅也さんが熱っぽく話しているのはなんのことなんだろう?

「…偶然、ね。今日はなんのためにこんな『ティー』トを企画したのか聞くほど野暮じやないけどさ、和音けやんを悲しませるような趣味は持っちゃだめだよ? 数真クン」

「意味がわかりませんけど」

え…なんで? 微妙に険悪になつてゐるし。はらはらして一人のやりとりを見守る…といつかテニスのラリーを見るような緊迫感が、びしひし伝わってくる…

「優等生でもわからないことはあるんだね」

「あなたこそ。もつと一途なロマンチストだとみくびつてました」

「と聞ひついで…」

「和音ちゃんを利用しないでください…自分の想いの昇華のために」

「言ひついで…」

「言いますよ」

う、わ、あ。

なんでこんな「ワライ空気」になるんだよ…

もつじきお開き、解散だつていつのにケンカしないでください…

なんで二人はケンカしてるんだ?

ミヤがボソッと呟いている。

「モテる女は辛いわね…」

「は?」

「いえいえ」

なんなんだ…。

「和音ちゃん」

「は、はーつーーー」

なんかいきなり名前を呼ばれて、授業中に当たられたみたいな錯覚だよ。

雅也さんがにっこり私を見つめてくる…

やな予感…

雅也さんは何か楽しそうに微笑んできた。

「今際、一人には会つつか？約束した件について」

…まさか。

「雅也さん、会るのは嫌なんだよね…」

「雅也さん？あの」

「んでもない」とを言つませんより。」

数真の目線が痛い。温度がずつと下がった気がするのはせいだよね？

頼むから、気のせいだと言つて。

「あの…？雅也さん？」

しかし私の祈りもむなしく雅也さんは爆弾を投下した。

「今度は一人でデートだから、ね？」

あ、あ。

言つちやつた、よ。

大人なのに、なぜ空氣を無視しますかね！？

なんで」のタイミングで言ひあわせますか…

「あの…数真…」

と、数真が薄い唇をほじればせ、静かに静かに言ひてきた。

「和音ちゃん」

「は、うんー?」

「ぐくりと喉がなる。  
カラカラに渴いている。

数真が見ている。

数真。

数真。

見てくれている。

やつと呟わせてくれた、その視線は冷たくもなく乾いてもない。

ちよつひとつ安堵だ。よかつた。

え?

いまなんて思つた私?

あたふたする私を数真が優しく見つめてくれる。

「和音ちゃん」

「…ん、ん」

「帰る」

惑いを吹き飛ばす懐かしい笑顔。

その伸ばされた手に頭の奥から温かな感情がじわじわと呼び起しきれてゆく。

帰ろ。

鮮やかによみがえる。

染み渡る、数真の言葉。

数真の瞳に捕らえられる。

薄茶の瞳。柔らかな睫毛の陰。

うなずいていた。

気づいたら、身体が勝手に何度もうなずいていた。

「うん」

そうしたら。

また優しい空間に戻れるようなそんな気がしていた。

すでに手遅れなのがもしかれない

なんて。思つてもいなかつたんだ。

## 26 最後まで云えられませんでした

この場合の『誰か』とは神様なんだろうか?

そんな馬鹿げた疑問を思い浮かべた自分にまたかと呆れる。

いいかげん、しつかりしろと言いたい…

生温かい掛け布団にくるまりクーラーをガンガンに効かせている。  
ここは自分の部屋。

一番安心できるはずの場所。

すっかり冷めきった身体が悲鳴をあげているのを無視し続けて答えを探している。

教えて。

誰か教えて。

私はどうしたらいい?

⋮

返つてくるはずもない返事を待つていて。何かいきなり目の前が拓けて、解る…理解する…そんなことが起りるはずもないのに、愚かな私は待っているのだ。

神様なんていない。  
わかっている。

数真を好きになれたらしい。

雅也さんを好きになれたらもうといい。佐々木くんでも。

でも。

誰を好きになつても、変わらないんだ。  
私の狡い心根は変わらない。

私は知つている。

私は自分自身が可愛いだけだ。

私は私を必要としてくれる優しい手にすがり付いているだけだ。

数真の執着は甘美な罠だ。  
まるで蟻地獄。

ドアを開けて入ってきた眉田秀麗な弟。

優しく微笑する数真に布団を剥ぎ取られ、私は怯えている。

と同時に安堵してもいる。

考えなくていいというのは、富美な誘惑だ。

数真でも雅也さんでもだれでもいい。

強い相手に補食される誘惑。

意思を奪われ、墮ちてゆく快楽。

「和音ちゃん」

「なに?」

「和音ちゃんは雅也を今何が思って?..」

「聞いたんだ」

「なんとなく。カンだよ」

「…やっぱ。でもたぶん、付き合わない…付き合えない、よ」

付き合いたくないといつ意思。  
どちらも私にはない。

数真にはそれがわかつているのかいないのか。

「わづか」

私の瞳を覗くよう、近い。数真の瞳。

やつとは、行為と裏腹に、ビームでも乾いでいる。

「雅也さん」

「え…？」

あまつにも小切れな声に聞き返す。

「雅也さんと付き合えばよかつたの？」

数真に抱き締められて心が邱いでいる。  
いい匂い。うつとりと身体から力が抜けていく。

「やうすれば俺は諦めたかもしれない…なんてね。ないか、それは

どうして？

そう尋ねるより早く数真是甘く囁いてきた。

「俺にはお前しかいない」

そこから先は言葉はなかった。

絡まった足と足。

強い抱擁。

幾度となく降り注ぐキス。

無言に耐えきれなくなつたのは私だった。

「どうして…私の…あなたの…あなたなら別に私じゃなくても…」

「和音は弱いから

「弱くて自分が大事でいつも他人のせいにしてびくつしている」

数真の言つ通りだ。

悔しいけど、そのとおりだ。

「和音も俺を知つてゐる。俺が嫌いだろ?..」

穏やかな茶色の瞳で私を射るように捉える。

「俺の本質を知つてゐる女はあんただけだ」

戸惑う。

だから?

「だから、俺はあんたから…離れない」

私に染み込んでくる数真の意志。長い時間をかけて溜められた、想いの深さ。

強い感情。欲情。

なんて、禍々しい。

その深淵を覗いてしまった。

その深さ、あまりの暗さに眩眩が、する。

やう。

ダブルデートからこの家に帰ることを選んだのは私。雅也さんにまでは送つてもらわなかつた。

あんなに優しくしてもらつたのに。

心配かけてしまつたのに。

差しのべられた手を離して、数真の手を取つたようなものだ。

嫌な女。

それが私だ。

それでも、数真は私でいいのだろうか？

非選択という逃げによつて、いつなる結果を招いたのだから、私は  
とことんダメの上ない。

「和音、泣いてるの？」

数真が私の臉から溢れる液体を舐める。

身体の芯が高能的な震えに満たされてゆく。

びひしたらしい、なんて愚問だ。あまりにも愚問すぎや。

いつも抱き締められているだけで、喜んでいる。  
それが答えだなんて。

安っぽすぎや。

でも認めざるを得ないだろ。」

あの、デートの時、私は。

数真がミヤと一緒に行ってしまつかと思った。

堪らなかつた…

そう思つと、例えそれが何かのたぐらみだとしても、身体が泣き叫んでいた。

身体が痛い。

心が痛い。

数真と一緒にいたい。

一緒にいたい。

でもそれは愛じやないんだろ。」

倫理にも反する。

少なくとも幸せになれるような恋愛じやない。

ダメなのはわかっている。

わかっているの。」

「和音ちゃん、何考てる?」

「数真は、私どうしたいの?」

数真が笑っている。

見惚れてしまったよ。

みんながカツカツいって騒ぐのも納得の、魂を奪うような魅力。

「答えを聞きたい?」

屈託のない数真の笑顔を不思議な気持ちで待つように眺める。

もう選べないと悟った。

蕩ける光。

私たちを引きずり出し、暴いてしまうだらう光が脳裏に広がってゆく。

私が見たのはそれが最後だ。

私は数真を選んだ。

数真にはそれが伝わっていたのかな。

脳裏に広がつてゆく光に身体を任せながら私は思っていた。

私は、数真がいないと、ダメなんだ。

私たちのつながりを成り立たせるものは執着か依存か。

たぶん愛

じゃないのかもしれない。

でも。それでもいい。

数真に側にいて欲しい。

数真がいないと、私はおかしくなってしまう。

憎らしい、逃れたい、その支配。

絡めとられる安息。

光がますます強くなる。

数真。

今度目が覚めたら、あなたに言おう。

私は自分がかわいい卑怯な卑屈な人間だけど。

確かなのはこの気持ちだよ。

数真。

私はあなたが側にいて。

幸せだったんだ。

## 27 あなたに会えたかったこと（前書き）

ちょっと流れが変わってきます。

一応、前話までが話の前段階で、ここからがメインとなります。

今までの流れと違つて嫌だなと思われる方には申し訳ありません：

## 27 あなたに伝えたかったこと

あなたに伝えたいことがある。

あなたの想いに答えたかった私がいる。

私が、いた。

私は、あなたがそばにいないと狂つてしまつ。

狂つてしまつていただろう。

あなたに伝えたかった。

それが済まされなければ。

私は前に進めない。

だから「じつして今もこだわり続けているのだろう。

⋮

ふつ、と足が軽くなる。

タラップを降り硬い地面に足を着けるやいなや、背後でパシューと  
ドアが閉まった。

軽快に走り去つて行つたバス。

見送ると、とんとんと腰を叩き伸びをしてみる。

座席のスプリングが古くて変に弾んで座り心地は悪かつた。解放された喜びよりだるさが先にくる…

ん、ともう一つ伸びをして新鮮な空気を肺に送り込む。枯れた草の香りだ。夕暮れを含み始めた冷たさが混ざつている。身体の芯がしゃきっとして、ふわふわした揺れの残りを追い払ってくれそうな心地よせだ。

空気がすゞいい。

街もビルも人も車も工場も。

何もない。

何もないな、本当に。広がつた空の広さ、自分の周りの空間の広がり。

現実はそうは甘くはない。そういうことなのだらうか。

私はメモ書きの地図を片手に歩き始めた。

乾いたアスファルトに導かれるように私の足は向かっていく…どんどん辺鄙な方へと進んでいるが、不思議と怖さは感じなかつた。

足元の雑草から荒れた休耕田の境田も怪しいままで、辛うじてアスファルトの上のみが道らしき道。

人手をかけずに整備されない道。

世間を避けるように造られた施設の案内役としては、これ以上ない相応しさだ。

笑ってしまう。

笑うしかない。

気分はもう荒野をさすらう旅人、だとでもいえばいいのか。

旅人：確かにね。信憑性に欠ける、怪しいことこの上ない手掛けかりにすがりついているのだから、今の私は愚かな旅人みたいなものだ。

：

ねえ、数真。

人の思いは何処からやつてくるのだろうか。

温かな感情はどうして生まれ、そして…消えてしまうんだろうか。

目が覚めるといなくなっていた、あなたに聞きたいことは山ほどある。

私は数真をいなくなつた、と感じるけれど、何も数真の存在がなくなつたわけでも何でもない。語弊のある言い方を許してほしい。

数真は、いる。

大学を優秀な成績で卒業し、今は海外赴任中だ。  
メールが時々届く。仕事は忙しいらしくほとんど日本には帰つて来ない。

あれから10年たつた。

正しく伝えると、言葉はむしろ回りくどくその想いを十分に伝えきれない。

もう10年、か。

いや、まだ10年しかたつていないんだ。

あの最後の夜。

明け方が近くなり、数真の囁きが聞こえた時。あのときからまだ1

0年しかたつていない。

耳を澄ますと今も耳に囁く、甘く切ない声。

数真の声は剣道をしていたせいか、どちらかと言えば高めだつたけど、耳元で囁かれる声はいつもどこか掠れていた。懇願と脅迫を混ぜたようなあまやかさに満ちていた。

『あんたが諦めからでも俺を受け入れてくれて嬉しかった』

諦め？

違う。

無茶苦茶だ。

そんな馬鹿げたことがあるか。

私は伝えてないんだ、まだ。

一言も言えていない。

なのに消えてしまったというのか？

私の中に切ない想いを呼び寄せる、執着としか呼びようのない数真の狂愛が、消えた。

苦しくも甘美な、狂つたその熱は、数真から私に伝染されたそれは… 麻薬みたいなものだとでも言えばいいのだろうか。知らなければ

穏やかに暮らしていく。平和に生きていたのだ。

離れられない。

忘れられない。

脱け殻になつたような優しい数真に対しては抱けない、私のこの感情は私自身をじつじりと熔る。

この10年。

私は忘れられなかつた。

数真はどこに行つてしまつたのだらう。

あの時の、数真はどうした?

いつの間にか握りしめていた手のひらをあけ、シワのよつた封筒をなぞり、形を直す。

丹念に封をまたあけると、私はその内容に目を落とした。

遠くの山々に温かな斜光が射し始めていたが、焦る気持ちはなかつた。

手掛かりは、ある。

ここにあの禍々しい熱の滴りが遺されているのなら、もう私には怖いものはないのだ。

「すみませ ん」

薄暗いな。

それに古いし、人気が全くない。

受付らしきカウンターはあるにはあるが無人だよ。

施設らしく玄関は広いんだけどビニールで靴を脱ぐのかわかりにくい。

「あの…『ごめんください…』」

ひんやりとした空氣に私の声だけが響いた。

灰色の廊下が長く伸びている。カウンターのあるロビーは結構広いけど、ソファーも何もなくて殺風景だ。  
まさか誰もいないのだろうか？

キヨロキヨロしているとようやくカウンターの奥のドアが開いて誰かが出てきた。  
ああよかつた。

「あの…先日電話しました、倉橋ですが」

「ああ」

私と同じくらいの年代だろう、ジャージ姿の男性職員がスリッパを出してくれる。

「あ、すみません」

「いいえ、いらっしゃる」

案内されるままについてゆくとその職員は申し訳なさそうに私を見下ろした。

「わざわざお越しになられたて、なんとも……倉橋さんにはもう迷惑おかげしました」

「いえ、私が勝手に来たんですから。ええと、マサハルくんでしたっけ？彼を困らせるつもりもありませんし、施設の方にござ迷惑をかける気もないですか？」

「やう言つて頂けると正直助かります。マサハルくんは悪い口じやないんです。ただちょっと……」

いいよどむのはわかる。

入所者の個人情報に対しても彼らは守秘義務があるんだらつ。ペラペラと喋る訳にはいかないのだ、せつと。

私は彼の気持ちを和らげるようになり控え目に微笑してみせた。

「私は手紙の内容について軽くお話したいだけですか？」

職員は少し困ったように私を見る。

「……本来なら、妄想を追求するのはタブーなんですがね……」

でもあの「が」にまではつきりと自己主張するのは珍しくてね。あなたに手紙を出してるとは私たちも知りませんでした。

たぶんこの間の同伴外出の時に投函したのでしょうか。そんな自発的行為は最近はほとんどありませんでしたからね」

感慨深げに呟いていた。

えつと……いんだらうか。

そんなにマサハルくんについて他人の私に喋ってしまっても……と思つたけど。

よく考えてみれば。職員さんにしてみれば、そのマサハルくんが勝手に出した手紙を読んで、信じてかどうかわからないがとにかく私が来てしまった以上、事を荒立てずに穩便に済ましたいのだろう。

そう考えると、このぐらいの『お喋り』はむしろ、『だからそれちゃんと納得してもう早いとこ帰つて下さいね』って含みなんだと思ひたぶんね。

当然ながらあまり歓迎はされていないのだろう。

まあ、こうした施設に入所している人に、身内でもない人間が面会できるなんて本来ならあり得ないのを何故か許可が出たのだ。今さら細かいことを気にして仕方ないのだろうね。

ぺたぺたと借り物のスリッパが、リノリウムの床にくつつく音。歩きにくいなあ……何処までいくんだ？途中、エレベーターに乗つて、今度は最上階にて言つても三階だけど……に行く。

昼間なら明るい光が降り注ぎそうな、天井近くがガラス張りのエント

トランクスを抜けると、また施錠されたドアを抜ける。

「（）の秘密の國の王子様なんだ。って、ツツコモをいたぐ成る程  
オートロックだらけだよ。古いのは玄関のある一階だけで、中は意  
外とキレイだ。三階なんて最新の設計なんじゃないのか？  
明るいし、キレイだし、木調の素材が無機質な空間に温かみを醸し  
出している。

「了解です」

いろいろと尋ねていらつかりながら田中的地についたらしく。

三階の一 角にあるドア脇のオートロックを解除しながら職員は言つ  
てきた。

そういうばあ前聞いていないけど…と今さらながら胸元に手をやる。  
田中と刺繡が入っていた。  
田中さん、ね。

振り返ると田中さんは、念を押すように確認してきた。

「マサハルくんは、あなたと一人で話したがると思いますが、それ  
は出来ませんの（）」「了解ください」

「はー」

「それと、彼がもし強い興奮状態を示した場合、速やかに部屋から  
退出して頂きますが、よろしいですね？」

「わかりました」

「ござれにせよ、そういう不測の事態には、私の指示に従つてくれ

ださー。よひしへお願ひいたします。では、入りますよ?」

「はー」

「の扉の向いに立つ。

数真のあの熱情の手掛けりがある。

思つたより、広い。

それが素直な感想だ。

20代も後半、というか30近くにもなると大抵のことは経験済みで新鮮な感慨にふけることすら難しくなつてきてるんだが。

空間を贅沢に使つた、まるでホテルのスイートみたいな雰囲気の部屋がドアをあけるといきなり現れる。廊下からは想像出来ない。内部はさらりと豪奢だったんだな。

「うひうひです」

「あ、はー」

寝室は別になつているらしいベッドが見当たらぬ。

まずはソファーセットが置かれたこの部屋を通り抜けた。

10畳くらいには余裕があると思われる。

ここは、その、ただ座るだけの用途で設けられたのだろうか。  
うーん…無駄に広い空間のせいで生活感が薄い薄い。ラグジュアリーな印象を与えるよ。つていうか威圧されます。こんなところに暮らしてゐなんて彼は何者なんだ。

場違いなスリッパのぺたぺた音を響かせながら案内されるままに進んでいく。中はフローリングなんですね。

…アレかな。

例えばマサハルくんつてどーじやの御曹司とか、はたまた大株主とか。貧弱な私のお金持ち像からはぴんとくるイメージは見つからない。

なんと言つてもあんな手紙を書くへらいだよ？

某大統領夫人に助言していた某占い師とかFBIに捜査協力もして  
いた靈能者とか。そっち系のお方なのか？

うーん…わからない。

まあ…うん。あれだ。よくわからないからとつあえずスルーしてお  
こうか。

いちいち動搖しても何にもならないしね。動搖したといひで、事態  
は変わりはしないし、むしろ状況把握が遅れてどんどん自分が不利  
になるだけだ。

仕事するようになつて平常心の大切さは常に身を持つて知つている  
つもりだ。

慌てても仕方ないのだ。たいていのことは、私どきがどう足搔い  
たところでなるようにしかならないものだから。

この10年でトシくつたぶん性格が落ち着いたというかかなり冷静  
に…ふてぶてしくなりました。

可愛くない？

別にいい。

もうそんな価値観からは離れて生きていくんだよ。

でもね。

そのぶん……昔のあの暗い情熱に今も惹かれてしまつ自分がいるのも認める。

……若い時の勢いはもうない。

その喪失感に振り回されたりここまで来てしまった。

「初めまして」

声に引き戻され私は立ち上がった。

ずいぶん待たされていたのだ。

私が案内されていたソファーは、普段お茶なんかをちょこっと飲むスペースらしく、部屋の壁一面にはダークな色目の木調の作り付けの本棚や、パソコンデスクがあつたりとアカデミックな重厚感がある。

現れたのは意外なことに私の予想を上回る年代の男性だった。

「マサハルです」

「初めまして……倉橋和音です」

若くは見えるが、落ち着いた雰囲気から言つて、30代くらいの男性だ。

細身でメガネの似合ひインテリ……職業は……あちこち掛け持ちで教えていて忙しい大学講師です、と言えばそのラフで知的な感じにぴたりくるだろう。

私はマサハル……くんを複雑な想いを隠して見つめた。

マサハルさんと言い直すべきか。この人が、私と数真のことをなん  
で知っているのかやはり不思議だ。  
奇妙な感じだ。

想像していたようなスピリチュアル系な青年でもなければ、エスパ  
ー的少年でも、ない。

整った顔立ちだけど世俗的な疲れが表情に滲み出ている。普通のサ  
ラリーマンでも通りそうな、くたびれたシャツの臭いがしそうな生  
活感があるたたずまい。

それが妙な親近感を抱かせる。生真面目に生きてきた人って感じだ。  
彼は、にこっと笑った。

まるで、私が觀察し終わるのを待っていたかのようなタイミングに  
内心ドキリとした。

「来てくれて、嬉しいです」

「あ、いえ…そのすみませんいきなり押し掛けまして」

「いえ、どうしてもお会いしたかったので、あんな手紙を書きまし  
た。失礼は承知ですがやはりお会いしたかった。その気持ちが勝つ  
てしましました。だから、謝らせてください。『めんなさい』」

ペコリと頭を45度下げている。

私はその素直さに20%驚き50%感動し、30%退いた。

だってね、謝るのって大人になると難しいんだよ？ 仕事とかで立  
場上謝るのは別として、些細なことで謝るのって…しかも初対面の

人に謝るのってかなり難易度が高いんじゃないかな?

人間関係をこれから築くつて時にいきなり謝るなんて立ち位置を不利にする行為、普通オトナはしない。

「いえ…あの気にしないで下さー」

「許してくれますか?」

ぱっと表情に明るさが走る。

「もちろん。手紙はその、びっくりしましたが不快ではなかつた  
です」

「ありがとうございます」

彼はまた、にじりとした。

…なんだか調子が狂う。

見た目のインテリっぽさと反する反応に。

どう返すべきか迷う間もなくさらに彼は、懐かしそうに手を締めた。

「側にいるよ」

「え?」

「彼はあなたを知らない。でもあなたのすぐ側にいる。あなたは会  
いにいける」

私は固まつた。

…何を言つてるんだ？

マサハルくんは私をみてまた口角を緩やかに上げた。  
紅茶の入ったカップソーサーを爪先で弾きながら、呟いている。

「戻れないかもしれない。でも、あなたが決めることがだ」

私はいつたいどんな顔をしていただろう。

私は靈感もないし不思議体験も経験ない。だから、イタゴとか靈媒とかそういうのって信じられないのだ。  
まあ数真は死んではないんだけど。

「倉橋さん…私のことへんなヤツだと思いませんか？」

あえて触れたくないとかいなとかつて、なんてコメントすべきなんだ。

数真が側にいるとかいないとかって、なんてコメントすべきなんだ。  
平静を装いながら、心中は脂汗でダラダラものだった。  
このシチューで黙るのは彼の発言を肯定するほかならないんじゃないのか、と思つ。

それは…それはよくない気がする。

だいたい、まだろくに彼と話をしていないし、もし仮に彼が知っているのなら、数真の記憶が無くなつた理由を教えて欲しいのだから。でも、マサハルくんの言い方だと、なんだか数真がもうひとりいるような、そんな感じにも取れる。

数真が、もうひとり、いる…？

いやいやいや待て。

それはない。ドッペルゲンガ？ありません。ないです。存在しない。

現代人として、いや社会人として大切なものを失つてはいけない。  
なんでも安易に超状現象に原因を求めてはだめだよね。

物事には原因があり結果がある。タネのない手品はないのだから。

たまたま、何かの拍子で数真と私のことを知り…それも不思議だが  
…マサハルくんはまあ…触発されて妄想した、のだろうか。

もしそれが事実ならちょっとガツカリ…いやだいぶガツカリだ。

28にもなつてなにやつてるんだか…こんなところにまで私は何を  
しに来たのだろう？何を確かめたかったのか。

『そんなに弟がヨカツタ訳？』

忘れない過去までよみがえつてくれる。

無言に陥つた私に柔らかな声がかけられた。

「会いたくなつたら、いつでも言つてくださいね」

「え…あ、はい」

…会いたくなるって誰に？

すじく聞きたかつたがそれを口にするとまたいろいろと失つてしまいそうで…主に精神力を…私は口を曖昧に閉じた。

どこか私を労るような表情。裏のなさそうな柔らかな微笑。

疲れた顔付きなのに、やつれた感じなのに、端正で知的なお顔が優しげに映るから得な人だ。

気を張つていたぶん、なんだかいつぺんに疲れが押し寄せてきた。私はにこやかなマサハルくんをただ黙つて見詰めることしか出来ない。

思つていた以上に、動搖している。自分で考えているほどクールでもなく顔に出やすい質なのだろうか。

マサハルくんはそんな私の気持ちには関係ないかの「ごとくあくまでやつぱり笑顔だった。

過去にこだわつてしか生きていらない後ろ向きな自分が嫌なんだ。

わかっている。

数真はもう以前の数真じゃないんだから、私も忘れてしまえばいい。首筋までお風呂に浸かる。ゆらゆらと熱いお湯が身体の澱を抜くよう、染み渡る感覚。口からホッとため息が出た。  
気持ちいいなあ。

このあたりにはホテルもなくて、私は来客用の部屋に泊めてもいいことになったのだ。

狙っていたわけじゃなかつたけど、タクシーも夜は来てくれないってのは想定外だつたから助かつた。

私が押し黙つたことで会話は続行不能とみなされ、職員の田中さんによつ、本日のところはお開きと相成つた。

私はじつじてこんなに数真に拘るんだろう。

そつだよね、いつまでも終わつた恋にしがみついているなんて、見苦しい。

恋…か。そもそもアレが恋愛といえるのかどうかも怪しいな。

自分でもわかつている。未練がましい、不毛な感情だ。

「バカだよ…」

あれほど強く求められたことはなかつたのだ。

あの時までも、あれからも。私という存在をあれほど強く求められたことはなかつた。

熱いお湯に浸る。肩口までのたっぷりのお湯に満たされた湯船は足を伸ばしてもまだ余裕があるほどだ。

「数真…」

会いたい。

心が勝手に探してしまつ。  
どうどろな執着を勘違いしてしまつた私は。苦しいくらいの数真の偏執を忘れられないのだ。

心が震えるほどに求められ、満たされた記憶は消せない。

赤い靴。

一度履くと一度と脱げず、嫌でも死ぬまで踊らざにはいられない、美しい魔性の靴を手にいれた少女の話。

あの話の少女は木こりに足を斬つてもらい、足と引き換えて自由を得たのだ。

でもそのあとはどうしたんだろうか？

かつて美しく踊れた悦びを思い出すことはなかつたのだろうか？

もしかしたら。

せつかく命拾いしたのに、そのまま踊り続けていたら……と願いにも

似た妄想に耽る瞬間も、あつたかもしれない。

一度と踊れなくなつてわかつてしまつたかもしれない。

彼女は、美しく踊り、恍惚とした悦びに包まれながら一生を終える選択をしなかつた自分を…じつ思つていたのだらう？

それから明くる日「また私はマサハルくんに面会した。もちろん引き続き田中さんの付き添い付きだ。

当たり障りのない話題の会話が進んでいったが、マサハルくんはまた唐突に、昨日の件を持ち出して聞いてきた。

「どうですか？また彼に会いたいといつ決心は出来ましたか？」

…決心？

いつたい何の事だと私は眉根をよせかけたが、取り繕つよつに慌ただしく口を開いた。

「どうしてあなたが私のことを知ってるのか、教えてもらひませんか？彼に会えるつて、それはどうこつ意味なんですか？」

「…私はあなたの意志を確認する役目です。説明責任は残念ながらありませんので」

相変わらずはぐらかされる。さつきから何度も会話に挟み込み聞いているのだが教えてくれない。

なぜだろ？

私の反応を楽しむように彼はにこやかな態度を崩さない。それも気に障った。

まさにいい加減、苛つきが声に出てしまいそうな時のマサハルくんの発言だったのだ。

「会いたいんでしょう？例え全てを失つても」

マサハルくんはわかつてているのだ、と言いたげに含み笑い…微笑している。

なんなんだ。

「あなたの大切な人に、ですよ？会いたいんでしょう？」

私は力尽となつた。

「でなければこんなところにまでお邪魔してませんよ？」

眼鏡の奥の瞳を見返す。

「確認します。あなたは会いたいですか？」

昨日は確かにいつでも言えと余裕だったのに、今日の彼の態度はしつこく感じる。

「私は…」

「倉橋さん、大丈夫ですか？」

田中さんが心配そうに口を挟んでくる。

邪魔されたくない、と思つてしまつた。

### 30田中それとも向處かへ落ちてゆく

私はそれほど酷い形相なのだろうか。自分ではわからないが、田中さんは私を厳しい表情で見据えると、首を静かに振った。

もう、でも…かまわない。

取り繕う気持ちが嘘のように消えてゆく。

残るのは、たつた一つの想いだ。

「これ以上話しても仕方ありませんよ? 退出しましょ」<sup>1</sup> う倉橋さん

田中さんが促してくれる。

それは…出でいけ、とこうことなのだろう。

「嫌です、『免なさい』

「倉橋さん?」

私は田中に必死で訴えた。

「私は…数真に会つたためにここに来たんです」

ちっぽけな、つまらない、後ろ向きな私の想い。

「私は…」

たつた一つの、願い。

馬鹿げてるとしか言い様のないこの気持ち。

真っ直ぐに見上げると、マサハルくんの瞳に吸い込まれそうになつた。

なぜだろう。

私はこの人を知つてゐる。

「あなたは…誰に会いたいのですか？」

それとも、私はこの人を知つて『いた』のだろうか？

わからない。

「私は…」

田中さんが何かを言つてゐる。

聞こえない。

頭がガンガンする。

どうしたんだろう？

目の前にいるはずの一人がよくみえない。

緑色の引き幕が無理矢理下ろされたかのように不鮮明に、周囲のト

ーンが暗く染まる。

私、どうしたんだろう？

めまいが、する。

貧血なのだろうか？

すゞく気分が悪い。

胸がむかむかする。頭が痛い。気持ち悪い。

足元が沈んでゆく感覚。立っていられない。ああ、これは倒れる  
…気分が悪いくせにやけに冷静に思った。頭を打たないようにな  
ないと危ない。

誰に会いたいのかつて？  
まだ聞いてくる声がした。

会いたい

『数真』に会いたい。

ほんの僅かな時間だったのだろう。

「…わかりました」

マサハルくんの声だ。

「確かに、確認しました。あなたの『意志』を

うれしそうに呴く彼の笑顔まで見えそつた、朗らかな声が、脳裏に響いてくる。

私は意識を手放し、辺りは全てが暗転した。

澄んだ空気の香り。枯れ草が夜露に混じった匂い。

ひんやりとした、土の匂い。

秋の匂い。

音は、何も聞こえない。

不気味なほどに無音静寂。

月のない闇夜では何も見えない。

押し潰されそうな闇の中。目を凝らしても、何もわからない。

今着ている薄手のトレーナーでは間違いない風邪をひいてしまうだろう。

幸い、デニムとショートブーツは季節を無視した冬物だからそれなりに暖かい。

羽織るものを持つきたりよかつたかな。

…いや待つて。

なんで私、外に居るんだろうか。ブーツまで履いてるし。確かに施設の個室に居たんじゃなかつたか？

どこかの道の真ん中に立つてゐるみたいだつた。

道と言つてもアスファルトで舗装された道路じゃない。土を固めただけの代物だ。

触つたらしつとりとした冷たい土の感触だつた。

さつきまで室内にいたはずなのになんで?  
なんでいきなりこんなところにいるんだろう。  
わつぱりわからない。

とりあえず迷つた時は動かないのが鉄則だけど、そもそも迷う以前にここにいる経緯の、記憶がない。もしかしたら長い白昼夢を、あのバスを降りた時から観ていたとか？

そんなことを考へて、うちに私は大切なことを思い出した。

確かポケットに携帯があつたはずだ。

充電は…まだある。

「えつ」

喜んだのもつかの間。表示された文字に絶句する。

『圈外』

使えない…ってここはいつたいどこなんだ……？  
さつきまでは…あの施設では使えたはず。

私は目を閉じた。

状況が良くないのはわかつた。なぜこいつなつたのか経緯はやはりわからぬが、これはヤバい事態だ。

再び目を開ける。

見たところ…ようやく暗闇に目が慣れたけど辺りは何もない暗闇。  
星明かりではなくわからないがおそらく、道に、草原、林…森？

黒ずんだ視界は人工の建物がいつさいないらしきことを予想させた。

少なくとも電気はない。

これは本格的に遭難だらうか？何処だかわからない場所で、遭難…

あり得ない非常識な事態だけれど。

「ハハ…」

また、だ。

頭を殴られたような衝撃。それに続く脳の揺れに、思わず息をつめる。

気持ち悪い…

例えばHレブーターに乗った時に目を閉じて逆立ちしたらこんな感じなんだろうか？眩にしてはかなりの振動。これ以上揺れが続くと吐きそうだとthoughtら、しだいに収まった。

代わり映えのしない暗闇。ひんやりとし始めた青臭い雑草と枯れ草が醸し出す香り。夜露の匂い。それらを感じようと、見ようとした。自分の姿勢もよくわからない。貧血で倒れた時みたいだ。倒れる前に意識を失つて、気が付いたらあらビックリなんで私寝てるのみたいな。

…え？

目を開けた私は思い切り口も大きく開けていた。

また場所が変わっている？

なぜかいきなり田の前で、横転してゆく箱馬車。

まるでスローモーションの落としているかのよう、しかし確実に馬車は沈んだ。

遅れて、地響きのような辺りを搖るがす轟音が、全てを支配する。

追走してきた馬上の男が自分の馬の手綱を引き、叫んだ。

「ヒリアン……！」

馬車を遠巻きに眺めつつ、口々に何事かを叫んでいる町の人たち。飛び出してきた体格の良さそうな男たちが、こちらへ走ってきた。

「事故かっ！？」

「中は大丈夫かっ！？」

「手を貸してくれっ」

「わかつた！！」

車中の人物の名を呼びながら、屈強そうな数人の男たちと扉を探して無理やりこじ開けた先ほどの男は、手に触れた感触に顔を歪ませ、叫んでいる。

「ヒリアン！…」

生温かいぬらりとした液体。

それがいまだ滴り続ける血だという事実に恐らく、慄然と顔を強張らせている。

引きずりだされた男性は、血まみれだった。かなりの出血だ。助からない可能性も強い。

「あの女がいきなり現れて馬が驚いて馬車がひっくり返ったんだ！」

「」

一斉に皆が私を見る。誰かがヒステリックに叫んでいる。

「え？」

「いきなり現れたんだよ！？」

認識するのに、どのくらいの時間を要したか。

皆が言っているのは私のことなのか？

町の人…なのだろうか。変わった服装の人たちが私を何か恐ろしいものを見るように遠巻きにヒソヒソと話している。ざわざわと耳障りな声たち。祈りを捧げる声。罵る声。怯える声。

声。声。声。

「光ったんだ。白い光りが眩しくて目を閉じて次に開けたらあの女がいた」

私は倒れていた。  
でも誰かに支えられている。

彼か彼女かわからないが外人だ。端正というか端麗過ぎて表情が見えない。

その人に自分が抱き起こされる体勢だなんて、信じられないと私の脳が理解を拒絶していた。

「…

しかも。目の前に息が詰まりそつなほどの美形が何人か並んでいる。

いつのまに？

町の人たちとは違つ雰囲気。ざつと三人はいる。

私の周りを囲んでこちらを…見下ろしている。髪の色も容姿もそれには違ひがあるが今はそれどころじゃない。

だいたい、さつきいたのは草原みたいな場所だったのに今度はなんだ？中世の田舎町みたいな、舗装されていない大通り。真つ暗じやない。

太陽の光りもなく薄暗いが、顔の輪郭だけでなく瞳や顔立ち、髪色までしつかりわかる。道の何処かに常夜灯が点在しているのだろう。月も…出ている。

地面に倒れた私を抱き抱えたその外人と目が合つ。やんわりと微笑してきた。

知らない外人に抱き起こされそのうえ囲まれて…いる。

私を抱き抱えている麗しき金髪の外人とあと三人。

なんなんだこれは。

いつたいどういうことなのか？さつきまで誰もいなかつたのに、ど

うじてこいつなるんだ?

私は深呼吸して、金髪美形を見上げた。

ホントに外人だ。

見とれている場合じゃない。が、綺麗な女ならよく見るけど、男で、しかも北欧系の端麗甘口な優美な感じの美形なんて、初めて見た。こちらが見ているからか、相手もじつと見つめてくる。凄い睫毛長いし肌もキレイ。

…でも。近いです、よ?

私は20センチ先の御尊顔から視線をさせながら、口を開いた。

「あの…」  
「…」  
「日本、ですよね?」

金髪美形は無表情のままだった。

遭難よりも事態はマシになつたのだろう、か…?

### 30回目それとも何処かへ落ちてゆく（後書き）

ありがとうございます。 次回は早めにアップできるかと思います。

ラブライブな逆ハーにはおそらくなりません…たぶん。

### 31日 瞳それとも何処かへ落ちてゆく～2

私はいつの間にか気を失つてしまつたようだつた。

金髪美形と話をしようとした途端、急に意識が途切れたのだ…なんか寝ぼけただけなような気がする。

長い、意味不明な夢をみていただけなのだろうか…  
でも。

辺りは静かだつた。外国の貴族の館の一室みたいな豪華な内装は、薄い壁紙を張つたビジネスホテルのそれとは明らかに異なる。壁のあちこちに施されたレリーフ。

極上な肌触りのシーツに毛布、リネンの寝心地は最高だが、もしホテルだとしたらこんな田舎にこれほどの設備を持つ高級ホテルはないだろう。

少なくとも聞いたことはない…

だだつ広いベッドルームに降り注ぐ青い闇の光に魅入る。

外から入る月の光は淡い光で闇を照らし、纏められたままのカーテンや毛足の長い絨毯に幻想的な影を落としている。

ひどく、静かだ。

誰もいないかのような無音に背中がぴりぴりとする。ここはどこなんだろう…私はそつとベッドから降りた。

シャラッと微かにきぬ擦れの音がして、ふんわりとした絨毯の感触が素足を包んだ。

嫌な予感がする。

もしかして…

私はとんでもないところにいるのかも… しれない。

ブーツと「ホール」を着けていないけれど服装は家を出た時とままだし、鏡にうつる自分の姿も変わりはない。

不安げな顔でコンソールのある大きな鏡を見ていると、鏡の私の後ろにふいに美形が現れた。

長い金髪に碧眼、目の覚める美しさ。

あの金髪美形だ。

「お田覚めのようですね」

振り向いた私に微笑を送ると手慣れた様子でソファのある間へと誘う。

ベッドルームの隣へ移動すると、向かい合わせの4人掛けのソファの片方へ金髪美形が座るので、仕方なく真向かいに座る。

「あまり驚かれないのですね」

金髪美形の微笑にはどこかからかいが含まれていた。サシで美形と相対するのは緊張する。

「何からお話をすればよろしいですか？」

そう柔らかく尋ねてくる。

こりこりのつて、困る。

こちらの出方で態度を変えるつもりなのだろうか。だとしたらヘタなことは聞けないし。

「ここはどこですかと聞いたら思い切り引かれそうだ。そういえば、たしか氣を失う前に、日本ですかとこの人に聞いたのに、まだ返事がないんだった。

いや、その前に。

あのままあの場所にいたら、町の人たちに魔女扱いされて危なかつたかもしない。群衆心理…集団心理がどう暴発してもおかしくない状況だった。

誰かが何かを言えば、事態はどう転んでも不思議はなかつたのだ。

私はお礼を言つべきなのだらう。たぶん。

「その。危ないとこを有り難うござりました」

助けてもらつたのか記憶もなくよくわからないため、曖昧な言い方になる。日本語つてこんな表現でも話せるから便利だな… そういうえ、さつきの町の人といい、叫んでいた馬上の男といい、みなさん外人なのに日本語が上手だ。

もしかしたら、映画村か何かに迷い込んだのだろうか？田光江戸村、ハリウッド版みたいな。

最近のニュースをあまり見ない私が知らないだけで、ここはそういう娯楽施設なのかも。

自己紹介をしてさりげなく相手の情報を引き出してから何をどう聞くべきか考えようか。

…。

「私は……」

あれ?  
なんだつけ。

「私の名前……」

焦る。だつてなんで自分の名前が解らないの?  
金髪美形の田線が愁いを滲ませてこむのに気付く……「ひかりが泣きた  
いへりへだ。

「やはりあなたが理を曲げてしまわれたのですね」

「……」「トコトコ?..」

「いえ。あなたは軽い記憶喪失に陥つてこむよつです。無理に思  
いだそつとなぢらなによつに。私はミカエルと申します」

金髪美形はミカエルさんとこつ名前なのか。

「名前がわからないのは不安でしょう……ましてや貴方は異界渡りで  
いらっしゃりへ来られたばかりですし。少しずつ状況を『』説明いたします」

異界?

「あの……」

「なんでしょ?..」

「異界…って言われましたよね?」

ミカエルさんの清らかな笑顔に一瞬詰まった。

嫌な予感に後押しされて言葉は勝手に…こぼれてきた。

「…」はなんとこいつといふですか

期待していたのかもしれない。

聞いたことのある地名、知らないいつしか新しく出来たオープン前の高級ホテル、リゾート施設…。

そんな答えを期待していた私は、金髪美形の端的な答えに無言になつたのだった。

「…」は、コラードラマ大陸の聖なる神殿宮に続く…いわゆる白の館です

言葉を失つた私をしばらくそのままにしておいてくれたミカエルさんは。やがて、じちじく目を近づけると唇くちびるに促した。

「…ありがとうございます…」

「…」は温かくつむぎ

勧められるまま口に含んだスコーンみたいなお菓子はサクサクした香ばしい口当たり。なのに全然味がわからなかつた。

ミカエルさんの言つとおり自分でも落ち着いていた。  
でも…異世界つて。

あまりにも安易じやないか？

私は…探しに来たんだ。

カズマ。

私の弟。

とても大切な人。

よかつた。どうやら記憶がないのは一部みたいだ。今までの生育歴、  
仕事、友人、交友関係に抜けはない。数真とのあれこれも。

しばらくもそもそと美味しいはずのスコーンを食べていた私は、思  
い当たつて質問した。

「異世界…つていつ」とは、ミカエルさんは私のいたところを「」存  
知なんですね」

そうだ。

ここがユラドーマとかいうところなら、その住人であるミカエルさ  
んはなぜ異なる世界があるって言い切れるのか…？

それは、つまり…

私の言いたいことを理解したミカエルさんがにこりと頷く。

「ええ。貴方のいた世界…チキュウからは何人もユラドーマへ渡つ  
て来られています」

チキュウ、つて。

チキュウ… 地球?

「あの」

「どうしたことなんだの? 地球なんて言い方、まるでここが全く別の世界みたいだ。」

「足、冷えませんか?」

「…え?」

「どうぞこちらをお使いください」

差し出されたのは、ふわふわの毛皮のルームシューズ。そつと足元に跪き、ミカエルさんは私の足に触れないように、シューズを足下へ優雅な仕草で滑らせてくる。

ミカエルさんの優しい声が響いている。

「サイズは合ってますね。よかつた」

「はあ。ありがとうございます」

なんなんだこの人は。紳士というか執事というかまるでお姫さまに仕える騎士みたいな完璧な所作じゃないか。

なんなんだ… こういう人、日本にいるだろ? うか?

「名前がないと不便でしょう」

ミカエルさんはまた正面に座ると話し始めた。

### 32 新しき日々の始まり……？

この世界について、政治経済など知らなこと困る情報もあるのだろう。

でももう、オーバーヒートだ。

ミカエルさんが私を少なくとも自分の間は保護してくれそそうだと見極めると、勝手ながらもう生活にまつわる色々は明日にしてくれと体が訴える。

とにかく、ゆっくりと体を休めたかった。

氣を遣つてくれたミカエルさんが部屋から出でゆくと私は本当に独りになった。

身じろぎするたびに沈み込むふかふかのベッドからはじり出して、何も履かずに素足のまま床へつま先を伸ばした。

…やつぱり届かないとはね。さつきも思い切り足を伸ばしたが、今回もベッドからずるずると滑り落ちる感じで、床に降り立つ。ベッドまで、日本規格外とは嫌になるな。

その感覚は変わらなかつた。柔らかい絨毯の肌触り。でも…拒絶するような冷たさ。

夢じゃないなんて。

それとも…まだ田が覚めていないだけなのだろうか。

一縷のはかない希望をまた思い浮かべて自嘲する。

ため息だけが夜の闇に溶けてゆく。

眠れない。体は泥のように疲れていて睡眠を欲しているのよ。

月明かりが余計に心細さを煽つてゆく。  
誰にも頼れない、ところ心細さ。

悪い夢だったりよかつたの。

暗い室内に、天蓋付きの豪奢なベッド…

なんて場違い。

知り合いがないことそれだけではなく、このファンタジーな世界  
そのものが異質。

異質…？そうじゃない。

…私、が。

この世界には異質な存在だ。

施設からこの異世界に来たほんの数時間かで目まぐるしく起じた  
出来事。

それらを受け入れることができないでいるのだから。  
自分がこの世界にとつての異分子であり、いつ排除されてもかまわ  
ない存在だという事実は

私を余計に眠れなくさせたのだった。

自分の名前が『わからない』…何処のアニメ映画なんだろう。もつともこの舞台は、ちょっと小綺麗な中世だけど。ちゃんとトイレも水洗式だし水道もある。

「おはようございます。昨夜はゆっくりお休みになられましたか?」  
本日のミカエルさんの服装はシンプルな形のゆつたりした長袖の白いブラウスシャツにベルト代わりの腰布、カーキ色のサルエルタイプのズボンにブーツだ。背中に長く垂らした金髪は緩やかなウェーブで、朝の柔らかな日射しに優雅に輝いている。

「……では遠慮はなさらないで、なんでも仰ってください。ああ、私の唯一の使用者の侍女です。名前をキヤサリアといいます。わからぬことや困ったことがあれば、私がこの侍女になんなりとお申し付けください」

そのまま侍女だという若い女の子に着替えを半ば強制的にさせられ、朝食をミカエルさんと摂った。誰にも何も言われず、もとい、ミカエルさんと侍女の二人しか屋敷にはいない。  
どうやらここは、ミカエルさんの屋敷みたいだけど、なんとかっていう城か王宮…神殿だつたかの離宮の一つとか。だから、正しくはミカエルさんが独占使用許可を王様からもらっている物件なんだろうか。それにしてもかなりの邸宅。部屋数いくつなんだろう。気にはなつたが勿論、調べる気力なんてない。

心の中はじわじわとした不安で一杯だった。

精神的な病気になつたのかと疑つたほどだ。

いまひとつ、現実感がない…これは私の妄想か夢の中で。現実の私は精神的な病気に罹患したまま、何処の病院にいるとか。

私はカズマ…数真を『探し』に来たのだった。

なのになんでこんな『異世界』にいく必要があつたんだろう?それともこんな中世もどきの世界に数真が『いる』と?有り得ない。

そもそも、数真がいるとかいないとか考えていた段階で私はヤバかつたのかも。

数真がもしここに来ているとして、じゃあ、アツチの数真はなんだ、とか。  
わからないことばかり考えても仕方ないんだけど。

ここに住民がミカエルさんみたいに紳士ばかりでは無いとは思う。私を氣味悪く感じている人間もいるだろう。そう… 昨夜の馬車の事故の時にいた町の人みたいに。あの雰囲気は進んで何度でも味わいたいものではない。

『あの女が現れて馬車が倒れたんだ』

ざざ波のように広がる怒りと恐怖の声を思い返す。

あの人たちの言つ通りならば。  
昨日の事故は私のせいなんだろう…

あれだけの数の人が目撃したからこそあんな糾弾騒ぎになつたのだ…やつぱりあの人人が大怪我したのは私のせいなんだろう。その事

実は私の胸に、鉛のように重くのし掛かっています。

あの人、どうなったんだろう？たしか名前は…

「お茶のおかわりはいかがですか？」

侍女のキャサリアにいれてもらつたお茶は、わたしの好みの、熱すぎる一歩手前の温度だった。初めて飲んだ時よりも深い味わいのは、二回目に飲む紅茶だからなのだろうか。心は動搖していくも味覚はクリアだなんて。

私はどうなるんだろう。

「私がお相手できない時はキャサリアをお側に付けます。わからぬことは何でも申し付けくださいね」

不安はあっても田舎過ぎてゆく。

最初はショックで部屋に籠っていたけど今はそれなりに慣れて毎日することもなく居候させてもらっている。無愛想な若い侍女に三食世話をされてほぼ一週間過ぎていた。

食事にはミカエルさんが顔を出して相手をしてくれるがそれぞれ30分ほどだ。話し相手もなく暇で仕方ない…なんて言っちゃいけないけど、ミカエルさんが来てくれるのは申し訳ないながらも有り難かった。

じつとしていると不安が溢れてくる。余計にあれこれ考えてしまい  
氣も紛れない。

何もすることもない私は、部屋のある屋敷の棟の周りを散歩したり  
ぶらぶらして過ごしていた。

何もせずに置いてもらひのも心苦しいので何か手伝いをと申し出た  
のだがやんわりとミカエルさんに断られてしまった。

まあ、そうだよね。

名前も覚えていない『異界人』にさせられる仕事なんてそんなすぐ  
に思いつかないだろ？ 人手が足りず掃除が行き届かない  
そんな様子もないし。見るからに瀟洒な別邸らしきこの棟は遠くに  
見える壯麗な宮殿からは隔絶されているらしく、メイドさんや庭師  
さんの姿もほとんど見かけない。

なのに、邸内もその周囲を囲む芝庭やガーデンも全く綺麗に保たれ  
ているのは不思議なことだった。

「聖紋の効果ですよ」

ある昼食時にミカエルさんは不思議がる私にそう教えてくれた。

聖紋についてミカエルさんは

「エネルギーを使用者の望む形に発動させ、物質を生み出したり作  
用を及ぼす印のことですよ」

と説明してくれたけれど…

「実際にお見せしないとわかりませんよね」

そのうち見せますからと微笑していた。なんでも普段の生活でも聖

紋は使われてはいるが、掃除なんかに使われている聖紋は効果が長いため毎回は発動させないのだと。ミカエルさんは親切だけど忙しそうだったからあえて深く突っ込まなかつた。

なんていうか…聖紋に興味津々という訳ではなく、この個人的違和感はどうしようもないのはわかつてはいる。聖紋か…

本当に別世界なんだな…

こうしてぶらぶら庭を散歩していると、イギリスとかの貴族の屋敷に泊まつている錯覚を覚える。

そういうお屋敷をホテルにしてるところ海外旅行に来てるとか。でも。そうじやない。ここは『コラードーマ』。神官王ユシグが治める神官達の都市。都市の名はコマ。

なんていうか…

なんで28にもなつてトリップしてるんだろう。

まあトリップに年齢は関係ないだろうけど…トリップって一方からみたら昔の『神隠し』だから子供がなるものじゃないの？私の場合、『失踪』とか『行方不明』とか…むこうでは言われてるんだろうか。

迷惑と心配かけてるんだろうな…

なぜ私がここに来たのかミカエルさんもわからないことだ。

『守護者』が地球から異界渡りでコマに現れたことと何か関係あるのかもしないですね、とミカエルさんは教えてくれた。

私はその重要人物のトリップに巻き込まれたのかもしないってこ

とだろうか。

さらについたまれない気持ちになる。忙しいのに毎日様子を見に来てくれているミカエルさんに申し訳ない…

ちらつと聞いた話では、世界が待ち焦がれていた『守護者』が最近現れて、コマの街はそのお披露目の式典準備で活氣づいているんだとか。私の世話をしてくれているミカエルさんは神官王の親衛隊にいた『騎士』で、今は別の仕事をしているけれど準備に借り出されているので忙しいみたいだ。

「元、親衛隊士ですね。身分は今も変わらず騎士なんですが剣を握る機会はほとんどないのですよ」

そつまた微笑するミカエルさんは後光が射して見えた。  
はあ…まさか本物の騎士に会えるなんて、ねえ…

学生時代、夢中になつたのが『三國志』だった自分としては、ミカエルさんはこの世界のマイヒーロー。

生活感がまるでなく完璧な超絶美形。所作も完璧な紳士。優しく親切。  
女好きな感じでもない。

まだ20代だと言つていた彼は仕事も出来そうな大人の男性。ほとんどの女性は気付いたら惚れてしまつているタイプだ。たぶん20代前半女子までならね…うん。

確かに私もミカエルさんを好みしく思つけど、恋愛感情ではないのが自分でわかつてしまう。

こういうタイプの人は見た目よりずっと奥が深いから、恋愛対象と

は見られない。なんていうか、次元が違うお方だ。

むしろ、王族や貴族のご令嬢との身分違いの恋が似合いそうだ。そう思えると接しやすい。ミカエルさんがやんわりと作り出す節度といつ壁によつて、安心して話も出来る。

いきなり殺される、とか、命の危険に晒されることは多分ないだろう。

三十近くになると、男性の顔立ちだけでときめくことは若い時よりも少ない。しかもこの状況下。今は、ただ命の危険がない方向に自分が向かっているのかだけが私の関心事だ。美形だからといちいちドキドキしているほど、のんきではないつもりだ。

数真を探しにいくと決めた意気込みはどうへいつたんだろう。

こんなに保身的な人間だったかと自分にうんざりだが、世界が違うのだ。私の知る倫理観も法律も何も私を守ってはくれないのだから、ミカエルさんの個人的な倫理観にすがるほかない。本当に、この世界に数真がいれば：

私は彼を見つけることができるんだろうか

### 33 もう森になんか行かない

本日もミカエルさんとの昼食会が終わり玄関フロアまで見送った後、そのまま陽射しの中に出ることにした。

室内へ引き返してゆく侍女のキャサリアは相変わらず声をかけてもガン無視だ。ミカエルさんの前では一コ二コしているのに一人きりになると無言になるんだよな…。

たぶん、ミカエルさんのファンなんだろう。

キャサリアはまだ10代か20そこそこみたいだし、異界人の私に不信感もある上に、ミカエルさんがらみで余りいい印象を与えていられないんだろうとは思つ。

彼女のミカエルさんを見る瞳と私を見る瞳の温度差つたらない。いちいち他人に敬遠されたくらいで傷つくほど纖細には出来ていないしそんな歳ではないけど。彼女は私の面倒をみると「うう」仕事は嫌々ながらもきちっとこなしてくれているし。何も愛想までふるう必要はない。ただね…

私に警戒心を持つ必要はないだろうに…それともミカエルさんと話す相手には全てあんな感じなんだろか?

ミカエルさんは宮殿や街でも広く仕事しているらしいからキリがないと思うんだけどね…。

まあいいか。それこそ私には関係のない話だ。

外国のインテリア雑誌にててくるような硝子のはめ込まれた扉のむこうをぼんやりと見やると、並木道の緑の頂きが誘うよつてわざわざと靡いている。

大理石で作られた静謐なエントランスを抜け、足元が見えるかどうかの長さのあるロングスカートの裾を踏まないよう、ゆっくりと歩いてゆく。貰った服はどれも裾が長いワンピースドレスで、ふんわりとしたシルエットが上品な着心地のよいものばかりだ。

足捌きがね、違うんだよね。本物の上質シルクに麻かレーヨンみたいな何かが混ぜあって、サラサラツルツルなのに肌に冷たくない素材感で、凄く病みつきになる気持ちよさ。ロング丈でも足の動きは快適だ。

いつも姿勢正しく歩けば、裾を踏んづけることはない。あ、階段の時はスカートを少し摘まむことを忘れないようにしなければ。これは慣れてないと忘れがちだ。

ミカエルさんいわく、彼の好みに合わせたこと。ぱっと見シンプルながらも地味じやない高級な品だというのがよくわかる。

高かつただろうことは。

騎士つて、中世も現代も貴族階級になるんだろうか。

ほら、アーティストとかがイギリス女王から賜つてるのをニュースでみた記憶がある。この世界でもそうなんだろうか？騎士イコール下級貴族みたいな？それにこの暮らしぶり。神官王に下賜された離宮での優雅な生活。頼んでもいらないのに贅沢な生地を使った服を何枚も用意してくれる。迷いこんだ利用価値もない異界人に。

ミカエルさんつてお金もちなんだろうか…？お金も地位も顔も性格も基準値オーバーつてどんだけ超人なんだ。

今はそのおじぼれというか余波というか、親切心にありがたくすがらせて貰います。

お世話になりっぱなしで何かお礼が出来たらと思つけど…行く末不明な迷い人にそんな機会がくるのかどうか…。

私は木陰を歩いていく。

爽やかな風が暖か過ぎる陽射しに心地いい。

こんな日がたつぶりあるなんていいところだ。これが地球でただの旅行だつたら最高なのに。

コラドーマも地球と同じで日本みたいに四季がある所とそうでない所があつて、コマは春と秋が長くて冬でも雪は滅多に降らない程暖かいとか。

夏は少しあは气温は高いが湿度は低い為意外と過ごしやすいとのこと。いまの季節は、日本でいふと晩春から初夏といったところか。

玄関付近は馬が通るので土を固めてあるのだけど、道から外れると芝が広がっていて清々しい。

屋敷の周りには庭が作られていて花や植え込みがある。見ているだけで飽きないけど庭のむこうは森なんだよね。

…行つてみようかな。ミカエルさんに止められている訳でもないし。富殿に近付かなければ大丈夫なんじゃないかな。私は庭の一角からそつと森へ入つて行つた。

…後から考えるとそれが大きな間違いだつたのだけれど。

汗ばむ手前ぐらいの陽気。鳥の羽ばたきや縁がそよぐ音が風に溶けて流れてゆく。

自分の髪も肩下までの長さながら風に靡いて涼しくて気持ちいい。

風は緑を含んだ澄んだ匂いがした。

歩いてゆくとちゅうどよい木立の群生をみつける。  
少し低めのサクラみたいな樹木が並んでいる。  
下草もふわふわでいい感触だ。

今日はここを通つたら引き返そう。

そう決めた私は一歩、樹木に近付いた　　その時グッ、と何かに肩  
を捕まれる感触がした。

「待て」

またいきなり掴んできた。今度は手首だ。

心臓が冷えた。

ミカエルさんの声じゃない。第一、彼ならこんな振る舞いは主義に  
反するだろう。

「ふ…うつ…」

どう反応すべきかわからずヘンな息を吐いて振り返ると相手はまじ  
まじと見返してきた。

「それが異界流の挨拶なのか?」

見覚えがある…逆立てた部分と流された部分が狼みたいな印象の肩  
までの紅い髪。

細められた猫みたいな金の瞳は珍しい獲物でも見つけたかのよつこ、  
揺らめいている。

男は黙つて手を私の腰に廻すと掴んだ右手をぐいぐい引つ張つて駆り立てていく。

「ちよひ…」

「せひせひ行くわ。ヤシラのトコトコーに入るな

あつとこつまにサクラもじきの木立から離れて拓けた場所にいた。

「いりまでくればいいだろ?」

「あの…確かに会いました」とありますよね

「せうだが?」

煩そうに見てくるのは、あのトリップ時に出くわしたミカエルさんの関係者。美形軍団の一人だ。あれ以来誰にも会つてないけどまたかこんな所で再会? するとは。

私が掴まっていたままの右手を丁寧に外すと、彼はじつとまた見つめてくる…いや睨まれているんだろうか…?

端正ながらもあるでスポーツ選手のように厳しい顔付きをしているこの人も、ミカエルさんは別の意味で表情が読めない。

とつあえず腰に廻した手というか腕を離して欲しい…。

密着状態のまま固まって、何とか切り出そいつと口を開きかけたその時。

「…何もわかつてないようだな

「は？」

眉根をしかめた彼は私のマヌケな返事にせりて眉を寄せた。

「あいつのテリトリーに入つて何をするつもりだったか知らんが  
そんな軽装では無謀だらうな

「…テリトリー？」

彼の答えは簡潔だった。

「耳を澄ませる」

言われた通りにしてみる…

「まあこれだけ離れたらもう聞こえないか。少し戻るか

「ちょっと…」

ぐいぐいまた右手を掴まれて木立の近くまでやつて來た。

「聞こえないか？」

「…」

あ。

確かに。何かブーンといつような超音波的な微かな低周波が聞こえる。

「ミナガバチといつミツバチを捕食する獰猛なハチだ。ああいう腐りかけの木のウロに巣を作る。今の時期は特に工サ集めと巣作りに気がたっている。そんな格好で近付けば一発だ。

刺されたいのなら別だがな」

淡々と説明しながら、ふ、と微かに…かなり微かに笑つたようだつた。

怜俐な顔立ちの、ふいの揺らぎに私は意味もなくたじろいだ。意外にこの人は見かけより若いのかもしれない。

「……ありがとうございます…」

ハチの巣に向かつてたところを助けられた訳ですか。  
つくづく、私つてこの人たちからみたら迷惑かける存在…申し訳ないです…。

「いや…礼には及ばない」

いたたまれなさに俯く私はまた、ぐいと腕を掴まれた。

「え？」

そういえば腰に廻された手はそのままだつた。いつたん距離が離れていたのにいつの間にかまた密着状態になつていてる。

「…惑つ私にかまわず、鍛えられた筋肉の硬い感触が覆いかぶせるように伝わってきた。

…え？

「…ひょうひ

…抱きしめられてる！？

「…氣持ちだ…」

私の腰から背中へと彼の大きな両手が這いつゝに上がり、彼は場違  
いにもうつとりと呟きを漏らしてくる。  
オーディロンとは違う香りに鼻腔を搔き乱されて私は混乱していた。  
自分とは違う暖かい体熱に、彼さつてくる彼の荒い息が顔に当たっ  
て。

…荒い息？

つて、興奮といふか欲情してゐんですか？

どうこうひとひき？

どうこう状況だこれ。

顔が見えない彼は、真面目な口調で言つてきた。

「…キスしたくなつたな」

は！？いきなり何ですか！？

片手が後頭部にあてがわれ持ち上げられ腰を密着せしられ…何も言えないまま。」

「ん…んんっ！…？」

わからない。

これが挨拶？このファンタジーな世界流の。  
ほとんど、いや完璧にセクハラだから。

いきなり唇を貪られて舌を絡めるわ吸い付くわ唾液を流し込むわ…

思いつきりベロチューされた。

「んんんっ！…？」

しかもこの男、めちゃくちゃキスが上手い。腰が碎けそうだ。

いくらイケメンだからってこれ…セクハラといつか痴漢…迷惑行為  
じゃないのか…？

慌てふためいて現れたキャサリアのおかげで、それ以上の行為には及ぶことは免れた。

「ミカエルにひとつ貸しを作つておくのも悪くない」と…意味不明なことを言つてきた。しかも自分の唇を名残惜しそうに拭いながら。

「おい、女」

「…な、何ですか」

「美味かつた」

「は？」

「だからなかなか良かつたと言つていいる」

「ヤリと不敵な微笑。

…やっぱり見かけ通りの狼男に違いない。

なんてヤツだ。

「勝手に出歩かれでは困ります」

私を見るキャサリアの冷ややかな視線が痛い。

「すみません」

居候の身で異性問題なんて叩き出されても仕方ない行為にひたすら小さくなる。

名をセラファイムといつりじっこの要注意人物。

あの時…この世界へのトリップ?時のメンバーには、まだ一人しか会っていないという事実を…この時の私は後から考えると、あまりにも軽く受け止めていた。

…なんてこつた。

トリップして自分より若い男にキスされるなんてベタな展開。

まだこの世界にも馴れていないというか、状況が掴めていないというのに。

トリップなんて認めたくないのに。

ベタ過ぎる。 いつたいこれは現実なのか？

「自分で蒔いた種でしきうが」

自分で自分にツッコミをいれる。

誰もいない『私の部屋』…洗練された調度品にファブリック、衣装の品々。

何一つとして自分のものがない。すべてミカエルさんから貸されたり頂いたモノばかり。そこに私の意志はない。もちろん思い出も、何も。

…昔、囚人には私物を持つことを禁じられていたと聞いたことがある。確かテレビか何か映画でのワンシーン。

それはモノを持つことがその人の拠り所となるから。刑罰として拠り所を奪つた、と。たつた一本のペンや一枚のカレンダー、それらは自分という存在が時間の中で確かに進んでいくことを教えてくれるから。

だから行動を制約され私物を持つ自由を奪われた人の時間は、止まる。

生きていても、死んでいるのと同じ。幽霊みたいなものだ。

「むなし。

今私はたいして囚人と変わらないじゃないか。

数真を探しに来た?のに、なんでこうなったんだろう。

「…で、こんなとこりで引きこもりしてればそれで済むんですかね?」

「…?」

「ひきしぶり…」

どこか疲れたような眼鏡男子。

見覚えがある。

というか…

さつと顔色を変えた私の瞬間的動作により、彼は捕獲される。忘れもしない、この笑顔。

「苦しいですねえ…」

「な・ん・で・ここにいるの…?」

「えっと、ノックしましたけど返事がなかつたので

「セツジヤない。なぜあんたが『ツチの世界』にいるのか聞いてるの  
！」

マサハル。

忘れもしないあの時…トロップしたのは『』の男のせこだ。

「首元を離してもらわないと話しても出来ないですよ…？」

よくみたら『ツチの衣装らしきグレーのゆつたりしたシャツ』に、黒の皮つぽいパンツに膝丈の編み上げブーツ。粗末ではないが貴族っぽくもない出で立ち。

「…説明してもらいますからね」

「呼び捨てとはただ事ではないですね…言つときますが」

虚をつかれた私を一ヤリと嫌みたひじくねめつけ、わざとひじく襟元を直しながら言つてきた。

「心を読んだわけじゃないですよ。あなた、わかりやすくてですから、なんとなくそうかなつて」

クスクスとイヤな微笑にイリついた。

ここに来てからずつと抑えていた感情が、忌々しいとはいえ懐かしい世界の住人を見てしまったことでセーブがきかなくなってしまったのかもしれない。

もつと首を絞めてやればよかつたか…と物騒なことを本気で考える。

「怖い怖い。喧嘩しにきたのではありますよ。

ただあなたが思わぬ苦戦をしているので、案内人としてアドバイスに参ったわけです。ありがたいでしょ？」

どこか得意げながらもあくまで気だるげな口振りは神経にペリペリときたが…

はあ？

…案内人？

得たり、とまたクスクスと笑つた。

嫌味な感じ。

しかし、その印象にはちょっと違和感を覚える。

マサハル…くんはこんな笑い方をするような人じゃなかつたような…

…

「当たり。彼はあくまで橋渡し的存在だから、あなたの意志を確認して、門を開いただけ。ここから先は、ボクの役割だね」

「よくみたら、あんたはマサハルくんじゃない…？」

「今いる氣づくわけ?」「ブイね『姉さん』は」

「あいら、凍つちやつた？あ、勝手に窓がせてもらひからひつやお  
かまいなく」

固まつた私の目前をすいと通りすぎ、壁際のソファに座ると野ば話  
を再開する。

「姉さん？」

「私はあんたの姉さんじゃない…止めて。その呼び方」「  
ずいぶんと強気だな。昔のあなたとは思えない。でもまあこの状  
況だし、ね」  
この喋り方。

男はわざとらしく真似ている。  
「こんな」とをするのは確かに、マサハルくんじゃない。

「あんまり時間もないからね、要點だけ」

酷薄そうな薄い顔がにい、と垂む。

「あなたの探すべきなのは、『想い』だよ。

弟くんのあなたへの『想い』はこの世界の高貴なお方に憑依した。  
中途転生…とでも言うかな」

数真の…想い？

「うん。愛を探すなんてロマンチックだね…まあ見つけなければあ  
なたは帰れないからそんな浮かれてもいられないけど」

愛を探す？

いや、この男は今大事なことを言った。

「帰れるのー？」

思わず駆け寄りつとする私に片手を上げて静止を求める。

「待つて。まあ、今の段階ではヒントはこれだけ。取り敢えずは見つけて『うんよ。そうだね…まずはこの国の神宣王に会つといいね。次のヒントはそれから。ああ、あとね』

男は立ち上がると、眼鏡に手を掛けた。

「あなたは守護者ではないけど、似た性質を持つてるから充分気をつけてね。じゃ」

「待つ…！？」

消えた。

「どうこう…」

忽然と消えた男の姿は夢じゃないかと不安にさせるが、私はソファの座面に手を当てて確信した。

温かい。ほんのりと。

確かに、いた。マサハルもどきの男が。

「案内人…」

声に出すと不安よりも戸惑いが強くなる。

元の世界の私を知っている口振りだった。

「なんなの…」

はたから見たらバカみたいなほど私は落ち着きなくうるさいと部屋を歩き回った。

色々な感情が渦巻く。

数真の記憶が…いや記憶ではなく想いといったつけ、それが、『憑依』『中途転生』…？

それとなんといつたつけ？

「神官王…に会つこと」

胡散臭げなマサハルもどきに『えられたヒントが、どこまで真実かはわからない。私を踊らせて楽しむだけで言つた言葉かもしけないという可能性も、捨てきれない。

でも。

数真。

この世界に来てからも忘れたことはない。むしろ、以前よりもさら

に私は数真に会いたくて堪らなかつた。

『姉さん』

懐かしい笑顔。

夏の日射しに映える、嬉しそうな笑顔。  
数真に受け入れられ、求められている喜び…こうして思い出すだけで胸がじんわり温かくなる。こんな状況なのに。

「…」

会うしかないだろう。

神官王に。結果はどうなるかわからないけれど、今のところ、それが数真に会うための唯一の手掛けかりなのだから。私は大きく溜め息をつくと、キヤサリアを捜すために部屋を後にした。

“どこまでも続く螺旋階段。

壁に所々ある灯りが全体を月明かり程度には照らしている。

黄色い淡い光りは聖紋効果か搖らぎもしない。無機質な灯りは、安らぎを与える感じのかこの状態が終わりのないような気さえしてくる。

「落ち着かない気分だ。

空気はひんやりと肌寒いが、こつして動いてるので身震にするほどでもない。

確か神殿の中庭に馬車で送つても arrivé それから、かれこれ小一時間は歩いている。

ここは螺旋構造をしているんだろう… 鉱山の坑道みたいな回廊から spiral、螺旋階段状に地下へと続ってきたことから察するに、白い岩山をくり貫いて造ったんだろうけど。

神殿は岩の内部を地中深くに向かつて造られているのだろう。遠くからだと、ただの白っぽい建物に見えたのは岩を彫刻して作った外壁だった。内部も凝った装飾だ。

レリーフやら唐草風の模様やらで壁や天井は華麗に飾られていて、近くで見るとその細やかさ緻密さは美しい…が、異様な雰囲気。聖なる神殿は全て人の手でつくられたといふ。

あの、聖紋とかいう魔法の仕掛けは使わずに彫ったとか。

木彫りの熊とかならみたことがあるし、中国の石仏とかで、岩山か何かを彫つたものもテレビでみたことはあるけど…

こんな深くまで掘り込んで崩れない、つまり固そつな岩石を彫るのはどれだけの労力なんだろ？。

巨大な岩石にこれほど細工をするつてどれだけ人件費かけてるんだ？

現代の先進国では人権もあって、人の命は地球より重いとか建前上言われてるけれど。

ここでは、命が高くないから人件費も安い…ということなのか？ 有り体にいっちゃんれば命にも値段があると…身分制度が厳格な階級社会。

それがこの華麗すぎる手間暇のかけっぴりの根拠であるなら、気が重い話だ。

あの、馬車の事故が頭を掠めて行く…。

ともかく、こんな巨大な岩山を神殿にわざわざ仕立てなければならない理由って何だろ？

…考えもつかないな。

段々と暗く足下が見えにくくなつてきた。

「聞いてもいいですか？」 「はい？」

「急に王との対面を仰るその心の準備はどうして出来たのでしょうか？」

ミカエルさんが私を、澄んだ瞳で見てくる気配がした。

数歩分下の階段に立つているミカエルさんは身長バランスがちょ

うどこい。

「何か、ありましたか？」

やんわりとミカエルさんが言つてくれる。

……それ、いまここに聞くんですか……。

神官王に会いたいって軽くお伺いたてみたらアッサリOKだったですよ、ね……

ミカエルさん、大事なことは後で確認するタイプなんだろうか？

この間の、マサハルもどきとの一件。これはミカエルさんは知らない。どうやらあの男は離宮の防犯セキュリティをやすやすと突破して侵入し、その存在を気づかせることなく脱出もしていつたらしい。

ミカエルさんはもちろん、キャサリアも知らない様子だった。

忽然と消えたマサハルもどき。いったい彼はどういう存在なのだろうか……確かに『案内人』とか自分で名乗っていたが。

……案内人って？ この世界の？

よくわからない。

数真の口真似なんてして、なんとも悪趣味なヤツだった。あまりいい感情を彼にもてそうもない。

唯一の手掛かり……この世界から脱出するための……だから嫌つてはダメ

メなんだけど、彼と冷静に対峙するのは難しそうだ。

こんなコトありましたよーなんてミカエルさんに言えない出来事…いや事件だ。

その前の、赤髪の男との思い出したくもない事件は、キャサリアから連絡を受けているだらうから、詳しく述べられないとはいえばつちらりバしゃっている。

最悪だとしか言えない。

最初の馬車の事故については、ミカエルさんは何も教えてくれないし、私もあえて深く聞いていない。

怖すぎるのだ。自分のせいで誰かがもしかしたら…死んだかもしないなんて、この世界でどう償えばいいのだろう。

あまりにも問題が深すぎてあえて考えないようにしていた自分は大人として最低だ。

「いえ、私は名前もありませんし、この世界ではみなさん神官さまに名付けて頂いてるんですよね。だからあの、図々しいんですけどうせな王様に名付けて頂きたいなと」

ホントかいまで図々しいんだよ…と思しながらも図々しく考えておいた言い訳を口にする。

もといた世界でならともかく、この世界の常識を知らない私は何かやれば必ず他人に迷惑をかけている。いまのところは。

だから神官王に会つのも、どうなのかといふ気がかなりするが、元の世界に帰るために…そして数真に会つたまと自分に言い聞かせてや

つてきた。

もし、トリップが10代の頃だったら。

離宮でしばらく過ごしてあの赤髪狼男と嫌々お近づきになつて神殿の外側の街にいつたり、自分が出現した町に出掛けたり、とまだるっこしい手順を踏んだだろう。情報を固めて、数真を探しながらこの世界で生きていく算段をしたのかもしない。

強かに、逞しく、気が弱いくせに頑固なあの頃の私なら。自分の弱さに酔つて溺れていられた…

…「Jのゲームみたいな世界に。

ゲーム? そうか、これはゲームなんだ。

数真の、私へのあの狂おしい執着を取り戻せるか、どうかをかけた。  
それならいいじゃないか?  
ヒントは出てるんだし、怖いけど、もつときなりラスボスにアタッ  
クしてみよう。

どうなるか予測はつかない。もうこれ以上考えてもどうしようもない。  
30間近だといまさら新しい世界に馴染む気持ちなどさらさら  
なく、だからこんな思いきった行動力が出てしまつ。

ミカエルさんは美形、お世話になつてゐるけどそれだけ。赤髪の狼  
みたいな印象のあの男…名前は忘れかけたが、確かセラファイムとか  
言つたか、アレは最低だ。あの時ビビつてしまつた自分を殴りたい。  
後から腹立てたつて遅いのに自分のはつきりしない性格がうつとお  
しい。

私は、数真に会いたいだけだ。

あの頃の数真に。

「よい名前を頂けますよ」

ミカエルさんはいつのまにか歩きはじめていて私も後を追つてゆく。私の返事などはじめから大して興味なかつたかのごとくあつさりしている。

この人もよくわからない人だ。

「… わあ、着きましたよ」

扉が開く。

：側に厳めしい武装した門番も地獄の獄卒みたいな兵士もいなかつた。

拍子抜けした気分で、重そうな石造りの扉をミカエルさんに続いて広間の中へ足を踏み入れた。

石造りのドアなんて初めてだ。

ミカエルさんが扉の模様の一部に掌をあわせると、青い光りがそこから発光しゅっくりと周囲に広がった。私とミカエルさんを青い光りが包み、光りはキラキラとまとわりついたかと思うと唐突に消えた。

まるで打ち上げ花火の残光かといづようなあえやかな輝きだった。

「さあ、入りましょう」

：

息をのむ。

凄い。

これは……なんだ。

圧倒される。

「広いでしょう？」

ええ。まさか地下にこんな天井が高い広々とした広間があるとは。  
かなり度肝を抜かれた…

市民体育館位の広さはあり…ちょっととしたアイドルの「コンサート」へ  
らい開けそうだ。

この世界にアイドルがいるのか知らないけれど、ここには神殿だから  
ミサ？ 祈祷？ 降臨の儀式？

…とにかく神にまつわるなんらかの念仏といつか集会でも開く場所  
なんだらうか？

全校集会…なんて高校以来の懐かしい響きの風景を思い出す。まあ、  
通路が狭いから、そんな人数は危険で集められないだろうけど。

「いらっしゃりですよ、レディ」  
「す、すみません」

レディ、は…スペイン語ならセーラーリータ。日本語ならお嬢さん。  
未婚女性の一般呼称だ。  
恥ずかしいね…でもミカエルさんは騎士だから。

文句なんて言えません…

衣食住の元になる御方に逆らえるわけないじゃないか。今の私は单  
なる穀潰し。立場はわきまえてる。

今更ながらこの世界の言葉は日本語として脳内変換されて理解出  
来るから便利。

でも文字はかなり気合いをいれないとさっぱりわからない。ついで  
にミカエルさんの離宮にあつた書斎の本は読んでもいいと言われた  
が神語とか古代文字が混ざり過ぎてまったくわからなかつた。

よつてこの世界の基本的知識はミカエルさん頼み。忙しい彼に無理も言えず、トリップしてきて2ヶ月近くたつのにたいして知識は増えている。

…もといた世界の仕事…については考えないよつてしている。たぶんクビになつていてる…ね、うん。

舞台のよつて少し高くなつていてる場所を田指して歩くミカエルさんを追う。

舞台の脇にある一見普通のドアも、さつやと回じよつに聖紋の認証にて解除し通り抜ける。

聖紋つてこの場合、最新鋭のロックシステムみたいだ。静脈確認とか…顔認識とか…

「着きましたよ」

細い通路の先にあるドアを今度は普通にノックし、待つ。

やがて、ドアは開き招き入れられる。

：

「レディ？」

世界が、白くなる。

その瞬間、息を忘れた。

「…」

自分が、息をのんだきり動けなくなるのはとても不思議な現象だと  
思う。しかもそれを知覚しながらも全く動けない。

懐かしい人がいた。

「来たな…ミカエル」

振り向いた、その人は。

「はい。陛下。こちらがお話ししたご婦人です」

「異界からの稀れ人か…どうした?」

声も…

「レディ?」

ミカエルさんが何か声をかけてくれている。

「…ど…して…?」

その人から視線を外せられない。

胸が痛い。熱い。

身体中が、軋むように熱い。

唇が勝手に震えて声は私の意志を無視する。

こんなに、似ているなんて。

「か…ずま」

その人は訝しげに眉をひそめる。

「なんだ？ 具合が悪いならまたの機会にしてもいいが」

「レディ？」

似ている。

声も顔も。体格も雰囲気も。

不遜で傲岸な、でも纖細な… その強い輝きに煌めく茶色の妖しげな  
静かな瞳。

数真だ…

私の目の前、2メートル先にいた姿は。

まさにかつての数真そのものだった。

38神宣王～3（前書も）

少し暴力表現あります。

神官王。

コラードーマ大陸における最高神をまつる神殿を統べる神官長であり、かつ神殿のあるコマの街を支配する王でもある。

コラードーマのほとんどの地域は都市国家の単位であるが、辺境では村単位で自治制度が採られている。

コマの街自体はそれほど大きくはない。しかしコマには神殿があり、神官学校や各種商会の活動も盛ん、大都市との中継都市として栄えており活気に溢れている……と、少し知識を思い浮かべてみる。

「面白い顔をしている」

その神官王、ユシグ。

数真：ではない。

端正な線の細い纖細な容貌。だが男性的な色気に溢れた伸びやかな肢体は、神官長一族の民族的特徴なのだろうか。

ヨーロッパ系のミカエルさんやキヤサリアとは違う、アジア系。初めて見る。この世界で。

「あなたの顔……我が一族に通じる特徴がある……似ているな

威圧感にじりじりと圧される。

数真にそっくり……なの。」

安心出来るはず……なのに……

…

自分の顔が強張つてゆくのはなぜだらう。

「……」れほどとは、な……ミカエル、お前も人が悪い。この俺をたばかぬつもつだつたのか?」

「……え、滅相も」いやこません。私も初めは驚きましたよ。陛下」

「ふん……まあいい。そういうことにしてもいいやる」

私を映す茶色の瞳に吸い寄せられる。

剥き出しの拒絶の色。胸がギリギリと締め上げられるようになり緩やかにその感情に絡めとられていく。

思い返せる記憶の中の、数真の表情が勝手に脳内検索をれてゆく……

この男は、違う。

数真のこんな顔は見たことが、ない。正視するに耐え難い……なのになぜだか吸い寄せられていく。

「何も知らないとは氣楽なものだな」

ひとつ、つまらない話に付き合つてもうおつ、と男は爽やかな微笑をゆるり、と浮かべた。

「我が母も守護者であり異界人。この大陸の者なら知らぬ者はいない。

そして期せずして守護者として……私の伴侶となる者が、お前と同じ国からやって来た。ただし、お前より遙かに若く、美しいがな」

そしてまた一步、じちぢへ進んだ。  
王者はもう田の前に立つ。

「……では聞く。」

お前は何用でこの世界へ来たのか

剣呑に光る瞳。

……違つ。

違つ違つ違つ。

数真じや、ない。

「異界人にはなんらかの役割があり、その訪れ時には必ずや意味がある……そう信じられている。実際にそうであったしな、間違いはない。」

手が、伸びてくる。

「災厄を招く者よ」

数真の……いや、コシグの指に引き摺られるように乱暴に顎を引かれた。

「……」

「忌々しい……その貌<sup>かお</sup>その声も、何もかも、だ。なぜ今頃現れた！？」

「……ッ！？」

思いきりひきすえられ、アップになつた数真の……いや、ユシグの顔は信じられないほどの憎しみにたぎつている。

……ザンシ…

「あ……う」

石床に叩きつけるように払い落とされ、私はじこたま胸を打ち付けてた。

……かなり痛い。本当に息が止まつた。  
暴力を振るわれるのは思わなかつたから、ショックだつた。身体が震えてくる。ユシグはそんな私へ、忌々しげに顔を歪めた。どこか苦し気もある。

痛いのはよほど私のほうだが、何故か泣き出しそうに一瞬見えた気がして、私は彼を見上げていた。

：

荒い呼吸音。

私と、ユシグの。

這につくばつて見上ると、王者はフイと皿をそらした。

「チッ……チッ」

「陛下？如何しました？」

「何でもない。何だ？」

「「」の者の処遇ですが、いかがいたしますか？」

「…そ�だな、「」の顔を知る者は今はそつたへはないが…」

考えるそぶりはすぐに止まり、取り戻した冷酷で冷ややかな氣を私へと向け、低く言つた。

「「」の女を幽閉せよ

数真にそつくりな、怖いくらいに端正な纖細な顔。

その美しい顔に灯るのは憎惡の炎。

拒絶の意志。

「また離宮に… でしょうか？」

「それは生温い。ミカエル」

「は

「お前はこの女を俺に見せる以上、その処遇について重々承知で参つたのだろうが。たわけたことほぞくな」

「では…」

「「」の神殿の…処刑塔」

「もう使われておりませぬ。警備の者も誰もおりませぬが如何しますか」

「警備など要らぬ。私の聖紋をつければ何人もあるの塔には近づけまい?この顔に用があるのは俺だけだ」

足音。王者が来る。

這いつくばつたままの私の前で立ち止まつた。

「知つているか?処刑塔に入つた者は一度と城下には出られない。出る方法は2つだけだ。

死体袋に入つてでるか、刑場へ向かうためか、のな

彼を見上げている私に向けられるのは、誰もがつゝとりするような魅惑的な微笑み。

数真そのものにしか見えない衝撃に、私はビクリと震えた。

「幸運だな」

しゃがむ。伸ばされたその手はまた私に。私の頬を撫でてくれる。

撫でられて、背筋に震えが走る。こわいのか、何か、わからない:目を動かすことすら出来ず、でもこの男の瞳から反らすことも出来ない。なぜか優しい声色も、似ていないと想いたいのに、震える心は見つけたと叫び続けてとまらない。

数真…?数真…なのだろうか。

「お前は幸運だ。俺が飽きたまではいついたる。

……その顔に生まれたことをせこぜこ後悔するとい

……顔……？

王者がわざわざから繰り返してこる言葉で私は思い当たる節はない、  
いつそしひ困惑が深くなる。

「覚えておひれるだらうか  
……何を？

思わず聞き返しかねになつた。

ああ、でも。王者は私を見てはいない。正確にいふと、その潤んだ  
憂いに満ちた瞳には、私を通して別の誰かが映つてゐる。  
コシグはその誰かに向かつて語りかけているのか、独り言を言って  
いるのか。

「俺たちは何処までも一緒に……おのが命が死きたくなることもあると  
約束したな」

「忘れたとは言わぬ

たぶん質問するのは私ではなく、決めるのも私ではない。

「神は忘れてはいなかつた。逃げるだけ無駄だつた……」

甘やかな、脳髄に染みる掠れ声。ひと度聞くだけで、私の足下が暗く抜ける…絞首刑の仕掛けを連想する。それはただの錯覚なのか予知なのか、まるで見当もつかない。

「…顔を見せる」

震えるコシグの睫毛。輝きに揺らめく瞳。

「…憎いお前の顔を見るだけで、なぜこんなに俺の心は動搖する?  
…見事なまでに瓜二つだな」

彼の囁く甘い声は、やはり数真そのもの。  
切なくも狂おしい響き。

「Iの感触…」

抱き締められ、私の中を通り過ぎる甘い、囁き。

「逃がしあしない」

数真の匂い。  
懐かしい数真の匂い。

「俺は…絶対に許はしない。一度と俺を裏切らないよ!」しなければ、な

ユシグに抱き締められ甘やかに捕えられてゆく。  
懐かしいこの感触の名前を私は探し当てていた。

…おかえりなさい…

「…………姉上」

それは、狂おしきまでの執着といひ名の愛。

### 39 神官王へ4

…『姉さん…』

「姉上…あねつえ…」

ユシグの重みに息が出来ない。抱き締めてくる彼から逃げるよつて後退る…

ドン、と背中に当たる壁の感触に心臓がまた鼓動を早める。

「…ひよつ…」

「黙つていろ。声を出すな。姉上はそんな粗忽な声はあげぬ」

ユシグに指摘され私は固まつた。

「…同じ匂いがするな」

ユシグに壁に押し付けられている私とミカエルさんの視線が偶然ぶつかった。

こちらを見下ろしているのは…一点の曇りもない微笑を唇に刻んで佇む麗人。

…王に会いたいと言われたご自分を責めてくださいね。  
私は貴女を自分から王に差し出したりはしませんでしたしね…

と言つてこるかのような微笑を浮かべるミカエルさん。田の前で、

この展開になつていいのにその微笑……騎士さまも、とんだ腹黒一重人格者だつたつてことだと私は理解した。

しかし、今はそんなこと考へてる場合じやない。

「ミカエル。いつまで不粋をするつもりだ？」

「いえいえ、今から消えるところですよ？しかし共の一人はお付けしますから」

「ふん… キャサリアか」

勝手に話し合う二人。

ユシグは私を馬鹿にしたよつてジロジロ見ながら、ハツ、と息を吐いた。

「姉上に似ているのは入れ物だけだな。色氣もない、品位も姉上には当然遠く及ばぬ」

「その言い種はなんだ！…失礼な…」のドリ野郎！…

…と、口に出来たらさぞかしスッとするに違いない。

「…」

でも私は唇をきつく結んだだけだ。

勝手なことばかり言つて、なんなのこの王様！…と非常に悔しく思ひし、罵倒したい。本当は。

でも…反論、したら駄目だ。

感情的になつてゐる相手にそんな台詞は、火にさうに油をぶつかけるような行為。

この陰険王は、私に腹をたててゐる。自分を裏切つた姉上…に似てゐる私を。似てゐるだけで別人でしかないという事実を。

そんな、どうにもならないことに腹をたててゐる、子どもだ。

「どうした？何か言いたそудな？」

「…」

「つまらん女だ」

また私は唇を咬んで耐えた。

この…途方もない疲労感…数真に似てゐるのは顔だけだな、この王様。

数真是確かにネチネチしたところもある。腹黒いし二重人格。けど、こんなストレートに暴言を吐くタイプじやなかつた。

やはり、彼は数真じやないのだとあらためて思ひ。

「入れ物だけでもまだよしとしてやる。

どうせ、中身は本物ではないのは分かりきつたことだ。お前は姉上であつて姉上ではない。俺に隸属出来るだけ光榮と思え」

耳元で囁かれた。

黙つたままの私を一瞥して、反論がないことに満足げに微笑すると、

また家臣くと命令を再開した。

「ミカエル」

「は」

「IJの女は処刑塔にいれる…が誰にも覚へせぬな」

「恐れながら陛下…守護者にはじきに分かつてしまつかと思ひます  
が」

「…」

ジロリとコシグが睨むやいなや、騎士の柔らかな笑顔に一瞬緊張が  
走った。私は目を見開いた。

「だから?」

：機嫌の悪さを前面に押し出した声。

ミカエルさんが返事をするまでに少し間があったのは、気のせいじ  
やないと思つ。

「…いえ。わかりました…善処いたします」

「IJの件はお前の管轄にする。わかつたらりせつせと出でていけ。邪魔  
だ」

この王様のことが苦手なのか、肩を竦める仕種こそないが、そんな雰囲気の溜め息を微妙について、ミカエルさんはさわれと匂でいつてしまつた。

「… わて」

「シー？」

冷静に觀察してくる場合じゃない。コシグの体が覆い被さる体勢で私は壁に押し付けられたままだ。

「おかしな声をたてるなど言つていいだらうが

ぐい、と顎を掴まれる。

「……やけに挑戦的な瞳だな」

「氣の、せこですよ」

「くえ…」

… じの横暴な王様は私をどうするつもりなんだ。

姉上とやらの変わりに幽閉して、いたぶるつもりなんだらうか？かなりその人に対してもんだ愛情を持つているらしい。

私にそつくりだとうコシグの姉。

数真にそつくりなコシグ。これは偶然、なのだらうか？

「お前はどうして欲しい？」

「…え」

「寝台があるので床で睦みあつ」ともないだろ。せつせと来い

数真と同じ顔、同じ身体、同じ声に何故か身体が勝手に反応してしまつ。多分、顔が真っ赤だ。いい大人がこれくらいでたじろいでどうする。

腕をつかむやいなや、コシグは体の向きを変えて、後ろから抱き締めてきた。

「…な…！」

「首が弱いのか。姉上と同じだな」

「勝手に…首…舐めなつ…離して、下さ…」

「ああ、やうだな」

ベッドヘドサリと投げ出される。荷物みたいに乱暴に、コシグは私の身体を放した。

「何…」

「そんな欲情した顔で言つても逆効果だらつ。解らないとは、浅はかな女だ」

感情の高ぶりなど微塵もない恬淡とした口調と冷めた顔。

「…」

「喋らなければ分からないとでも思つたのか？」

雰囲気も何もあつたものじやない。

この既視感…確かに少し前にも離宮で似たようなことがあつた。

赤髪の狼みたいな男…

この世界の男はみんなこんな奴ばっかりなんだらうか…

いや。この男はもつとおかしい。

つこさつきまで、自分の姉への泥々した思い入れの延長線上に、私を見ていたのが。

今…ユシグの目は、私を見ている、ようく感じる。愛しい人にみてくれだけが似た存在、でしかない私として。

冷ややかに、計算深く。

「自分の立場を忘れてはいけないな…」

「立場…」

「…察しが悪いな、本当に」

思わず素でオウム返しをしてしまつた私を睨むと、やがて、見てい

る」ちらが蕩けてしまいそうな笑顔を浮かべるユシグ。男女ともに魅了される笑顔だ。ただし、喋ると台無しだが。

「まあ…いい。俺は自分から女は抱かない。姉上以外は肩でしかな  
いからだ。意味は解るか？」

「私に…どうしようと？」

「俺に気に入られなければお前の安全の保証はない。さて、お前は  
どうすべきかな？」

ベッドのスプリングが響く音もなくふんわりとユシグは私のすぐ側  
に座ってきた。とてつもなく卑怯なほどに艶やかな甘い笑顔を淫秘  
に薫らせて。

「ねえ、『姉上』？」

短めです。

仄かに落とされた照明。

神殿内の最奥。

厳かで、かつ濃厚な空気が漂つ。お香…たぶんハーブの薰りだ。

白い壁は壁紙も貼られず剥き出しのままだが、緻密な彫刻が為されており、まるで遺跡のような…ピラミッド…ファラオの棺の安直所みたいな雰囲気すらある。

その王様専用らしい、落ち着いた内装の控えの間。おそらく仮眠用のベッドはそれでもダブル程度の余裕がある。

こんな、おそらく神聖な所で、ベッドの上でうすくまる異界の女と、悠然とベッドに腰掛け見下ろしてくる、この世界の権力者…神官王、ユシグ。

数真によく似た男の妖しい笑みがますます深くなる。私の鼓動が乱れ始める。

こういうアダルトな雰囲気は心臓によくない。

「簡単な話だな」

「え?」

長い脚を組み直し、

「俺を誘惑してみればいい…そつだろ?」

ニツコリ微笑まれてしまつ...」の王さまほいきなり何を言い出すんだ。

「どうした？俺が怖いか  
い…いいえ…」

「その歳で男を知らぬ訳でもあるまい。恥ずかしがる必要性はないだろう」

二〇

いは... サラリと凄い事を... 言いました...

「それとも…俺では不満か？」

人を蕩けさせる魅惑の微笑。圧迫感はなはだしい」とこの上ない…  
色っぽい目線も重圧でしかなく。

：顔が同じだからか、やっぱり数真と重なってしまう。かといって視線を捕まってしまっているので、見たくもないのに凝視してしまっている私は、さぞ滑稽な表情をしているだろう。

「まさか…やり方を忘れたのかな？」

「なつ」

「もしくは経験が貪相か」

二〇一

「図星が」

・絶対、楽しんでいいの……！」の王様は……

「さあ」

ユシグの指が、私の手の甲に微かに触れた。  
いきなりの優しげな感触にビクリと私の背中が跳ねた。  
ゾクツとし過ぎて涙目になりながらも私は抗議を試みて声を張り上げた。

首とか手の甲とか…止めて欲しい。  
敏感なんだから…

「自分からは、触れないって、わざ…おつしゃいましたよね！？」

「やうか？しかしもう忘れたな」

悪気のない耽美な含み笑い。しかしそこに悪意を感じてしまうのは、  
私のうがちすぎなんだろうか？

いや違うと思つ。絶対に。

「王様は随分忘れっぽいのですね……」

なんだか凄く疲れてきた…

「どうでもこい」とはすぐに忘れる。俺は気が短い。お前が大根み

たに転がってる役者ならわざと見切るだけだが

「私は…役者じやありませんよ…」

「そりだな。役者ならわざと見切るだけが

…私…、何しに王様に会いに来たんだっけ…？」

そり、この世界に数真を探しに来たんだ。

…まあ…見つけたけど。

中身全く違う別人だけど。

姉への尋常でない思い入れ満載な、どう俺様だけど。

「何をぼんやりしている?」

王様の端麗な御尊顔が不審げにじっと見つめていた

「ヒツ！」

「奇声はやめろ」

「す、すみません…」

王はフツ、とキザつたらしく私を見つめてくる。

「…そりやつて黙つていれば、…嫌味なほどに姉上そのものだな」

「…あの」

出来るだけ、平静に平静に…私は尋ねた。

「王様は…その…姉上様がお好きなのですね」

「お前には関係なからう」

「…そうかもりませんけど…」

「お前に姉上の替わりをしようとほいわん。俺の姉上は誰にも替わりは出来ないからな」

それは何回も聞いているので、私は大人しく言葉を待つた。

「どうしてお前を幽閉するのか…知りたいか?」

「え」

「気に入らないな…お前のらつらつと話し相手をして俺をやり過ごせると思ってていいのか?一度同じことを言わせんな」

手強い…。シャドウスキル撃沈…好きなだけ喋らせて話をやめようとしてみたけど、結構カンが鋭い…さすが王様。

「だから、俺をその気にさせてみる」

キスされすれの近さで迫るユシグの、ほころんだ唇とまなざしが、落ち着かない。色気が、凄い…むせそうだ。

「その姉上にせつくりの顔で、俺に懇願し、媚びてみる。『お詫しつけに体を開いて見苦しく愛を囁け』

「……」

「幻滅させてみる」

「痛い。ぐいぐい髪を捕まれ……もつ唇が触れそつた近さだ。

「もしくは、この俺を溺れさせてみる。」

お前でこの心を満たし、お前以外を考えられなくしてみる……まあ無理な話か。しかし、期限は三ヶ月やる

「え?」

「お前が俺を愛するか、俺がお前を愛するか。そのどちらでもなければ……」

「な、なれば……?」

「処刑する……お前を」

婉然と微笑まってしまった

……。

## 40神官王～5（後書き）

初顔合わせ…初対決終了。主人公に対して、ヨシグは数真よりワイ  
ルドな振る舞いが多いみたいですが、彼なりに葛藤があつた故です  
ので…

中身は一人とも腹黒ドSなのは…同じなんですが。

#### 4-1 塔の中で

忘れていたわけじゃない。

怒涛の重低音、倒れた馬車、群がる人々。

その、風景。

『いの女のせい』…

渦巻く言葉。憎しみの田、怖れる顔を…忘れるなんて都合のいい話はない。

薄々わかつてはいた。

イレギュラーな存在は、本来的には排除されるべき存在。周りに影響を与え、善きにつけ悪しきにつけ、変化を起こす役割を担う存在だからだ。

ヨーロッパの中世では、村で病気が流行ると、旅人が持ち込んだとしてその有無を問わず病弱いとして、むごたらしく処刑されたといふ。日本でだって、橋をかける時に、旅人を川の神への鎮守を願う贊にえとして生きたまま沈められた話もある。

吉凶どちらかわからない存在なら、取り合えずどうするかなんて人の思考はどここの世界でも変わらないということなのだろうか。

…わからない理解できないうなら殺してしまえ。

もしくは利用する。

町の人たちはおそらく前者だろ？

王は、性格的に後者か。でもそれだけじゃない。と思つ。

ユシグは私を…いつたいどうするつもりなのか。

誘惑してみるとか幻滅せるとか、歪み過ぎていてよくわからない…彼の意図が。

今はいない彼の姉と、ユシグとの間に何があつたのだろ？

それがポイントだが…ミカエルさんもメガネも教えてくれない。話をばぐらかすのが上手いんだよ一人とも…

閉じ込められた処刑塔は、その昔、反逆罪や重要政治犯を処刑まで隔離しておいたためのものだといつ。

「…困りましたね」

座つたまま片足を組んで、ポツリと呟いたメガネ男へ、私は向き直つた。

「いひなるとまさか予測してた？」

「ん…？」

うーん、と首を捻るメガネ。

処刑塔とやらに幽閉されてから三日。いきなり現れたメガネ男に、

このわけのわからない展開についての文句まじりに情報収集をしていた。もちろん騒いだりはしません。監視されてるから大声は出せないし。部屋は一人で過ごすには広いけど、キヤサリアが一緒に落ち着かないで、彼女には基本外にいてもらっている……これは別に私の自由度が上がった訳ではなく、聖紋で封印されて出られない私が放置されてる状態なだけだ。食事時や向こうが用がある時にしか姿をみせる」とはない。侍女とこより刑務官に近いかと思つ。

そう。外に出られないのだから放置ではなく、幽閉、拘束…だ。もう三日も外に出ていない。太陽の光りを浴びないとジタミンロが活性化されなくて骨に悪いんじゃなかつたかな？

ああ、骨の心配よりか命の心配が先だ。他にいろいろと考えることがあるだろう、私よ。

「あなたが神魔王に会えつてこつから会つたのに、とんだ藪蛇やぶへびじゃないの…」

他に誰もいないし、あながちハツ当たりとはいえない内容だと思つしね。

あ…もう顔がポーカーフェイス保てない。メガネがあんまりにも香氣なので、調子が狂う。

「まさかこいついう事態になるの、分かつてたの？あんたは

「そんなに怖がらなくとも大丈夫じゃない？」

ほら、と部屋を指し示すのにつられて、私も辺りを見回してしまつた。

「そんな悪い待遇とも思えないけど…ベッドも家具もついてるし、暖房もあるじゃない？」

「そういう問題じゃない」

ボソッと突っ込むがメガネは意に介した様子もない。

「離宮にいた時とあまり変わらないしね……そういうればミカエルは何か言い訳してたの？」

「あ……まあね」

淡々としかし確實に嫌なところを突いてくるな。

ミカエルさん……に、裏切られてたんだよね……

彼にしたら、別に私を守る義務はもとからないから裏切るっていうのは違うか。

結局のところ、私は今まで離宮に保護、ではなく『幽閉』されていたらしかったということだつた。

これは言葉の使い方の違いというよりも、私がどう位置づけられているか、意味合いの問題だ。王の姉に似ている異界人が、何も知らずにウロウロしててはいろいろとマズイだろうそれは。だから王の騎士であるミカエルさんとしては当然の行為に違いない。

「申し訳ありませんとは言ってたけどね」

「あの男もあれでなかなか腹黒いからなあ……」

あんたもね。

そう言いたかつたけど喋り疲れてきた。小声で話すのはけつこうじんどい。

「私の期限内にモビリティがなればここにこんだから、やる気はまつりましたですよ~。」

そうだね? か?

さつさむのことを考えていたのだがどうも引ひ掛かつて仕方がない。

いぐり考えたところで、あの王様の意図なんて私にはわからないだけだ。

このかなりクセのあるメガネ男と会話するのもいい加減疲れてきた。

ギヤーギヤー感情的にぶつける氣力はないこともないが、初めからムダとわかりあつた行動を選ぶ余地余つていろわけでもない。

「うーは、あんたが言つてた、『次のヒント』の出番じやないのかと思ひけどね… とつとつと話しなさい」

「ん まだ三回なのにもうギブアップする? 少し待つてみたらいつなのかなあ? 慌てない慌てない」

何を待つところのか?

教える気などないのじゃないかこの男は。さすがに反論しようと額に怒りマークをつくり浮かべながら口を開きかけた…その時。

「来てやつたぞ」

ふいに、聞こえてきた声。

「ま、さか…？」

嫌な汗が一瞬で毛穴から吹き出し、動悸、血圧低下をきたしたようだ。

固まって、それでもギギギ…と私は扉を振り替えた。この声はホント心臓に悪い。

ユシグ王は、厳然とした佇まいで背後…なんともう私のすぐ後ろに立っていた。

いつたい…いつのまに…?

「何を慌てている?」

「ヒー…?」

「お前は俺を見て奇声しかあげられないのか?」

「す、すみません…?」

「かなり不快だ」

…冷ややかな表情を真正面から向けられると、感情がまるい」と強ばつてしまつ。美形特有の硬質な近寄りがたさに磨きがかかってるのは、ユシグの態度もあるが、豪奢な金の刺繡が施された時代かがつた白の衣装のせいかもしれない。

ゆつたりとした長めの上着にズボン?にブーツ。肩からマントを垂らしている。まさに王様の格好だ。  
似合つておりさすがに迫力がある。

ともあれ、私はさつそく対面直後に王の機嫌を損ねたのは確かみた  
いだ。

「そうですか…すみません」

「…ずいぶん余裕だな」

下賤な者だといいたげな目付き…馬鹿にされてるのはよくわかる。  
先日に感じた怒りは不思議と沸かない。

「約束通りお前に会いに来てやったのだ。この三日、少しは策を考えていたか?」

「…」  
こうじつ、顔も良く地位も若さもあり、自分の能力に絶対の自信がある人種。

神に愛されたような彼らを、崇拜するか嫌悪するかの極端な反応を選んでしまうのは、彼らが常人離れしているから。自分たちとは違うから。どちらの反応も彼らを突き放した行為といえなくもないのだけど。

そんなきらびやかなスペックは個人の幸せとは関係がない。  
しっかりと顔を上げ、正面から王を見る。

「あなたの言う通りになれば、解放して貰える確証は?」

「ないな。しかし処刑はいつでも出来るが

「あなたを信じじろとこうことですか」

「やうこい」とになるかな……ああ、お前には独り言を話す趣味はあるのか？」

いきなりの話題転換。

「は？」

コシグの冷ややかな表情が揺らぎ……フッ、と微笑が浮かぶ。まるで花がほころんだような華やかな魅惑的な微笑だが……

「頭の回転も悪い」

目が笑っていない。

綺麗な笑顔はよくみれば邪悪な瞳の色づきが妖しげだ。

「独り言ではない……なら先ほどは誰かと話をしていたのか？」

メガネか！！

コシグ王の姫場に忘れていたが、一番に気にしなければいけないとこうだそこーたぶん大丈夫そうだからと氣にもしていなかつた……

慌てて振り返る……のを自肅する。

当然……彼がいなのは、わざわざ見なくても王の様子でわかる。

「何があつたのだ？」

妖しげな微笑が微かな苛立ちを仄かに含みはじめた…

#### 4-1 塔の中で（後書き）

中途ですが長くなつたので…中途半端なといひで申し訳ないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2273u/>

---

ミニマムビターハート

2011年11月30日11時54分発行